
満洲の記憶

第8号

補強される植民地の記憶

——秦源治「大連・旅順絵葉書コレクション」解説——

..... 大野絢也、佐藤仁史、梅村卓

秦源治「大連・旅順絵葉書コレクション」目録

..... 収集：秦源治

編集：大野絢也、佐藤仁史、梅村卓

洪熙の残照（2） 執筆：奥村松平

解題：菅野智博、甲賀真広、今井就稔

編集：奥村武彦、上田裕子、甲賀真広

ある女性クリスチ안의満洲回想 語り：石川光子

編集：甲賀真広

寄贈資料目録 / 活動記録 / おしらせ

「満洲の記憶」研究会

2021年10月

補強される植民地の記憶

——秦源治「大連・旅順絵葉書コレクション」解説——

大野絢也、佐藤仁史、梅村卓

本稿で解説する「大連・旅順絵葉書コレクション」（以下、コレクション）は、大連からの引揚者である秦源治氏の収集したものであり、2016年に「満洲の記憶」研究会へ御寄贈いただいたものである。以下では、絵葉書を史料として扱うことの意義や本コレクション形成の経緯などについて紹介した上で、本コレクションの特徴及びその意義について述べる。

絵葉書の史料的意义

絵葉書はメディア研究においてエフェメラ（ephemera）メディアと称され、分類されることがある。エフェメラにはポスター、パンフレット、チラシ、マッチ箱などが含まれ、これらは新聞や雑誌とは異なってメディアとしての生命が短く、必要がなくなれば捨て去られてしまい、基本的には長期的に保存されることを意図されないものである⁽¹⁾。それゆえに今日まで体系的には保存されておらず、公的な機関による保存よりも、コレクターの個人的な蒐集の結果として今日まで残されてきた場合があるに過ぎなかった。秦氏のコレクションも、そうした個人の営

みの一環として捉えることができる。そして、このような性質を有する史料であるからこそ、絵葉書は従来歴史研究においても、またメディア研究においても研究の対象になり難いものであった⁽²⁾。ところが、2016年に立命館大学国際平和ミュージアムで行われた特別展「絵葉書で旅する大日本帝国——日中関係と日本人」や、2019年に早稲田大学會津八一記念館で催された展示会「イメージの中の日本と中国の近代——ラップナウ・コレクションから」のように、近年になって絵葉書史料を利用した展示会が催されたことは、研究関心や社会的関心がエフェメラに向けられるようになったことを示している⁽³⁾。そして我々「満洲の記憶」研究会も、文献史料のみならずビジュアル史料を幅広く収集・分析することにより、多面的に満洲の集合的な記憶を明らかにしていきたいと考えている。絵葉書はその格好の史料となりうるものである。

日本において絵葉書が流通するきっかけとなったのは、1900年に逓信省が私製葉書の発行を許可したことである。これはヨーロッパと比べてもそれほど遅れてはいなかった。19世紀から20世紀初頭

にかけて世界的な絵葉書ブームが訪れていた。その背景の1つは、当時の印刷技術では新聞に精彩な写真を印刷することができず、写真を大量に流布する機能を絵葉書が担っていたからである⁽⁴⁾。したがって、絵葉書は現在とは違い当初は風景や名勝などではなく、主として事件や出来事を撮る報道メディアとしての役割を果たしていた。そしてそのような状況と結びつき絵葉書が爆発的に普及するきっかけになったのが1904年に起こった日露戦争であった。日露戦争は帝国日本が海外へと「雄飛」するきっかけとなり、またその後日本が満洲に呪縛されるきっかけともなったものである。毛利康秀によれば、通信省が発行した日露戦争の戦勝記念絵葉書は全8回47種類にのぼり、私製の絵葉書を含めて4500種にも達したという⁽⁵⁾。絵葉書は写真で戦争の場を写し出すことにより、この膨大な数の絵葉書を手にした人々を出来事の証人にし、「銃後」の大衆と戦争を結びつけたのである⁽⁶⁾。秦氏が蒐集した大連・旅順の絵葉書のなかに日露戦争物が多く含まれているのは、以上のような絵葉書の歴史を看過できない。絵葉書は商業的に流通したものであり、絵葉書に写し出された図像は人々の関心を引きつけ、売り物になると評価されていたことを意味する。それゆえ絵葉書の図像を分析することにより、当時の日本社会の関心のあり方やムードを知る手がかりとなる⁽⁷⁾。

ただし、当然ながら絵葉書の持つ機能

は報道メディアとしての役割のみに止まらない。現代日本人が旅先で旅行の記念として絵葉書を送るように、絵葉書はパーソナルなメディアとしても使われた⁽⁸⁾。通常それは差出人と受取人という2者の間のやりとりであるが、絵葉書にはまた極めて個人的な思いが込められる場合がある。なぜならば絵葉書に描かれた場所や投函した場所が、その人間にとって記念すべき地であったり、ノスタルジーを感じる地であったりすることがあるからである。現代でも訪れた場所の絵葉書を記念に購入するのは珍しいことではないが、戦前の外地からの引揚者にとってその意味は決して軽くない。

また、絵葉書に写された満洲の風景や名勝、都市の通りの様子などは近代以降の日本の集合的な記憶を内包したものであり、そこで暮らし生きた人々の生活を垣間見ることができる。それゆえ、絵葉書の図像とそこに写し出された特定の地域との関わりに焦点を当てることにより、絵葉書は地域研究の重要な史料ともなりうる。この面について言えば、松重充浩ら日本大学の研究チームによりハルビン絵葉書のデータベース化がなされ、絵葉書に写し出された場所を実際のハルビンの地図で確認できるという面白い試みが施されている⁽⁹⁾。類似する絵葉書のデータベースとしては、愛知大学・国際中国学研究センターの「中国戦前絵葉書データベース」、京都大学・東南アジア地域研究所の「戦前期東アジア絵はがきデータ

ベース」でも満洲に関する絵葉書が公開されている⁽¹⁰⁾。様々な課題はあるにしても⁽¹¹⁾、これらのデータベースにより、地域研究の一環として絵葉書を史料として用いる基礎的な環境が整いつつある。また、秦氏のコレクションを整理するにあたって、これらのデータベースが大いに裨益したことに言及しておきたい。

コレクションの作成者と収集背景

次に、秦源治氏の簡単な経歴と本コレクションが収集された経緯について述べよう⁽¹²⁾。秦源治氏は1926年に大連で出生し、1933年に大連常盤小学校、1939年に大連第2中学校に入学した。中学時代から郵便趣味を始めており、大連中央郵便局に通って1万5～6千枚もの切手を収集していた。1944年に南満洲工業専門学校鉅山工学部に進学し、1945年4月に弓長嶺鉅山で勤労働員に従事した。徴兵のため大連に戻ったところで終戦となり、1947年3月に大連から実家のあった三重県へ引揚げた。それまでに収集した切手は、引揚げ時の荷物検査で没収されることを懸念して全て手放したという。

三重県への引揚げ後は生活安定のために秦氏は郵便趣味から離れていたが、子供の養育などがひと段落した1975年頃から絵葉書や切手などの収集を再開した。特に大連や旅順に関する絵葉書や切手、パンフレットなどは、古本屋やメールオークションで見かけると手当たり次第に

買い集めたという。名古屋市内に当時秦氏が通っていた古書店があり、そこで購入した絵葉書が多かった。購入対象は基本的には自らの「故郷」である大連や旅順の風景が映っているものであり、最も大きな基準はそこにあった。したがって、凡そ大連・旅順に関連した絵葉書であれば、使用済みであるかどうかにかかわらず収集したとは秦氏は述べている。しかし、その他の朝鮮や満洲、青島など植民地都市の絵葉書も見かけていたものの、そこまで手を広げることはせず、自分が実際に体験して覚えている風景を追い求めた⁽¹³⁾。

かような証言から判断すると、本コレクションは、大連・旅順に関して発行された絵葉書のうち相当数を網羅している可能性もある。注意しなければならないのは、収集の大きな原動力が自己の体験に即した「懐旧」、すなわち本人の言を借りれば、「大連にいたときの素晴らしい思いを、記憶の限り保存するため」⁽¹⁴⁾にあり、絵葉書の収集は、記憶にある「故郷」大連の心象風景を再構築することを追求するという性質も濃厚であったことである。この点を踏まえれば、他の絵葉書コレクションや刊行された資料集などとの対照作業は不可欠である。

コレクション寄贈の経緯

続けて、今回の絵葉書史料の整理及び目録作成に至った経緯を紹介する。2013

年12月初旬に本研究会の有志が山口県下関市の大連神社を訪問した際、宮司の水野直房氏から大連の絵葉書や学校の関連史資料を収集している場として、20世紀大連会議及びその中心的な人物として甲斐正人氏と秦源治氏を紹介いただいた⁽¹⁵⁾。両氏は大連神社を中心とする引揚者の交流活動で接点を持っていたため、その人的ネットワークを通じて本研究会も様々な知遇を得ることができた。

2014年1月12日には大野絢也、菅野智博、佐藤仁史が秦源治氏の自宅を訪問した。その際、20世紀大連会議での活動について話を伺うなかで、膨大な大連・旅順に関連する史料群を秦氏が所蔵していることを知った。さらに本研究会は複数回にわたる訪問を重ね、秦源治氏の経験や史料を収集された経緯などについてインタビューを重ねた⁽¹⁶⁾。多数の絵葉書史料は大変貴重なものであるため、整理・分析作業を行いたい旨を打診したところ、秦源治氏よりご快諾いただき、2016年7月に本研究会へ寄贈していただいた。その後、絵葉書史料の電子化・整理作業を進めるのと併行して、大野絢也、佐藤仁史、梅村卓によって目録作成作業を行い、目録の公開に至ったのである。なお、本コレクションは本研究会より一橋大学図書館への寄贈乃至寄託が予定されており、これによってより多くの人々に利用の便が及ぶことを期待している。

絵葉書史料から得られる基礎情報

それでは、史料としての絵葉書を読解するための前提となる様々な基礎情報をどのように読み取るかについて概観してみたい。写真の面について言えば、いつ、誰が、どのような視角から、どのような意図で対象となった風景を撮影したのかを読み取ることが必要となる。これらをすべて特定するには大きな困難が伴うが、先に挙げた「ハルビン絵葉書検索システム」における取り組みが多くを示唆を与えてくれよう。多くの場合、絵葉書にはキャプションが附されており、そこから写真がどの風景を撮影したものであるのかを比較的容易に知ることができる。また、キャプションには英語訳も附されている場合が多く⁽¹⁷⁾、日本語圏以外からの渡航者が満洲に立ち寄った際に利用できるように配慮されていたことは、絵葉書が国際的な宣伝材料としても発行されていたことが垣間見られる。また、同じ地点の翻訳も発行された会社によって異なることを比較するのも一興である。全体を概観した限り満鉄によって発行されたもののキャプションは翻訳もしっかりしたものである印象が強く残った。

通信欄の面からも多くの情報を入手することができる。本コレクションには使用済みのものも数点含まれており、そこには宛先や差出人に関する情報、通信内容も含まれているが、本コレクションは特定の宛先のものを収集したものではな

いので、かような情報から読み取れることはほとんどないと考えてよい。この面で読み取れる大きな情報は、①発行者や印刷所に関する情報、②商標に関する情報、③検閲に関する情報である。

①の発行者については、「北野商店発行」のように発行者名が明示されている場合が多いが、“MANUFACTURED BY TAISHO”

(大正写真工芸所)の如く部分的に表記されている場合もある。多く現れる発行者として、大正写真工芸所、北野商店、小林又七支店⁽¹⁸⁾、大連船塚商店、旅順川谷商店、南満州鉄道株式会社などが挙げられる。本コレクションの目録作成過程において印象的であったのは発行者が実に多様であったことである。詳細な分析は今後の機会に委ねたいが、発行地の別(内地、外地)や発行主体(政府機関／植民地統治機構、民間企業・商店)はさしあたり重要な指標となると思われる。発行地の別について言えば、大阪屋号書店⁽¹⁹⁾、北野商店、大連船塚商店、旅順川谷商店、などのように大連や旅順などに基盤を持つ企業や商店が発行していたものが大半を占めていたものの、他方で大正写真工芸所のように日本国内の発行者によるものも数多く含まれている。なお、大正写真工芸所は全国ならびに外地の絵葉書を印刷・発行していたことで知られていた。同工芸所はコロタイプ方式の製版方法という優れた印刷技術を有しており、そのことが他社に卓越する背景となったと指摘されている⁽²⁰⁾。発行主体として先に民

間企業・商店を挙げたが、対して政府機関・植民地統治機構としては、満鉄以外に旅順要塞戦記念品陳列場、関東庁大連取引所、大連市役所などがあった。

発行者とは別に印刷・デザイン会社の名前が明示されている絵葉書もある。このようなものには“PRINTED BY”などと表記されており、会社名として東京図按印刷社、凸版印刷株式会社、精版印刷株式会社などが挙げられる。このうち、神田に本社が置かれていた東京図按印刷社がデザイン・印刷した絵葉書には“TOKYO DESIGN PRINTING KANDA TOKYO”とあり、デザイン・印刷業者と発行者とが分業していたことが判る。



図1 大正写真工芸所の登録商標

②の商標も重要な情報である。そもそも発行者名や印刷者名が明示されていない絵葉書もあるが、登録商標があれば、そこからこれらの情報が判明する。ただし、切手を貼る箇所に登録商標があるため、使用済みの絵葉書の場合は切手を剥がさない限り判別不能である。登録商標

を例示的にみてみよう。大正写真工芸所の登録商標は鳩のマーク（図1）であり、複数の会社にデザイン・印刷を供した東京図按印刷社は「千鳥印」と記された商標を用いていた（図2）。興味深いのは、小林又七の大連支店が発行した絵葉書に附された商標では中国の城門が象られており（図3）、外地での販売網に基盤を置いていた同社の有り様を象徴するかのようである。



図2 東京図按印刷社の登録商標

検閲に関する情報も記されている。「旅順要塞司令部御許可済」「旅順要塞司令部検査済」「旅順要塞司令部 同鎮守府允許、不許複製」などと記されており、日付が明示されている最も古いものは1929年4月12日、最も新しいものは1941年10月7日である。絵葉書に対する検閲制度については現段階では不詳であるため⁽²¹⁾、

具体的にどのような検閲が入ったのかを絵葉書のみから知ることは難しい。



図3 小林又七大連支店の登録商標

ただし、一端を垣間見られるものが本コレクションにも収録されている。図4と図5とを見比べていただきたい。これらは郊外の景勝地として著名であった老虎灘を写したものであるが、海へと突き出た岬が特徴であり、いくつかの絵葉書には波立つ海岸部分と併せた構図で岬部分が修められている。加工を施していないのが図4であるが、旅順要塞司令部より許可を得た図5においては岬の部分に加工が施されており、地形が著しく変化してしまっている。岬上にある小山が測量上での情報を提供しかねないことを危惧した旅順要塞司令部がそのままでの掲載を許可しなかったものと推測される。

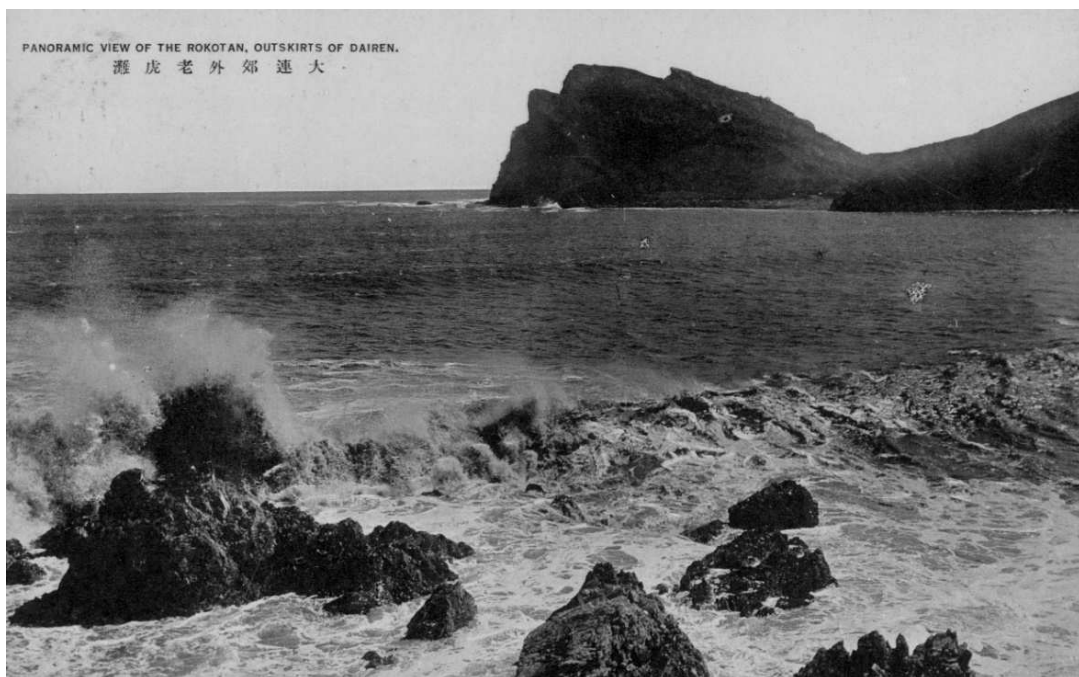


図4 老虎灘の絵葉書

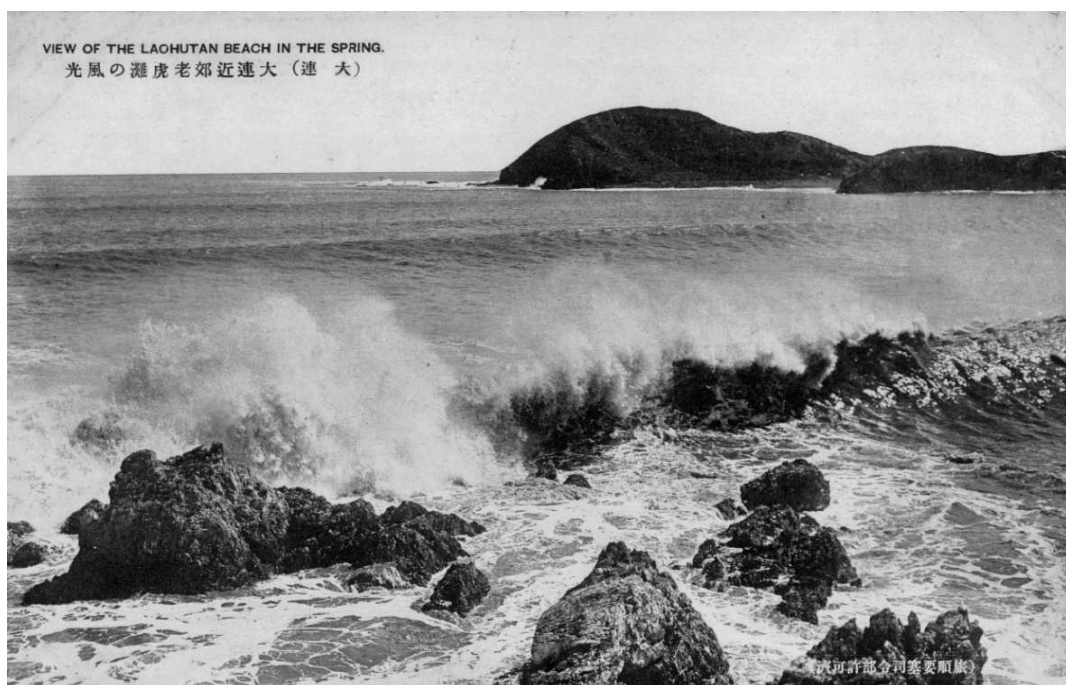


図5 加工が施された老虎灘の絵葉書

今後の課題——むすびにかえて

本コレクションの面白さは、コレクション収集者の詳細なライフヒストリーや収集の経緯・方法がわかるのみならず、本コレクションをはじめとする様々な史料の収集と引揚者のコミュニティとの相互作用が垣間見られる点にある。秦氏が絵葉書の収集を始めた当初はあくまでも個人で鑑賞して楽しむことを目的としていたものの、1999年に甲斐正人氏の主宰する20世紀大連会議の存在を知って加入し、同会の活動への参与を深めていくことが大きな転機となった。20世紀大連会議の主催者の甲斐正人氏は秦氏のコレクションを高く評価し、同会の刊行物に積極的に掲載するようになった。両氏の間に発生した共感の基盤となったのは肌感覚の現地経験であり、20世紀大連会議での刊行活動を通じて大連や旅順に関する記憶が会員の間で共有され、それぞれの記憶が補強されたり、創造されたりしながら、同会の集合的記憶が形成されていったのである。20世紀大連会議での活動に関して秦源治氏は「大連会のような大きな組織よりも、自らの所有する資料を最大限使ってくれる20世紀大連会議の方がありがたかった」と述べている⁽²²⁾。

また、秦氏のコレクションは研究者にも知られることとなり、彼らとの共同で執筆した『大連ところどころ』も出版された⁽²³⁾。しかしながら、本書はもっぱら20世紀大連会議が秦氏所蔵の諸史料に依

拠して編纂した刊行物のみに依拠しており、秦氏が収集した諸史料や秦氏の活動の中で生成されたエゴドキュメントが活用されているわけではない。また、史料の収集者としての秦氏のライフヒストリーが踏まえられていないという点において、史料批判の点においても問題がないとはいえない。これらの問題点を丁寧に踏まえ、秦氏が関わった刊行物の編纂過程を追跡していけば、秦氏が提供した史料から引揚者コミュニティが何を読み取り、何に共感をしたのかを読み解くことが可能になる。この点について言えば、例えば、20世紀大連会議の定期刊行物であった『The Great Connection』の「はじめに」や「おわりに」において直截に語られている関連史料収集への思いや大連へのノスタルジーなどは好個の手がかりとなろう⁽²⁴⁾。

以上を概括すれば、本コレクションの整理・読解——本コレクションそのもののみならず、これらがどのように転載され、どのように捉えられたのかをも読み解くこと——は、個人の記憶が引揚者のグループに共有される過程において、どのように個々の記憶が強化されたり、変化したりしたのか、換言すれば絶えず創出される集合的記憶の有り様を読み解く上で、極めて興味深い作業なのである。

註

⁽¹⁾ エフェメラについては土屋礼子「エフェメラとしての戦時宣伝ビラ——FEL0 資料の場合」

『戦争とメディアそして生活』〈アジア遊学 111 号〉勉誠出版、2008 年、に詳しい。プロパガンダの視点から満洲国におけるエフェメラメディアを分析したものに、貴志俊彦『満洲国のビジュアル・メディア——ポスター・絵はがき・切手』吉川弘文館、2010 年、がある。

(2) 佐藤健二によれば、絵葉書研究は戦後空白の期間が続き、1980 年前後より小森孝之『絵葉書 明治・大正・昭和』国書刊行会、1978 年、や柏木博『肖像のなかの権力 近代日本のグラフィズムを読む』平凡社、1987 年（なお本稿では講談社学術文庫 2000 年版を参照した）、などの研究が出されるようになったが、それぞれが異なる専門領域から絵葉書を論じたことにより、相互に関連しあう体系的な研究にならなかったという。佐藤健二『風景の生産・風景の解放——メディアのアルケオロジー』講談社、1994 年、23-25 頁、を参照。同書第 1 章は「絵はがき覚書」と題され、研究史の整理と論点の提示がなされている。

(3) この 2 つの展示会では、アメリカのコレクター・ラップナウ氏の膨大なコレクションから絵葉書を含む多様なエフェメラメディアが紹介された。同氏のコレクションを利用した研究として、二松啓紀『カラー版 絵はがきの大日本帝国』平凡社、2018 年、がある。

(4) 毛利康秀「絵葉書から読み解くハルビンと日本人——ハルビン絵葉書の社会的意味」『近現代東北アジア地域史研究会 NEWSLETTER』第 26 号、2014 年。

(5) 毛利康秀「絵葉書のメディア論的な予備的考察」『愛国学園大学人間文化研究紀要』第 15 号、2013 年。

(6) 柏木前掲『肖像のなかの権力 近代日本のグラフィズムを読む』85-121 頁。

(7) 田邊幹「メディアとしての絵葉書」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第 3 号、2002 年、を参照。

(8) 田邊幹は絵葉書が販売者（作り手）から不特定多数の購買者へ、差出人から受取人へという二重のメディア性を帯びていると指摘している。田邊前掲「メディアとしての絵葉書」。

(9) ハルビン絵葉書検索システム

(<http://ahj.chs.nihon-u.ac.jp/harbin/>)。

同データベースについては松重充浩・千葉正史・林幸司「日本大学文理学部情報科学研究所所蔵『ハルビン絵葉書（黒崎コレクション）デジタルアーカイブ』構築の試みについて」『近現代東北アジア地域史研究会 NEWSLETTER』第 20 号、2008 年、で詳細に紹介されている。

(10) 戦前期東アジア絵はがきデータベース

(http://app.cseas.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000022PPC)。

同データベースを構築した貴志俊彦は同氏編『地域情報学の創出』〈アジア遊学 113〉勉誠出版、2008 年、の「戦争とメディアをめぐる歴史画像デジタル化の試み——満洲国ポスター&伝単データベース」『戦前期、東アジア絵はがきデータベース』の使い方において、絵はがきを含めた非文字資料のデータベース化の必要性やその可能性について紹介している。

(11) 毛利康秀は各研究機関の選択的な収集によりまだ収集されていない絵葉書が大量にあること、発行時期や発行所に関する情報が不明であることが多いこと、佐藤健二が指摘したように各専門領域からばらばらに研究されていること、

データベースが孤立して連携が進んでいないことなどを課題として挙げている。毛利康秀「歴史イメージとしての絵葉書——研究の動向および社会的意味の再検討」『日本大学文理学部情報科学研究所年次研究報告書』No. 20、2020年。

⁽¹²⁾ 秦源治氏の詳細な経験や記憶については、秦源治「一少年の大連記憶」『満洲の記憶』第5号、2018年、も併せて参照されたい。

⁽¹³⁾ 大野絢也「秦源治氏インタビュー記録」2021年7月1日電話での聴き取り、未定稿。

⁽¹⁴⁾ 「一少年の大連記憶」47頁。

⁽¹⁵⁾ 20世紀大連会議の活動については、佐藤仁史・大野絢也「20世紀大連会議会報『The Great Connection』記事目録」『満洲の記憶』第5号、2018年、や、佐藤仁史「ふるさとの語り方——大連引揚者2世の編纂物にみる満洲の記憶」佐藤量・湯川真樹江・菅野智博編『戦後日本の満洲記憶』東方書店、2020年、において詳しく紹介している。

⁽¹⁶⁾ インタビューの一部は、すでに大野絢也・尹国花・菅野智博「一位日本少年の大連記憶——秦源治先生訪問記録」『口述歴史』第14期、2016年、として発表している。

⁽¹⁷⁾ なお、本コレクションにはフランス語によるキャプションもあった。英語キャプションも質は様々であり、明かに綴りのミスが存在するものや、全く関係のない内容のキャプションが附されているものもある。

⁽¹⁸⁾ 「小林又七」とは軍事出版で知られた川流

堂を継いだ二代目又七のことを指す。大連にも支店を構えていた。『人事興信録』〈第8版〉人事興信所、1928年。

⁽¹⁹⁾ 大阪屋号書店と外地における図書販売については、湯川健一「大阪屋号書店小史」『愛知大学国際問題研究所紀要』第153号、2019年、で論じられている。

⁽²⁰⁾ 大正写真工芸所の印刷技術については、太田宏一「大正写真工芸所の歴史」『2013年度特別展 絵葉書 そのメディア性と記録性』和歌山大学紀州経済史文化史研究所、2013年、19-22頁、参照。

⁽²¹⁾ 満洲国国務院弘報処によるマス・メディアの検閲・統制については、貴志前掲『満洲国のビジュアル・メディア』吉川弘文館、2010年、173-178頁、を、1940年に制定された登録写真制度については、竹葉丈「宣伝と統制——満洲国国務院弘報処と登録写真制度」竹葉丈編『異郷のモダニズム——満洲写真全史』国書刊行会、2017年、を参照。

⁽²²⁾ 大野絢也・佐藤仁史ほか「秦源治氏第3回インタビュー記録」2014年12月5日採訪、未定稿。

⁽²³⁾ 秦源治・劉建輝・仲万美子『大連ところどころ——画像でたどる帝国のフロンティア』晃洋書房、2018年。

⁽²⁴⁾ これらの史料のうち刊行史料は佐藤前掲「ふるさとの語り方」で用い、文中ではエゴドキュメントの存在についても言及されている。

秦源治「大連・旅順絵葉書コレクション」目録

収集：秦源治

編集：大野絢也、佐藤仁史、梅村卓

凡例

- ・本目録では、絵葉書に記載されている情報を、日本語タイトル、欧文タイトル、発行者、備考の順に記載した。なお備考には、印刷やデザインを担当した会社名や旅順要塞司令部の検閲の有無、検閲時期などを補足情報として記載した。
- ・IDは大連に関連する絵葉書について1の番号、旅順・金州に関連する絵葉書について2の番号を振って分類した。
- ・絵葉書がシリーズで複数枚にわたって発行されている場合、日本語タイトル冒頭にシリーズ名を挿入した。
- ・欧文タイトルのみがある場合、[日本語タイトルなし]と注記した。日本語タイトルと欧文タイトル双方がない場合、秦源治による補足を〔〕で示して記載した。
- ・備考において記載した検閲時期は、原史料で和暦表記であったものを西暦表記に統一した。
- ・旧字体や異体字は常用漢字、旧仮名使いは現代仮名使いに変換した。
- ・絵葉書の一次史料としての性質を踏まえ、固有名詞や名称の揺れ、欧文タイトルのスペルミスなど、各表現は原文のまま掲載した。
- ・「大連・旅順絵葉書コレクション」に含まれている切手や記念スタンプなどの史料に関する情報は紙幅の関係上、本目録の記載対象から除外した。

目録

大連の関連絵葉書目録				
ID	日本語タイトル	欧文タイトル	発行者	備考
1-1	(大連)常磐橋通り 大連観 光記念		大正写真工芸所	1938年11月17 日旅順要塞司令部 許可済
1-2	〔関東庁始政二十年記念 関東庁発売 大連埠頭〕			
1-3	〔大連って何処にあるの？ 関東州関連位置図〕		満洲日日新聞社	東京三荒印刷所印 行
1-4	大連市鳥瞰図		大連観光協会	旅順要塞司令部許 可済、日本名所図 絵社印行
1-5	大連電気鉄道線路図		大連船塚商店	
1-6	〔日本語タイトルなし〕	THE MAP OF DAIREN CITY		
1-7	大連之印象 流れ入る文化 埠頭全景	IMPRESSION OF PORT DAIREN DAIREN PIER.	大正写真工芸所	1936年6月3日 旅順要塞司令部許 可済
1-8	大連之印象 海洋さして 岸壁の船出	IMPRESSION OF PORT DAIREN QUAY, DAIREN.	大正写真工芸所	1936年6月3日 旅順要塞司令部許 可済
1-9	大連之印象 美しい欄干 日本橋	IMPRESSION OF PORT DAIREN NIPPON- BASHI, DAIREN.	大正写真工芸所	1936年6月3日 旅順要塞司令部許 可済
1-10	大連之印象 店舗の輝き 浪速通り	IMPRESSION OF PORT DAIREN NANIWA-DORI, DAIREN.	大正写真工芸所	1936年6月3日 旅順要塞司令部許 可済
1-11	大連之印象 護国の鬼 忠 霊塔	IMPRESSION OF PORT DAIREN CHUREI-TO,	大正写真工芸所	1936年6月3日 旅順要塞司令部許

		DAIREN.		可済
1-12	大連之印象 栄えゆく巷 常盤橋通り	IMPRESSION OF PORT DAIREN TOKIWA- BASHI-DORI, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 6 月 3 日 旅順要塞司令部許 可済
1-13	大連之印象 尖端を行く 連鎖商店街	IMPRESSION OF PORT DAIREN CHAIN- STORES, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 6 月 3 日 旅順要塞司令部許 可済
1-14	大連之印象 巨人の面影 後藤新平伯銅像	IMPRESSION OF PORT DAIREN STATUE OF GOTO SHIMPEI, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 6 月 3 日 旅順要塞司令部許 可済
1-15	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・埠頭 の大観	GRAND VIEW OF PIER, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-16	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・日満 連絡船の入港	SNAP-SHOT OF PORT, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-17	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・埠頭 の賑ひ	SCENE OF PIER, DAIREN	大正写真工芸所	1936 年 6 月 3 日 旅順要塞司令部許 可済
1-18	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・埠頭 待合所の麗観	WAITING-HALL OF PIER, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-19	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・埠頭 待合所の街景	STREET VIEW FROM PIER, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 6 月 29 日 旅順要塞司令部許 可済
1-20	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・豆箱 運びの苦力達	SNAP-SHOT AT PIER, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-21	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・労働	NEST OF LABOU, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許

	者の峙碧山荘			可済
1-22	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・満鉄 埠頭事務所	PIER OFFICE OF S. M. R. DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-23	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・ロシ ア波止場	RUSSIAN PIER, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-24	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・満鉄 本社 の 偉 観	HEAD OFFICE OF S. M. R. DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-25	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・大連 神社 の 聖 観	VIEW OF DAIREN SHRINE, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-26	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・清趣 溢るゝ大広場	BIG CENTRAL SQUARE, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 6 月 29 日 旅順要塞司令部許 可済
1-27	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・大連 市役所 の 偉 容	SIGHT OF CITY OFFICE, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-28	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・ヤマ トホテル	YAMATO HOTEL, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-29	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・大山 通 の 盛 景	VIEW OF OYAMA-DORI, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-30	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・浪速 通 の 盛 観	VIEW OF NANIWA-DORI, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 6 月 3 日 旅順要塞司令部許 可済
1-31	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・殷盛 なる伊勢町	VIEW OF ISE-MACHI DAIREN	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-32	燦々たる文化の都市大連の	IN CENTRAL PARK,	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日

	彩色三十二景 大連・中央公園忠霊塔	DAIREN.		旅順要塞司令部許可済
1-33	燦々たる文化の都市大連の彩色三十二景 大連・中央公園の景趣	VIEW OF CENTRAL PARK, DAIREN.	大正写真工芸所	1936年7月16日 旅順要塞司令部許可済
1-34	燦々たる文化の都市大連の彩色三十二景 大連・国都の玄関大連駅	DAIREN STATION, DAIREN.	大正写真工芸所	1937年9月10日 旅順要塞司令部許可済
1-35	燦々たる文化の都市大連の彩色三十二景 大連・盛なる常盤橋通	TOKIWABASHI-DORI STREET, DAIREN.	大正写真工芸所	1936年6月29日 旅順要塞司令部許可済
1-36	燦々たる文化の都市大連の彩色三十二景 大連・常盤橋通の繁栄	TOKIWABASHI-DORI STREET, DAIREN.	大正写真工芸所	1936年6月29日 旅順要塞司令部許可済
1-37	燦々たる文化の都市大連の彩色三十二景 大連・連鎖街	CHAIN-STORE STREET, DAIREN.	大正写真工芸所	1936年6月29日 旅順要塞司令部許可済
1-38	燦々たる文化の都市大連の彩色三十二景 大連・小村公園の温室	AT PLEASURE-GARDEN, DAIREN.	大正写真工芸所	1936年7月16日 旅順要塞司令部許可済
1-39	燦々たる文化の都市大連の彩色三十二景 大連・小崗子大街の雑沓	VIEW OF SHOKOSHI, DAIREN.	大正写真工芸所	1936年7月16日 旅順要塞司令部許可済
1-40	燦々たる文化の都市大連の彩色三十二景 大連・地方法院	COURT-HOUSE, DAIREN.	大正写真工芸所	1936年6月19日 旅順要塞司令部許可済
1-41	燦々たる文化の都市大連の彩色三十二景 大連・関東州庁の偉観	GOVERNMENT OF KWANTOSHU, DAIREN.	大正写真工芸所	1937年8月25日 旅順要塞司令部許可済
1-42	燦々たる文化の都市大連の彩色三十二景 大連・星ヶ浦後藤伯銅像	HOSHI-GA-URA PARK, DAIREN.	大正写真工芸所	1936年7月16日 旅順要塞司令部許可済

1-43	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・星ヶ 浦海水浴場	AT HOSHI-GA-URA, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-44	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・周水 子飛行場	VIR-PORT AT SHUSUISHI, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 7 月 16 日 旅順要塞司令部許 可済
1-45	燦々たる文化の都市大連の 彩色三十二景 大連・甘井 子石炭埠頭	PIER OF KANSEISHI, DAIREN.	大正写真工芸所	1940 年 4 月 20 日 旅順要塞司令部許 可済
1-46	絵はがき 大連神社 石田 吟松画伯筆		大連市役所	1936 年 3 月 31 日 旅順要塞司令部検 閲済
1-47	絵はがき 大連日本橋 石 田吟松画的筆		大連市役所	1936 年 3 月 31 日 旅順要塞司令部検 閲済
1-48	絵はがき 大連中央公園 後藤真吉画仙筆		大連市役所	1936 年 3 月 31 日 旅順要塞司令部検 閲済
1-49	絵はがき 大連星方浦 後 藤真吉画筆		大連市役所	1936 年 3 月 31 日 旅順要塞司令部検 閲済
1-50	大連絵葉書第二輯 (大連) 欧都の情景を彷彿する大山 通の壮観、左方巍然たるは 遼東ホテル	BUSTLING VIEW OF OYAMADORI STREET AND RYOTO HOTEL (AT LEFT), DAIREN.	大連市役所	
1-51	大連絵葉書第二輯 (大連) 近代的色彩に富める大連電 気遊園入口	THE ENTRANCE OF THE DAIREN ELECTRIC RECREATION-GROUND WITH MODERN EQUIPMENT, DAIREN.	大連市役所	旅順要塞司令部許 可済
1-52	大連絵葉書第二輯 (大連) 大連近郊老虎灘の風光	VIEW OF THE LAOHUTAN BEACH IN THE SPRONG.	大連市役所	

1-53	大連絵葉書第二輯 (大連) 何んでも揃ふ小崗子小盗見 市場	THE BUSTLING VIEW OF SHOTORU-MARKET AT SHOKOSHI, DAIREN.	大連市役所	
1-54	満洲風俗 元宵		南満洲鉄道	凸版印刷株式会社 印刷
1-55	満洲風俗 胡藤		南満洲鉄道	凸版印刷株式会社 印刷
1-56	満洲風俗 画舫		南満洲鉄道	凸版印刷株式会社 印刷
1-57	満洲風俗 胡弓		南満洲鉄道	凸版印刷株式会社 印刷
1-58	満洲風俗 吹雪		南満洲鉄道	凸版印刷株式会社 印刷
1-59	年賀はがき(大連)大広場全 景		大阪屋号	
1-60	大連電気遊園 暑中御見舞			大正写真工芸所印 刷
1-61	大連市全景 大連全景(其 一)	THE PANORAMA DAIREN	日華堂書店	要塞司令部許可済
1-62	大連市全景 大連全景(其 二)	THE PANORAMA DAIREN	日華堂書店	
1-63	大連市全景 大連全景(其 三)	THE PANORAMA DAIREN	日華堂書店	
1-64	大連市全景 大連全景(其 四)	THE PANORAMA DAIREN	日華堂書店	
1-65	大連市全景 大連全景(其 五)	THE PANORAMA DAIREN	日華堂書店	
1-66	大連市全景 大連全景(其 六)	THE PANORAMA DAIREN	日華堂書店	
1-67	大連市全景 大連全景(其 七)	THE PANORAMA DAIREN	日華堂書店	
1-68	大連市全景 大連全景(其	THE PANORAMA DAIREN	日華堂書店	

	八)			
1-69	大連名所 (1) 大連大棧橋	1. THE GREAT PIER AT DALNY	大連船塚商店	
1-70	大連名所 (2) 大連日本橋 側面	2. NIHON BRIDGE AT DALNY.	大連船塚商店	
1-71	大連名所 (3) 大連電気公園地	3. THE ELECTRIC PARK AT DALNY.	大連船塚商店	
1-72	大連名所 (4) 大連西公園	4. THE WEST PARK AT DALNY	大連船塚商店	
1-73	大連名所 (5) 大連信濃町通り	5. SHINANO STREET AT DALNY.	大連船塚商店	
1-74	大連名所 (6) 大連南満洲 鉄道株式会社本社	6. THE SOUTH MANCHURIA RAILWAY CO., DALNY.	大連船塚商店	
1-75	大連名所 (7) 大連北公園	7. THE NORTH PARK AT DALNY	大連船塚商店	
1-76	大連名所 (8) 大連停車場	8. DAIREN STATION AT DALNY	大連船塚商店	
1-77	大連名所 (9) 大連発電所 (東洋第一の咽突)	9. THE CHIMNEY OF THE ELECTRIC CO., DALNY.	大連船塚商店	
1-78	大連名所 (10) 大連出雲大社	10. IDSUMO SHRINE AT DALNY.	大連船塚商店	
1-79	大連名所 (11) 大連児玉通り	11. KODAMA STREET AT DALNY.	大連船塚商店	
1-80	大連名所 (12) 大連露西亞 町海岸	12. THE SEASIDE OF RUSSIAN SR., DALNY.	大連船塚商店	
1-81	大連名所絵はがき第一輯 一、大連大棧橋	PIER OF DALNY.	大阪屋号書店	東京図按印刷社、 1916年2月15日 印刷、1916年2 月20日発行
1-82	大連名所絵はがき第一輯 二、大連神社	TAIREN SHRINE, DALNY.	大阪屋号書店	東京図按印刷社、 1916年2月15日

				印刷、1916年2月21日発行
1-83	大連名所絵はがき第一輯 二、大連民政署	THE DALNY CIVIL ADMINISTRATION OFFICE.	大阪屋号書店	東京図按印刷社、 1916年2月15日 印刷、1916年2 月22日発行
1-84	大連名所絵はがき第一輯 四、大連大山通	OYAMA STREET, DALNY.	大阪屋号書店	東京図按印刷社、 1916年2月15日 印刷、1916年2 月23日発行
1-85	大連名所絵はがき第一輯 五、大連正金銀行	SPECIE BANK, DALNY.	大阪屋号書店	東京図按印刷社、 1916年2月15日 印刷、1916年2 月24日発行
1-86	大連名所絵はがき第一輯 六、大連発電所(東洋第一の 煙突)	ELECTRIC POWER- HOUSE, DALNY.	大阪屋号書店	東京図按印刷社、 1916年2月15日 印刷、1916年2 月25日発行
1-87	大連名所絵はがき第一輯 七、大連児玉町	THE KODAMA STERRT, DALNY.	大阪屋号書店	東京図按印刷社、 1916年2月15日 印刷、1916年2 月26日発行
1-88	大連名所絵はがき第一輯 八、大連北公園	NORTH PARK, DALNY.	大阪屋号書店	東京図按印刷社、 1916年2月15日 印刷、1916年2 月27日発行
1-89	大連名所絵はがき第一輯 九、大連電気公園	ELECTRIC PARK, DALNY.	大阪屋号書店	東京図按印刷社、 1916年2月15日 印刷、1916年2 月28日発行
1-90	大連名所絵はがき第一輯 十、大連春日町日蓮宗大蓮	TAIRENJI TEMPLE OF NICHIREN SECT,	大阪屋号書店	1916年2月15日 印刷、1916年2

	寺庫裡	KASUGACHO, DALNY.		月 20 日発行
1-91	大連名所絵はがき第一輯 十一、大連西公園グラウン ドの遠景	THE DISTANT VIEW OF THE GROUND, WEST PARK, DALNY.	大阪屋号書店	1916 年 2 月 15 日 印刷、1916 年 2 月 20 日発行
1-92	大連名所絵はがき第一輯 十二、大連老虎灘ノウワー ターシユート	THE WATER-CHUTE OF ROKOTAN, DALNY.	大阪屋号書店	1916 年 2 月 15 日 印刷、1916 年 2 月 20 日発行
1-93	大連大棧橋	THE PLANK BLIDG OF DAIREN		
1-94	大連大棧橋	Tairen great plank roab	大連大原商店	
1-95	一千九百八年一月大連港結 氷之景	Ice of Jan. 1908 in Dairen Harbour.	SOUTH MANCHURIA RAILWAY COMPANY, DAIREN HARBOUR WORKS	THE TOKIO PRINTING CO
1-96	[日本語タイトルなし]	The S. S. Kobe Maru, South Manchuria Railway Co. s Shanghai Mail Liner.	SOUTH MANCHURIA RAILWAY COMPANY, DAIREN	
1-97	大連埠頭待合所玄関	FAÇADE OF WAITING PAVILION, DAIREN WHARVES.	大連市小林又七 支店	
1-98	欧亜の関門 大連埠頭船客 待合所の大玄関	CONFUSION IN FRONT PORTAL OF WAITING HOUSE, DAIREN PIER.		大連日華堂書店印 刷
1-99	大連・埠頭の大観	GRAND VIEW OF PIER, DAIREN	大正写真工芸所	1940 年 4 月 20 日 旅順要塞司令部許 可済
1-100	大連埠頭待合所の内部 大 連の玄関埠頭待合所の通路	The waiting room of Dairen wharf. The corridor of Dairen		1934 年 4 月 16 日 旅順要塞司令部検 査済

		Wharf.		
1-101	大陸の表玄関・大連埠頭	MAIN PIER, DAIREN, THE GRAND GATEWAY TO MANCHOUKUO	南満洲鉄道株式 会社	1940 年 2 月 23 日 旅順要塞司令部検 閲済
1-102	東洋一を誇る大連埠頭の壮 観	GRAND SIGHT OF DAIREN PIER, DAIREN.	大正写真工芸所	1936 年 6 月 29 日 旅順要塞司令部許 可済
1-103	大連埠頭待合所ノ入口並ニ 第三大埠頭	THE ENTRANCE OF THE WAITING ROOM AT DAIREN WHAEVES AND DISTANT VIEW OF THE 3RD GREAT WHARF		
1-104	大連大棧橋さき丸ノ景	THE PIER OF DAIREN.	北野商店	東京図按印刷社
1-105	(大連) 東洋一の完備を誇る 大連埠頭	PIER NOTED FOR THE MOST GRAND SCALE IN THE EAST. DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-106	東洋一の完備せる、大連埠 頭	THE VIEW OF DAIREN PIER, THE BEST FURNISHED ONE IN THE EAST.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-107	埠頭(大連)		南満洲鉄道株式 会社	精版印刷株式会社
1-108	大連大棧橋船車連絡	PIER OF DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-109	欧亜の関門大連埠頭船客待 合所	WAITING-HOUSE, DAIREN PIER.		1935 年 6 月 1 日 旅順要塞司令部許 可済
1-110	欧亜ノ関門東洋第一ノ埠頭 旅客待合所	THE WHOLE VIEW OF THE PASSENGERS WAITING HOUSE AT THE DAIREN WHARF		

1-111	東洋一ノ大連大埠頭 其ノ三	A VIEW OF THE LINER FOR SEIKING FROM THE DAIREN WHARF NO. 3		
1-112	飛行機上より鳥瞰した船車 連絡の完備した大連埠頭第一 パース	La Kajo de Dairen. Aera Foto.	大連中日文化協 会	1929 年 4 月 12 日 旅順要塞司令部許 可済
1-113	大連西埠頭ニ於ケル大豆船 積ノ景	Scenes on Dairen Wharves No. 2 : Loading Beans into s.s. "Maroa" at Section E, Main Quay. (Jan. 1909)	WHARF OFFICE. S. M. R.	Print. The Tokyo Printing Co.
1-114	東埠頭貯炭場荷役ノ景	Discharging of Coal on Coal Depot, East Quay, Dairen Wharves, (April, 1910.)	WHARF OFFICE. S. M. R.	Print. The Tokyo Printing Co.
1-115	大連埠頭輸入倉庫内雑貨保 管ノ景	Import Goods under custody in a Warehouse. on Dairen Wharves, (July 1910.)	WHARF OFFICE. S. M. R.	Print. The Tokyo Printing Co.
1-116	大連埠頭第十七号倉庫内部 ノ景	Interior of S. M. R. Warehouse NO. 17 (With an area of 162,000 sq. ft) (July 1910.)	WHARF OFFICE. S. M. R.	Print. The Tokyo Printing Co.
1-117	大連埠頭ニ於ケル郵船神奈 川丸揚ボイラー貨車直取ノ 景	Discharging of a boiler on the flat car, on Main Quay, Dairen Wharves, (July 1910.)	WHARF OFFICE. S. M. R.	Print. The Tokyo Printing Co.

1-118	大豆、豆粕貨車荷繰ノ景	Shifting of Bean and Bean-Cake from Warehouse to alongside the steamer, (Dec. 1910.)	WHARF OFFICE. S. M. R.	Print. The Tokyo Printing Co.
1-119	大連埠頭ニ於ケル郵船若狭丸檣内豆粕積込ノ景	Bean-Cake loaded into the hold of s. s. "Wakasa-Maru" at Dairen Wharves, (Jan. 1911)	WHARF OFFICE. S. M. R.	Print. The Tokyo Printing Co.
1-120	大連大栈橋大豆ノ景	PILES OF BEAN WHARF, DAIREN.		
1-121	満蒙三大特産ノ一大連ニ於ケル豆粕山積ノ実況	Soy-Bean Cake piles one of three great Manchu production Dairen pier		
1-122	大連倉庫内ノ豆箱(一山二千枚)(二百九十二山)(五十八万四千枚)(一万二千六百五十四トン)	BEAN CAKES IN A GODOWN AT DAIREN WHARVES (2000 MAI PER YAMA) (292YAMA) (584.000MAI) (17654 TON)		
1-123	大連埠頭に於ける特産物の積込	SHIPMENT CARGO-WORK AT THE WHARVES, DAIREN.		
1-124	世界に雄飛す東洋の都大連乃さん埠頭に於ける貨物積込中のはるびん丸の雄姿	DAIREN CITY, HAVE A GREATEST HARBOUR IN ORIENT AND BUSIDE TOWN IN KWANTOSHU.		
1-125	渡満客を満載せるねつか丸の大連港入港の盛観	DAIREN CITY, HAVE A GREATEST HARBOUR IN ORIENT AND BUSIDE TOWN IN KWANTOSHU.		

1-126	(大連)巨船織るが如き港内の盛観	THE GRAND SIGHT OF THE PORT WHERE GREAT SHIPS ARE BUSTLING. (DAIREN PORT)	大正写真工芸所	
1-127	(大連)巨船織るが如き港内の盛観	THE GRAND SIGHT OF THE PORT WHERE GREAT SHIPS ARE BUSTLING. (DAIREN PORT)	大正写真工芸所	
1-128	近代埠頭文明埠頭を押し、大連大埠頭 旅客待合所より望む繫留船の一部	DAIREN CITY, HAVE A GREATEST HARBOUR IN ORIENT AND BUSIDE TOWN IN KWANTOSHU.		1935 年 7 月 4 日 旅順要塞司令部許可済
1-129	大連名所埠頭ヨリ埠頭事務所ヲ望ム	A VIEW FROM THE WHARF OF DAIREN.		
1-130	(カメラの大連)岸壁に見ゆる動く大連埠頭の雄姿	Prospering Port of Dairen(Dairen)		1938 年 10 月 19 日旅順要塞司令部 御許可済
1-131	満蒙物資の吞吐港 大連埠頭の壮観	Grandem view of the Great Dairen whar hard the list of the Orient.		1935 年 6 月 1 日 旅順要塞司令部許可済
1-132	大連埠頭旅客待合所外部	VIEW OF OUT A WAITING-HOUSE FOR TRAVELLER, DAIREN WHARVES.	大正写真工芸所	
1-133	大連埠頭	WHARVES, DAIREN.	大連市小林又七 支店	
1-134	大連埠頭に於ける日満定期船ばいかる丸出帆の盛況	SPLENDID SIGHT OF THE DAIREN WHARVES.		大連日華堂書店印刷
1-135	満蒙物資の吞吐港 大連埠頭の壮観	Grandeur view of the Great Dairen whar head the list of the		1935 年 6 月 1 日 旅順要塞司令部許可済

		Orient.		
1-136	(大連)大連埠頭、豆粕積込 と乗船場露台	THE VIEW OF THE SHIPMENT OF THE BEAN CAKE AT THE WHARF AND THE VERANDA, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-137	大連港	Dairen Harbour.	南満洲鉄道株式 会社	
1-138	大連港	Water Front of Dairen	南満洲鉄道株式 会社	
1-139	東洋一を誇る大連大埠頭岸 壁に繫留の日満連絡定期船	DAIREN CITY, HAVE A GREATEST HARBOUR IN ORIENT AND BUSIDE TOWN IN KWANTOSHU.		1935 年 7 月 4 日 旅順要塞司令部許 可済
1-140	文化に輝く欧亜の関門大連 大埠頭に於ける日満定期連 絡船うる丸出港前の盛観	DAIREN CITY, HAVE A GREATEST HARBOUR IN ORIENT AND BUSIDE TOWN IN KWANTOSHU.		1935 年 7 月 4 日 旅順要塞司令部許 可済
1-141	(大連)出船入船の度に見る 埠頭の雑踏	SWARMING VIEW SEEN AT THE PIER AS SHIPS GOING OUT AND COMING IN, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-142	文化の交錯大連大埠頭、想 ひ出を乗せて母国に向ふ日 満定期船うる丸の出帆	DAIREN CITY, HAVE A GREATEST HARBOUR IN ORIENT AND BUSIDE TOWN IN KWANTOSHU.		
1-143	(大連)大連埠頭定期船出帆 の真景	THE VIEW OF THE DEPARTURE OF A LINER AT THE DAIREN WHARF.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済

1-144	露台より見たる定期船の出 港壯観	THE VIEW OF THE DEPARTURE OF THE LINER LOOKING FROM THE VERANDA, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-145	東洋第一ヲ誇ル大連大埠頭 定期船ウスリィ丸出帆ノ盛 況	SPLENDID SPECTACLE AT DAIREN WHARVES, THE GREATEST IN THE FAR EAST, ON THE DAY WHEN THE GREAT OCEAN LINER IS SAILING		
1-146	(大連)夕陽錦波を漂はす港 内の美観	THE BEAUTIFUL SIGHT OF THE RIPPLES REFLECTED BY THE EVENING SUNLIGHT (DAIREN PORT)	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-147	満鉄埠頭事務所仮建物	Wharf Office, S. M. R. Co., Dairen.	埠頭倶楽部	
1-148	大連埠頭旅客手荷物取扱所	Baggage Delivery Office, Dairen Wharves, (June, 1910.)	南満洲鉄道株式 会社埠頭事務所	Print. The Tokyo Printing Co.
1-149	大連特合所ヨリ埠頭外部雑 観	Cutward sight of the Pier seen from the Dairen waiting Holl		
1-150	大連名所 埠頭事務所			大連日華堂書店印 刷
1-151	大連 埠頭の偉観、満鉄埠 頭事務所	S. M. R. Co. office on the pier, Dairen	大正写真工芸所	
1-152	(大連)南満洲最大の大建 築、満鉄大連埠頭	THE VIEW OF S. M. R. CO. DAIREN WHARVES BUILDING, THE LARGEST ONE IN SOUTH	大正写真工芸所	

		MANCHURIA.		
1-153	大連満鉄埠頭事務所	S. M. R. WHARF OFFICE, DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-154	大連満鉄埠頭事務所	S. M. R. WHARF OFFICE, DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-155	大連埠頭港橋	BRIDGE MINATO BASHI WHARVES, DAIREN.	大連市小林又七 支店	
1-156	(大連) 宏大なる陸橋、大連 一の港橋	THE GRAND LANDING PIER IN DAIREN.	大正写真工芸所	
1-157	(大連) 満洲人下級労働者の 塹、碧山荘	HEKIZANSO, NEST FOR MANCHURIAN LABOURERS, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-158	(大連) バラック街寺見溝部 落の聳める風	DESPICABLE VIEW TAKEN IN BARRACK QUARTERS OF JIJIKO, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-159	大連取引所絵はがき 関東 庁大連取引所		関東庁大連取引 所	
1-160	大連取引所絵はがき 大連 取引所 重要物産市場		関東庁大連取引 所	
1-161	大連重要物産取引所	STAPLE PRODUCE EXCHANGE DAIREN.	大連市小林又七 支店	
1-162	(大連) 大商店、会社、銀 行、の櫛比せる大連山縣通	THE YAMAGATA-DORI IN DAIREN, THE STREET WITH A ROW OF BIG STORES, COMPANIES AND BANKS.	大正写真工芸所	

1-163	大会社巨商の櫛比せる大連 の山縣通	YAMAGATA-DORI, MOST MAIN STREET IN DAIREN, TO STANDS ABREAST OF HUGE MERCHANTS.		1935年6月1日 旅順要塞司令部許可済
1-164	(大連)山縣通に巍然たる税 関本館	THE HEAD HOUSE OF CUSTOMS AT THE DAIREN WHARF.	大正写真工芸所	
1-165	(大連)商業區中心、洋館櫛 比せる山縣通	STREET VIEW OF YAMAGATA-DORI, THE CENTRE OF COMMERCIAL QUARTER, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許可済
1-166	日満産業大博覧会絵はがき 大連港二於ケル社船大連丸 姉妹船河南丸		大連汽船株式会 社	(東京)凸版印刷株 式会社
1-167	日満産業大博覧会絵はがき 満洲高脚踊 姉妹船河北丸		大連汽船株式会 社	(東京)凸版印刷株 式会社
1-168	況太平洋平和博覧会絵はが き 本社社屋		大連汽船株式会 社	(東京)凸版印刷株 式会社
1-169	況太平洋平和博覧会絵はが き 大連港を出帆せんとす る社船奉天丸		大連汽船株式会 社	(東京)凸版印刷株 式会社
1-170	大連山縣通	YAMAGATA-DORI, DAIREN.	大連市小林又七 支店	
1-171	三井物産会社大連支店	BRANCH OFFICE OF MITSUI BUSSAN KAISHA, DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-172	夜の大連(山縣通)	THE NIGHT OF DAIREN.	大正写真工芸所	
1-173	大連名所 歌舞伎座	THEATRE KABUKIZA DAIREN	旅順東京堂	
1-174	大連表忠塔	A monument, Dairen	大連天野満書堂	
1-175	大連東公園内池畔	POND IN HIGASHI PARK		

		DAIREN		
1-176	大連憲兵分隊ト関東陸軍倉庫	STOREHOUSE OF THE GARREISON IN KWANTONG AND GENDARMERIE STATION, DAIREN.		
1-177	関東陸軍倉庫及大連憲兵分隊	KWANTUNG MILITARY RESERVE GRANA	大連市小林又七支店	
1-178	[日本語タイトルなし]	Head Office of South Manchuria Railway Company, Dairen.	SOUTH MANCHURIA RAILWAY COMPANY. DAIREN	ICHIDA OFFSET PRINTING CO. L' TD, OSAKA. TOKYO. & SHANGHAI
1-179	大連南満洲鉄道株式会社本社	NANMAN RAILWAY COMPANY LTD, DAIREN	東京丸ノ内株式会社青雲堂	
1-180	南満洲鉄道株式会社大連本社	HEAD OFFICE OF SOUTH MANCHURIA RAILWAY COMPANY, DAIREN.		
1-181	満洲陸軍倉庫大連支部	THE BRANCH OF MANCHURIAN MIRITARY WAREHOUSE, DAIREN.	大連船塚商店	
1-182	(大連)南満洲鉄道株式会社本社	THE HEAD OFFICE OF THE SOUTH MANCHURIA RAILWAY COMPANY, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-183	南満洲鉄道株式会社	THE SOUTH MANCHURIA RAILWAY CO.	大連市小林又七支店	
1-184	(大連)満洲平野の生命を制する満鉄本社の景観	VIEW OF THE HEAD OFFICE OF SOUTH MANCHURIA RAILWAY COMPANY, DAIREN.	大正写真工芸所	

1-185	(大連)南満洲鉄道株式会社 全景	THE FULL VIEW OF SOUTH MANCHURIA RAILWAY COMPANY. (DAIREN PORT)	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-186	大連満鉄図書館	THE S, M, R, LIBRARY, DAIREN.	大正写真工芸所	東京図按印刷社
1-187	大連満鉄本社図書館の景	LIBRARY S, M, R, CO., DALNY.	北野商店	
1-188	飛行機上より鳥瞰した大連 市の中心大広場公園とその 周囲	La Granda Placo, Dairen. —Aera Foto.	大連中日文化協 会	1929年4月12日 旅順要塞司令部許 可済
1-189	(大連)市街の中心、都市美 の典型たる大広場	CENTRAL SQUARE, JUST AS THE HEART OF THE CITY, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-190	大連大和ホテル屋上ヨリ見 タル大連市街(其一)	THE WHOLE VIEW OF DAIREN CITY NO. 1		
1-191	大連大和ホテル屋上ヨリ見 タル大連市街(其二)	THE WHOLE VIEW OF DAIREN CITY NO. 2		
1-192	大連大和ホテル屋上ヨリ見 タル大連市街(其三)	THE WHOLE VIEW OF DAIREN CITY NO. 3		
1-193	大連大和ホテル屋上ヨリ見 タル大連市街(其四)	THE WHOLE VIEW OF DAIREN CITY NO. 4		
1-194	大連市役所及大連民政署	MUNICIPAL OFFICE, DAIREN & CIRIL ADMINISTRATION OFFICE, DAIREN.		
1-195	(大連)大広場に巍然たる、 大連市役所の偉観	THE GRAND SIGHT OF DAIREN CITY OFFICE.	大正写真工芸所	
1-196	大連大広場 右 大和ホテ ル、左 市役所、中央 大 連医院	CENTRAL CIRCLE, DAIREN, RIGHT, YAMATO HOTEL, LE MUNICIPAL OFFICE,		

		CENTER, DAIREN HOSPITAL		
1-197	大連 新築大和ホテル	Yamato Hotel, Dairen	大連天野満書堂	
1-198	[日本語タイトルなし]	Yamato Hotel, Dairen.	SOUTH MANCHURIA RAILWAY COMPANY. TRAFFIC DEPARTMENT DAIREN	PRINTED BY THE MANSHU NICHINICHI SHINBUN
1-199	大連大広場大島閣下銅像	THE BRONZE STATUE OF GANERAL OSHIMA, DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-200	(大連)大広場に巍然たるヤマトホテルの偉容	BUILDING OF YAMATO HOTEL AT THE CENTRAL SQUARE, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許可済
1-201	大連の大広場大和ホテル玄関より朝鮮銀行を望む	The Chosen Bank as seen from Yamato Hotel, Dairen		1940 年 10 月 27 日旅順要塞司令部 御許可済
1-202	大連民政署	THE DALNY CIVIL ADMINISTRATION OFICCE.	大阪屋号書店	
1-203	(大連)輪奐美麗なる大連警察署	THE FINE BUILDING OF DAIREN POLICESTATION (DAIREN PORT)	大正写真工芸所	
1-204	(大連)ヤマトホテルーフより法院、警察、朝鮮銀行支店を望む	THE VIEW OF THE LAW COURT, POLICE OFFICE, THE BRANCH OF THE CHOSEN BANK LOOKING FROM THE ROOF GARDEN OF	大正写真工芸所	

		YAMATO HOTEL, DAIREN.		
1-205	朝鮮銀行大連支店	BANK OF CHOSEN BRANCH : DAIREN.	大連市小林又七 支店	
1-206	大連朝鮮銀行支店	THE BANK OF CHOSEN, DAIREN.		
1-207	関東庁通信局(大連)	KWANTUNG GOVERNMENT COMMUNICATIONS SUPERINTENCE BUREAU, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-208	大連大広場正金銀行	SYOKIN BANK DAIREN		
1-209	大連大広場遊園地	GRAND SQUARE DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-210	大連金融の中心、横浜正金 銀行	THE BRANCH OFFICE OF THE YOKOHAMA SPECIE BANK WAS THE HIGHEST ORGAN OF MONETARY CIRCULATION, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-211	大連東拓ビル 大広場の一 角に於ける白亜高層の大建 築物にて美観を添ふ	TOTAKU BUILDING AT GREAT SQUARE.		1940年8月27日 旅順要塞司令部御 許可済
1-212	大連ノ奥町通り	OKU-MACHI-DORI OF DAIREN		
1-213	大連実業倶楽部	FAMOUS ILACES AT DAIREN.		
1-214	大連ノ株式市場 五品取引 所	DAIREN EXCHANGE AND MARKET.		
1-215	大連株式商品取引所全景			
1-216	大連基督青年会ノ景	THE DAIREN YOUNG MEN'S CHRISTIAN		

		ASSOCIATION.		
1-217	大連 キリスト青年会	The Tarien Young Men's Christian Association	大連天野満書堂	
1-218	大連医院絵はがき 大連医院	Dairen Hospital	大連医院	
1-219	大連医院絵はがき 大連医院	Dairen Hospital	大連医院	
1-220	大連医院絵はがき 大連医院	Dairen Hospital	大連医院	
1-221	飛行機上より鳥瞰した東洋 一を誇る大連医院及その附 近	La Dairen Hospitalo. —Aera Foto.	大連中日文化協 会	1929 年 4 月 12 日 旅順要塞司令部許 可済
1-222	規模の宏大設備の完全 東 洋稀に見る 大連医院	WHOLE VIEW OF DAIREN PIER.		大連日華堂書店印 刷
1-223	内容、外観共に東洋一の完 備なれる大連医院(工費六百 餘万圓)	Dairen Hospital, Dairen		1940 年 10 月 27 日旅順要塞司令部 御許可済
1-224	南満洲鉄道株式会社大連医 院	THE DAIREN HOSPITAL TO SOUTH MANCHURIA RAILWAY CO.	大正写真工芸所	
1-225	大連出雲大社紳士芸娼妓材 木引之景(其二)	SINGERS DRAWING WOODS AT ISUMO TAISHA, DAIREN.		
1-226	大連神社	THE DAIREN SHRINE.	大連島川商店	東京図按印刷社
1-227	大連神社	DRIREN SHRINE, DALNY.	大阪屋号書店	東京図按印刷社
1-228	大連神社ノ景	THE DAIREN SHRINE		
1-229	大連神社	THE DAIREN SHRINE		
1-230	大連神社	DAIREN JINSHA (SHINTO SHRINE)		
1-231	大連神社		大連市役所	
1-232	木ノ香モ神々シイ新装ナル 大連神社	Sublime Dairen Jinja newly built shrine		

		Dairen		
1-233	大連の大連神社	DAIREN SHRINE AT DAIREN CITY		1940 年 12 月 18 日旅順要塞司令部 御許可済
1-234	大連神社神馬並ニ神輿庫		大連市小林又七 支店	旅順要塞司令部許 可済
1-235	大連新築本派本願寺関東別 院其一	THE KANTO-BETSUIN OF THE HOMPA-HONGANJI, DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-236	本願寺大連幼稚園児童	THE KANTO-BETSUIN OF THE HOMPA-HONGANJI, DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-237	(大連)大連若草山、西本願 寺関東別院	THE KANTO BRANCH TEMPLE OF NISHI- HONGAN-JI (TEMPLE) NO THE WAKAKUSAYAMA, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-238	大連常安寺	TEMPLE' JOAN-JI', DAIREN.	大連市小林又七 支店	
1-239	大連近江町	OHMI STREET, DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-240	大連近江町満鉄社員宿舎	BOARDING OF MEMBER S. M. R. CO. ,	北野商店	東京図按印刷社
1-241	大連若草山方面ノ一部	DIRECTION OF MT- WAKAKUSA, DAIREN.		
1-242	大連播磨町通	HARIMA-CHO, DAIREN.	大連市小林又七 支店	
1-243	大連測候所	THE DALNY METEOROLOGICAL STATION.	北野商店	東京図按印刷社

1-244	大連若草山観測所	COMPLETE VIEW OF THE WAKAKUSAYAMA OBSERVATORY, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-245	大連ノ大連劇場	DAIREN THEATRE IN DAIREN.		
1-246	大連劇場	VIEW OF A THEATRE AT DAIREN.	大正写真工芸所	
1-247	日本橋の全景	SIDE VIEW OF NIHON BRIDGE, DAIREN (DALNY).	大連杉田写真館	
1-248	大連日本橋側面	NO. 2 NIHON BRIDGE AT DAIREN		
1-249	大連日本橋	"NIPPON-BASHI" IN DAIREN CITY.		
1-250	大連ノ名所日本橋	THE SPLENDID AND IMPOSING BRIDGE OF THE NIHONBASHI, DAIREN.		
1-251	美麗なる大連日本橋	THE SPLENDID AND IMPOSING BRIDGE OF THE NIHONBASHI, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-252	大連日本橋ノ夜景			
1-253	美麗なる大連日本橋	THE SPLENDID AND IMPOSING BRIDGE OF THE NIHONBASHI, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-254	大連俱樂部	THE DAIREN, CLUB.		
1-255	戦役記念 大連鉄道提理本部			
1-256	戦役記念 大連予備病院			
1-257	大連海軍防備隊司令部 大			

	連旧ロシヤ教会堂			
1-258	大連海軍船渠 大連市街眺望			
1-259	大連露西亜町海岸ノ景	SEA COAST ROSHA MALHI DAIREN		
1-260	[日本語タイトルなし]	South Manchuria Railway Company's Yamato Hotel, Dairen.	南満洲鉄道株式 会社	
1-261	大連南満洲鉄道株式会社大連医院	DAIREN HOSPITAL.		
1-262	大連病院小児科	THE DAIREN HOSPITAL.	東京神田錦町山 本写真館	
1-263	大連児玉街	KODAMA STREET DAIREN		
1-264	大連児玉町			
1-265	(大連)満蒙物産の諸品を蒐むる満蒙物産参考館	THE MANMO BUSSAN SANKOKAN, THE MUSEUM EXHIBITING THE PRODUCTS IN MANCHURIA AND MONGALIA, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-266	満鉄地質調査所 同標本室の一部 関東州産渦巻状石灰岩(模様地)			
1-267	大連児玉町ノ満蒙資源館	"MANMOSHIGENKAN" EXHIBITION BUILDING OF INDUSTRAY, DAIREN		1934年11月23 日旅順要塞司令部 御許可済
1-268	(大連)市の文化施設を飾る資源館の外容	HOUSE OF RESOURCES GIVING GOOG SERVICE ON MANCHURIA, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-269	大連北公園	NORTH-PARK, DAIREN.	大連大阪屋号	大連日華堂書店印

				刷
1-270	大連北公園	KITA PARK, DAIREN.		
1-271	大連北公園	Kita Park Taireu Tairen.		
1-272	大連北公園	NORTH PARK DAIREN.	大連市小林又七 支店	
1-273	大連市北公園	The Kita Park, Dairen.		
1-274	大連 北公園養禽場	(前半の部分破 損)north park, Tairen	大連天野満書堂	
1-275	大連乃木町	NOGI STREET DAIREN		
1-276	南満洲鉄道保線事務所	S. M. R. CO. ,	北野商店	東京図按印刷社
1-277	大連露西亜町ジャンク波止 場	THE DAIREN ROSHIA- MACHI WHARF.	大正写真工芸所	
1-278	千橋万帆の偉観大連露西亜 町波止場ジャンクの輻湊	RUSSIAN-STREET WHARF IN DAIREN.		大連日華堂書店印 刷
1-279	大連北大山通り海岸支那シ ヤンク船碇泊ト貨物陸揚ゲ ノ盛況	CHINESE JUNKS AT THE SEA SHORE, KITAOYAMA STREET, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-280	(大連)ジャンクにて埋れる 大連露西亜町波止場	THE RUSSIAN WHARF HAS A SWARM OF JUNKS, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-281	大連露西亜町波止場	JUNK WHARF, DAIREN.	大連市小林又七 支店	
1-282	(大連)露西亜町波止場に群 るゝジャンク	JUNK GATHERING AT PIER OF RUSSIAN QUARTERS, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-283	(大連)軌條無数に並び敷く 大連駅構内の壮観	THE GRAND SIGHT OF DAIREN STATION COMPOUND, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-284	大連発電所	ELECTRIC POWER		

		HOUSE, DAIREN.		
1-285	大連発電所	ELECTRIC POWER HOUSE, DAIREN		
1-286	夜の大連 月影に光る幾條 の軌道、駅構内	THE MOONLIGHT VIEW OF THE DAIREN STATION COMPOUND, TO LAY RAILWAYS, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-287	大連満鉄発電所	THE S. M. R. ELECTRIC- POWER HOUSE, DALNY.		東京図按印刷社
1-288	大連満鉄発電所	The Manchuria Ry. electricity power house, Tarien	大連天野満書堂	
1-289	大連海軍ドック			PRINTED BY YAMAKA
1-290	大連満洲船渠株式会社船渠	MANCHURIA DRY DOCK CO'S DRY DOCK ADMITTING STEAMER FOR REPAIRS.	大連市小林又七 支店	
1-291	瓦斯開業記念 満鉄大連瓦 斯工場全景	General View of Dairen Gas Works, S. M. R. Co.	南満洲鉄道株式 会社瓦斯作業 所、北明洋行写 真部	
1-292	瓦斯開業記念 満鉄大連瓦 斯工場レトリート室	Rotorts of Dairen Gas Works, S. M. R. Co.	南満洲鉄道株式 会社瓦斯作業 所、北明洋行写 真部	
1-293	瓦斯開業記念 満鉄大連瓦 斯工場ホルダー	WHOLE VIEW OF DAIREN NIPPON-BASHI	南満洲鉄道株式 会社瓦斯作業 所、北明洋行写 真部	

1-294	大連の名所日本橋の全景	WHOLE VIEW OF DAIREN NIPPON-BASHI		1934 年 11 月 22 日旅順要塞司令部 御許可済
1-295	大連監部通り			
1-296	大連満州軍倉庫			
1-297	大連監部街		東京神田錦町山 本写真館	
1-298	大連監部通り	CREAT DAIREN NO 27 KANEU STREET	日華堂書店	
1-299	大連名所 監部通			大連日華堂書店印 刷
1-300	大連市東郷町	Togomachi street, Dairen.		
1-301	大連松公園	PINE-PARK, DAIREN.	大連大阪屋号	
1-302	大連露西亜町より市街全景 を望む(其三)	Whole View of Dairen City.		
1-303	大連日本橋全景	VIEW OF NIHON BRIDGE AT DALNY.	大連船塚商店	
1-304	大連大山通り	GREAT DAIREN NO20 OYAMA STREET	日華堂書店	
1-305	大連市大山通り	VIEW OF OYAMA STREET AT DAIREN.	大連市小林又七 支店	
1-306	大連大山通	NO. 4 OYAMA STREET AT DAIREN		
1-307	大連大山通	OYAMA-DORI, DAIREN.		
1-308	モダン大連郵便局			大連日華堂書店印 刷
1-309	モダン大連郵便局玄関の一 部			大連日華堂書店印 刷
1-310	(大連)壮麗無比、大連日本 橋と其の附近	THE FINEST BRIDGE, THE NIPPON-BASHI (BRIDGE), AND ITS	大正写真工芸所	

		NEIGHBOOR-HOOD, DAIREN.		
1-311	日本橋の橋頭に美彩を飾る 大連中央郵便局	Central Post office and Nihonbashi Bridge		
1-312	大連ノ郵便局ト大山通り	OYAMA STREET AND POST OFFICE, DAIREN.		
1-313	大連 日本橋ホテル	NIHONBASHI HOTEL, DAIREN.		
1-314	大連電話局自働電話交換開 始記念絵葉書 大連電話局 全景 自働電話機 大連電 話局自働電話交換開始記念		満洲通信協会	
1-315	大連電話局自働電話交換開 始記念絵葉書 自働交換機 室 伊集院関東長官 杉野 通信局長 大連電話局自働 電話交換開始記念		満洲通信協会	
1-316	大連大山通り三越と郵便局	POST OFFICE AND MITSUKOSHI DAIREN.		
1-317	紳商軒を並ぶ屈指の商業 地 大連の大山通	VIEW OF OYAMA-DORI IN DAIREN, WEALTHY MERCHANT TO STAND SIDE BY SIDE.		1935年6月1日 旅順要塞司令部許 可済
1-318	洋館巍然と並ぶ大連大山通	THE OYAMA STREET, THE GRAND BUILDINGS STAND ALONGSIDE IT DAIREN.	大正写真工芸所	
1-319	舗道整然たる大連大山通	THE MOST REGULAR STREET OYAMA-TORI AT THE DAIREN.	大正写真工芸所	

1-320	大連商業界の中心地 繁盛 を誇る大山通の展望	The view of Oyama- dori street shop street in Dairen.		1935 年 6 月 1 日 旅順要塞司令部許 可済
1-321	大連振替貯金課	DALNY BOOKTRANSFER SAVINGS OFFICE.	北野商店	東京図按印刷社
1-322	(大連)最も繁華なる浪速町 通りの街観	VIEW OF NANIWA-MACHI AS MOST FLOURISHING STREET, DAIREN	大正写真工芸所	
1-323	大連の商店街浪速町通り夕 景の壮観	A VIEW OF NANIWA- MACHI SHOP-STREET IN TWILIGHT		1934 年 7 月 2 日 旅順要塞司令部御 許可済
1-324	繁華街大連浪速町			PRINTED BY KAIGAKENKUKAI、 1940 年 5 月 24 日 旅順要塞司令部御 許可済
1-325	・大連・市内第一の商店街 浪速通り	Naniwa machi street, Dairen	大正写真工芸所	1937 年 8 月 31 日 旅順要塞司令部許 可済
1-326	(大連)百貨の殿堂幾久屋百 貨店	KIKUYA DEPARTMENT STORE, DAIREN	大正写真工芸所	1939 年 6 月 1 日 旅順要塞司令部許 可済
1-327	大連老舗並ぶ浪速町の幾久 屋百貨店附近	Leading merchants along Naniwa Street, Dairen		1939 年 10 月 27 日旅順要塞司令部 御許可済
1-328	(大連)大連第一の繁華街浪 速通りの盛観	VIEW OF NANIWA- MACHI-DORI, MOST FLOURSHING STREET, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-329	大連浪速町通	NANIWACHO STREET, DAIREN.	大連大阪屋号	東京図按印刷社

1-330	客足繁く市内第一の繁華街 大連浪速通りの雑踏	NANIWA-CHO-DORI, A STREET, DAIREN.		大連日華堂書店印 刷
1-331	大連浪速町	NANIWA CHO, DAIREN.		
1-332	(大連)ショウウキンドに客 足をひく繁華街、浪速町	THE FLOURSHING STREET, NANIWA MACHI A ROW OF THE BEAUTFUL SHOW WINDOWS ATTRACT VISITORS, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-333	客足繁き市内随一の殷賑地 大連浪速通の雑踏	NANIWA-CHOO-DORI, MOST BUSTLING STREET IN DAIREN.		大連日華堂書店印 刷
1-334	大連の銀座 終日雑沓を極 む浪速町通	THE NANIWACHO-DORI, THE MOST BUSTLING STREET IN DAIREN.		1935 年 6 月 1 日 旅順要塞司令部御 許可済
1-335	大連伊勢町	ISEMACHI STREET, DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-336	商賈軒を並ぶ大連伊勢町	THE PROSPEROUS ISEMACHI WITH ROWS OF SHOPS, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-337	(大連)商況殷盛を極むる伊 勢町	THE VIEW OF ISE MACHI, THE BUSTLING STREET IN DAIREN.	大正写真工芸所	
1-338	大連磐城町ノ景	STREET IWAKI, DAIREN.		
1-339	大連磐城町大日活前	THE STREET OF IWAKI- MACHI, DAIREN		
1-340	大連磐城町の盛観	BUSTLING STREET IWAKIMACHI DAIREN		1940 年 12 月 18 日旅順要塞司令部 御許可済
1-341	大連の夜景大連磐城町通り より忠霊塔の遠望			

1-342	飛行機上より鳥瞰した大連市の最も人口の稠密を示す西広場附近	La Okeidenta Placo, Dairen--New...Area Foto.	大連日中文化協会	
1-343	大連観楽の中心地西広場中央映画館附近	Central Movie Theater at West Plaza and its vk.nity		1939 年 10 月 27 日旅順要塞司令部 御許可済
1-344	大連の西広場 中央映画館と伊勢町通り	WESTERN SQUARE AT DAIREN CITY.		1940 年 12 月 18 日旅順要塞司令部 御許可済
1-345	大連西広場	NISHIHIROBA, DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-346	文化を誇る建築物並ぶ大連信濃町通り	SHINANOMOCHI THE MAIN STREET OF DAIREN		1940 年 12 月 18 日旅順要塞司令部 御許可済
1-347	大連遼東ホテル及信濃町通			PRINTED MY S. KUWADA & SONS OSAKA
1-348	大連信濃町通り	SHINANOMOCHI STREET OF DALNY.	大連北野商店	1939 年 10 月 27 日旅順要塞司令部 御許可済
1-349	大連の信濃町通りの全貌	Shinano Street, Dairen		
1-350	大連名所 遊里 逢坂町	LICENSED QUARTER OF DAIREN	旅順東京堂	
1-351	大連逢坂町遊廓	OSAKA-MACHI, DAIREN		
1-352	(大連)清閑なる郊外に開け行く文化住宅街	QUARTER OF UP-TO-DATE RESIDENTARL HOUSES IN SUBURBS OF DAIREN.	大正写真工芸所	
1-353	大連老虎灘街道季家屯ノ別荘	RIKATON HOUSE DAIREN		

1-354	宛ら老虎の嘯ぶ如き大連郊外老虎灘の風光	FINEST, SCENERY OF ROKOTAN, DAIREN CUTSKIRTS.		大連日華堂書店印刷
1-355	大連老虎灘(ウオーターシュート)	THE WETAR-SHUT AT ROKOTAN, DAIREN.		東京図按印刷社
1-356	大連郊外老虎灘	PANORAMIC VIEW OF THE ROKATAN, OUTSKIRTS OF DAIREN	大正写真工芸所	
1-357	(大連)大連近郊老虎灘の風光(旅順要塞司令部の検により、山容が削られている)	VIEW OF THE LAOHGUTAN BEACH IN THE SPRING.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許可済
1-358	(大連郊外)碧浪岩礁に降り白沫を散ず老虎灘	THE GRAND SIGHT OF THE REAKERS DASHING AGAINST THE ROCKS AT ROKO GULF.	大正写真工芸所	
1-359	(大連郊外)釣客の賑ふ春の老虎灘	THE VIEW OF ROKO GULF IN SPRING CROWDED WITH ANGLERS.	大正写真工芸所	
1-360	大連老虎灘	No. 7 VIEW OF ROKOTAN AT DAIREN		
1-361	(大連郊外)青松繁る老虎灘の景観	THE BEAUTIFUL OF ROKO GULF DOTTED WITH ROCKS SHADED BY GREEN LEAVES OF PINE TREES.	大正写真工芸所	
1-362	大連近郊老虎灘ノ風光	VIEW OF THE LAOHUTAN BEACH IN THE SPRING.	大正写真工芸所	
1-363	大連郊外老虎灘	PANORAMIC VIEW OF ROKOTAN, OUTSKIRTS OF DAIREN.	大正写真工芸所	

1-364	大連西公園緑山遊歩道路	STROLL ROAD, WEST PARK, DAIREN		
1-365	大連西公園緑山ヨリ市街ヲ望ム	VIEW COMMANDED ON GREEN HILL, WEST PARK, DAIREN	大連市小林又七支店	
1-366	大連中央公園ノ忠霊塔並ニ市街之一部	“CHUREITO” IN CENTRAL PARK, DAIREN AND A PART-VIEW OF THE CITY	大正写真工芸所	
1-367	(大連)大連全景、近く中央公園に建てる忠霊塔を望む	THE FULL VIEW OF RAIREN CONTAINING THE DISTANT SIGHT OF THE MONUMENT DEDICATED TO THE SPRIT OF ROYAL.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部御許可済
1-368	(大連)勇士の英霊を祀る中央公園内忠霊塔	THE CHUREI MONUMENT DEDICATED TO THE SPRIT OF THE ROYAL SOLDIERS, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-369	(大連)中央公園の空高く聳ゆる忠霊塔の威容	MEMORIAL FOR THE BRAVE IN CENTRAL PARK, DAIREN	大正写真工芸所	
1-370	忠魂永遠に輝く大連忠霊塔	THE TOWER IN MEMORY OF ROYAL SOULS WHO WENT ON THEIR LAST JOURNY DURING WAR		1940年8月27日 旅順要塞司令部御許可済
1-371	大連忠霊塔	MEMORIAL MONUMENT DAIREN	南満州鉄道株式会社鉄道総局	1939年十一月二十九日旅順要塞司令部検閲済
1-372	英霊永遠に輝く大連忠霊塔 (満鉄グラウンドよりの遠望)	Monument to the royal dead seen from S.M. Railway Ground		1939年十月二十七日旅順要塞司令部検閲済

1-373	大連満鉄グラウンド	S. M. R' S PLAYGROUND, DAIREN.		
1-374	大連西公園の瀑布	WATER FALL WEST- PARK, DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-375	大連西公園ノ勝景	POND IN NISHI PARK, DAIREN.		
1-376	大連西公園	WEST PARK, DAIREN (DALNY)		東京図按印刷社
1-377	・大連・桜花麗しき中央公園	Cherries in Central Park, Dairen		1936年6月29日 旅順要塞司令部許可済
1-378	(大連)中央公園内緑樹繁る下の虎溪橋	THE KOKEI BRIDGE SHADED BY GREEN LEAVES IN THE CENTRAL PARK, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-379	大連中央公園虎溪橋附近のアカシヤ並木	ACACIA AVENUE IN CENTRL PARK, DAIREN.		大連日華堂書店印刷
1-380	大連中央公園噴水池附近	THE CENTRAL PARK, DAIREN.		
1-381	(大連)幽邃閑雅なる大連中央公園の面影	QUIET SCENETAKEN IN CENTARL PARK, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-382	自然ノ風致二囲マレタル大連中央公園	The Central Park noted in its natural Scenery, Dairen		
1-383	風致二富ム冬ノ大連中央公園	DAIREN CITY, HAVE GREAT HARBOUR IN ORIENTAL BUSIEST TOWN IN KWANTOSHU.		1937年3月16日 旅順要塞司令部検閲済
1-384	大連西公園	THE WEST PARK OF DAIREN	大正写真工芸所	
1-385	大連西公園	WEST PARK, DAIREN		

1-386	大連西公園の桜花	NO 5 CHERRY BLOSOMS AT WEST PARK, DAIREN	大正写真工芸所	
1-387	(大連)屋内大プールの設備 ある中央公園内保健浴場	THE SANITARY BATH- ROOM WITH A GREAT POOL IN THE CENTRAL PARK, DAIREN.		
1-388	大連南花園	South flower garden, Dairen	大連天野満書堂	
1-389	大連春日池	POOLKASUGAIKE、 DAIREN.		
1-390	大連春日池より逢坂町を望 む	THE OSAKA STREET FROM KASUGAIKE, DAIREN.		
1-391	絃歌の音も賑はしき大連逢 阪町	PANORAMIC VIEW OF THE OSAKAMACHI THERE THRUMMING THE SAMISEN UNCEASINGLY ALL DAY, DAIREN,	大正写真工芸所	
1-392	大連勸業博覧会子供館	Childeren's Paradise, Dairen Exhibition		
1-393	大連勸業博覧会第一会場夜 景	Night View of Main Ground, Dairen Exhibition		
1-394	大連常盤橋ト西通	THE TOKIWA BRIDGE AND THE NISHI- DORI, DAIREN.		
1-395	大連常盤橋	BRIDGE TOKIWA- BASHI, DAIREN.		
1-396	大連常盤橋ト天満屋ホテル	TENMA HOTEL AND TOKIWA BRIDGE, DAIREN.		

1-397	大連ノ中枢常盤橋通り	Tokiwabashi Dori Bustling street Dairen		
1-398	(大連)ブロードウェイ、常盤橋附近の繁華景	STREET VIEW, CAN SEE AROUND TOKIWA BRIDGE, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-399	車馬の往来繁き大連常盤橋の雑踏	VIEW OF WEST-STREET FROM TOKIWA- BRIDGE, DAIREN.		大連日華堂書店印刷
1-400	車馬の往来繁き大連常盤橋西通の雑踏	VIEW OF WEST-STREET FROM TOKIWA- BRIDGE, DAIREN.		
1-401	大連の中心殷賑を極む常盤町連鎖商店街と三越前の景観	Tokiwamachi, Rensa Street, Dairen		1939 年 10 月 27 日旅順要塞司令部 御許可済
1-402	東洋一ヲ誇ルグレート大連ノ連鎖商店街ノ全景	View of Chian store streets Dairen		
1-403	(カメラの大連)現代的設備を誇る大連代表商店区連鎖街	Leading business house along Rensa Street(Dairen)		1938 年 10 月 18 日旅順要塞司令部 御許可済
1-404	(大連)街の百貨店として新施設を誇る連鎖商店街	CHIAN-STORE STREET FAVOURD AS DEPARTMENT-STORE OF CITY, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-405	(大連)大連新名所連鎖街より常盤橋方面を望む	VIEW OF TOKIWABASHI STREET FROM THE CHAIN-STORE STREET, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-406	大連の名所連鎖街の常盤座(連鎖街の夜景)	VIEW OF TOKIWA THEATRE AT CHAIN- SHOP STREET AT NIGHT		

1-407	大連の代表的市街美 常盤町の三越前(大連の銀座通りと支那料理で有名なる扶桑仙館)			1941 年 10 月 7 日 旅順要塞司令部御許可済
1-408	(大連)市街の寵児、市民を吸引する連鎖商店街	CHAIN-STORE STREET AS DEPARTMENT-STORE OF THE CITY, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部御許可済
1-409	大連満洲報前より連鎖商店街を望む	VIEW OF THE CHAIN STORE STREET, DAIREN		1940 年 8 月 27 日 旅順要塞司令部御許可済
1-410	(大連)近代的麗容を誇る三越百貨店の景観	5 STORYED BUILDING OF MITSUKOSHI DEPARTMENT-STORE, DAIREN	大正写真工芸所	1940 年 6 月 1 日 旅順要塞司令部許可済
1-411	常盤橋・大連	MAIN BUSINESS SECTION OF DAIREN	南満州鉄道株式会社	1940 年 2 月 23 日 旅順要塞司令部検閲済
1-412	(大連)連鎖街より常盤橋方面を望んだ常盤橋通りの景観	THE VIEW OF TOKIWA BASHI-DORI, DAIREN.	大正写真工芸所	1941 年 10 月 7 日 旅順要塞司令部許可済
1-413	(大連)連鎖街より常盤橋方面を望む	MAIN STREET "TOKIWABASHI-DORI", DAIREN.		1940 年 9 月 9 日 旅順要塞司令部許可済
1-414	(大連)商業界に異彩を放つ大連市場の壮観	THE GRAND VIEW OF DAIREN MERKET, DAIREN	大正写真工芸所	1940 年 9 月 9 日 旅順要塞司令部検査済
1-415	文化的施設を備る大連市場の外貌	General view of Dairen market(Dairen)		1939 年 10 月 27 日 旅順要塞司令部御許可済
1-416	(大連)四季散策の人で賑ふ電気遊園	THE VIEW OF DENKI PLEASURE GROUND BY WALKERS THROUGH ALL		

		SEASONS. (DAIREN PORT)		
1-417	大連ノ電気遊園	ELECTRIC PARK, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-418	大連電気遊園絵葉書 大連 電気遊園演芸館(中央)ボウ リングアレー(左右)	Theatrical Hall & Bowling Alleys, Fushimidai Electirc Park, Dairen.		
1-419	大連電気遊園絵葉書 大連 電気遊園演芸館(中央)ボウ リングアレー(左右)	Theatrical Hall & Bowling Alleys, Fushimidai Electirc Park, Dairen.		
1-420	大連電気遊園絵葉書 大連 電気遊園イリウミネーション	Evning Scene, Fushimidai Electirc Park, Dairen.		
1-421	大連電気遊園絵葉書 大連 電気遊園西比利亜ノ熊	Siberian Bear, Fushimidai Electirc Park, Dairen.		
1-422	大連電気遊園絵葉書 大連 電気遊園メリーゴーラウン ド	Merry-go-round, (on Coney Island Pattern)Fushimidai Electirc Park, Dairen.		
1-423	大連電気遊園	ELECTRIC PARK, DAIREN.	大連市小林又七 支店	

1-424	大連電気遊園ノ温室附近	DAIREN CITY, HAVE A GREATEST HARBOUR IN ORIENT AND BUSIEST TOWN KA		PRINTED BY KAIGAKENKYUKAI
1-425	大連電気遊園内花園ト温泉	THE GARDEN AND THE NARM PLACE IN DAIREN PARK EZELECTRIC.	大正写真工芸所	
1-426	(大連)眺望絶佳近代的遊園 地、大連電気遊園	THE FINE VIEW OF THE ELECTRIC PLAY-GROUND WITH MODERN EQUIPPMENT, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-427	大連ノ電気遊園温室附近	VIEW OF THE MOTHONSE & ENNIROUS IN THE DAIREN ERECTRIC GARADEN.	大連船塚商店	
1-428	大連電気遊園	ELECTRIC PARK AT DAIREN.		
1-429	大連電気遊園動物園(其一)	ELECTRIC PARK, DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-430	大連電気遊園動物園(其二)	ELECTRIC PARK, DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-431	大連電気遊園(其ノ二)	THE ELECTRIC PARK, DAIREN.		
1-432	大連電気遊園ノ釣魚	DENKI PARK, DAIREN.		
1-433	大連電気遊園の藤	VIEW OF ELECTRIC PARK DAIREN.		大連日華堂書店印 刷
1-434	(大連)近代的色彩に富める 大連電気遊園	THE DAIREN ELECTRIC RECREATION-GAROUND WITH MODERN EQUIPMENT, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-435	大連電気遊園の美観 音楽 堂	MUSIC HALL IN ELECTRIC PARK IN		大連日華堂書店印 刷

		DAIREN		
1-436	大連電気遊園内の美観を添ふる音楽堂	MUSIC HALL IN ELECTRIC PARK IN DAIREN.		
1-437	大連電気遊園内メリーゴーランド	MERY GRAND ELECTRIC PARK, DALNY.	大連北野商店	
1-438	大連市伏見台電気公園登瀛閣	FUSHIMIDAI PARK, AT DAIREN.		
1-439	(大連)小村公園内小村侯の銅像	BRONZE STATUE OF MARQUIS KOMURA, DAIREN	大正写真工芸所	1939年6月6日 旅順要塞司令部許可済
1-440	大連小村公園(満洲の礎)小村寿太郎侯の銅像	Komura Park, Dairen.		1939年10月27日 旅順要塞司令部御許可済
1-441	大連駅プラットホーム	DALNY STATION DALNY.		東京図按印刷社
1-442	大連富士			
1-443	大連駅の構内／(上図)大連駅近傍	Dairen Station. /Dairen Station neighborhood.		
1-444	大連ノ停車場	STATION OF DAIREN.		
1-445	(カメラの大連)国際都市の誇り亜欧を結ぶ大連駅の偉観	Dairen station (Dairen)		1938年10月18日 旅順要塞司令部御許可済
1-446	(大連)宏壮華麗を極む大連駅頭の盛観	GRAND SIGHT OF BEAUTIFUL DAIREN STATION, DAIREN.		1937年9月10日 旅順要塞司令部許可済
1-447	亜欧に向ひて——躍進文化を誇る国際都市大連駅の夜、吞吐する人々——亜欧の門口大連駅、闊澤なる待			1937年6月28日 許可日

	合室の美観			
1-448	(大連)規模宏大なる大連駅 より日本橋を望む	NIPPON BRIDGE SEEN FROM PLATFORM OF DAIREN STATION, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許可済
1-449	快速度で轟進中のあじあ	STREAM LINE ASIA GO RUSHING IN FULL SPEED.	大正写真工芸所	
1-450	(奉天)奉天駅到着の超特急 車アジア号	REFRESHING STYLE OF EXPRESS ASIA- GO, MUKDEN.	大正写真工芸所	
1-451	特別急行列車「アジア」大 連ー新京	LIMITED EXPRESS "ASIA"DAIREN- HSINKING	南満州鉄道株式 会社	
1-452	大陸を疾走す・特急あじあ	The Super- Express"Asia" the pride of the S.M.R.	南満州鉄道株式 会社	
1-453	特急アジア	THE SUPER- EXPRESS"ASIA"	南満州鉄道株式 会社	
1-454	大連公会堂	PUBLIC ASSEMBLY HALL, DAIREN.	大連船塚商店	
1-455	(大連)人々の保健事業に貢 献する関東保健館	KWANTO HEALTH PROMOTING CLUB, DAIREN	大正写真工芸所	1939年4月1日 旅順要塞司令部許可済
1-456	大連伏見台工業学校の景	THE TECHNICAL SCHOOL, DAIREN.		東京図按印刷社
1-457	大連工業学校	THE TAIREN TECNICAL SCHOOL	北野商店	東京図按印刷社
1-458	大連満鉄中央試験所	S. M. R. CO. 'S CENTRAL LABORATORY, DAIREN.	大連市小林又七 支店	

1-459	(大連)典型的建築、中央試験所(満鉄経営)	THE CENTRAL TESTING OFFICE, THE MODEL BUILDING AT DAIREN.	大正写真工芸所	
1-460	満蒙資源ノ研究ニ当ル大連中央試験所。	DAIREN CITY, HAVE A GREATEST HARBOUR IN ORIENT AND BUSIEST TOWN IN KWANTOSHU.		PRINTED BY KAIGAKENKYUKAI、 1935 年 7 月 4 日 旅順要塞司令部許可済
1-461	大連中央試験所	AN EXAMINATING OFFICE, DAIREN.		
1-462	(大連)恨みは深し、佐渡丸殉難の碑	MONUMENT FOR SADO-MARU SUNK DOWN, DAIREN	大正写真工芸所	1940 年 9 月 12 日 旅順要塞司令部検査済
1-463	宏壮なる大建築物の大連地方法院	THE BUILDING OF DAIREN DISTRICT COURT		1940 年 8 月 27 日 旅順要塞司令部御許可済
1-464	(大連)堂々たる偉観を呈する東東州庁	GRAND SIGHT OF KWANTUNG GOVERNMENT OFFICE, DAIREN.	大正写真工芸所	1937 年 6 月 20 日 旅順要塞司令部許可済
1-465	(カメラの大連)燦然と輝く大連東東州庁々舎	Magunificent Kantoshu Provincial Office(Dairen)		1938 年 10 月 18 日 旅順要塞司令部御許可済
1-466	(大連)スポーツマン集ふ、大連グラウンド	THE GRAND STADIUM OF DAIREN.	大正写真工芸所	
1-467	フイルド、トラック、プール共に完備せる 大連市運動場の盛況	GRAND SIGHT OF THE DAIREN GROUND.		大連日華堂書店印刷
1-468	(大連)近代的設備を誇る大連グラウンド	DAIREN GREAT PLAYGROUND, DAIREN.	大正写真工芸所	1940 年 9 月 9 日 旅順要塞司令部検査済
1-469	大連運動場観覧席内部、大連運動場プール		大連中日文化協会	

1-470	満洲大博覧会東東聴館	House of Kwantocho		
1-471	満洲大博覧会京都館	House of Kyoto		
1-472	大連・理想市街聖徳街絵葉書集 聖徳街西部イ、ロ、ハ区ノ一部	VIEW OF THE ROAD, SHO-TOKU-GAI.	小松勉強堂	
1-473	大連・理想市街聖徳街絵葉書集 聖徳公園地ヨリ市街チ、リ区本通ヲ望ム	VIEW OF THE ROAD SHO-TOKU-GAI.	小松勉強堂	
1-474	大連・理想市街聖徳街絵葉書集 聖徳太子御像	VIEW OF THE SHO-TOKU PARK (THIS IS A STATUE OF SHO-TOKU-DAISHI)	小松勉強堂	
1-475	大連・理想市街聖徳街絵葉書集 聖徳公園内五重塔	VIEW OF THE SHO-TOKU PARK.	小松勉強堂	
1-476	大連・理想市街聖徳街絵葉書集 聖徳街公園ヨリ西岡子ヲ望ム	VIEW OF THE SHO-TOKU PARK.	小松勉強堂	
1-477	大連・理想市街聖徳街絵葉書集 益濟寮ヨリ満鉄社宅及柵外市街ヲ望ム	VIEW OF S, M, R, MEMBER'S HOUSE AND SHA-HO-KOW CITY.	小松勉強堂	
1-478	大連の聖徳太子殿	SHOTOKUTAISHIDEN OF DAIREN		1940 年 12 月 18 日 旅順要塞司令部 御許可済
1-479	大連星ヶ浦海岸ノ全景	THE VIEW OF HOSHIGAU, DAIREN.		
1-480	大連郊外星ヶ浦の風光			大連日華堂書店印刷
1-481	大連郊外星ヶ浦満停車場	HOSHIGAWURA STATION DALNY.	北野商店	東京図按印刷社
1-482	(大連郊外) 四季散策の人にて賑ふ星ヶ浦公園正門	THE FRONT GATE OF HOSHIGAU PARK CROWDED WITH	大正写真工芸所	

		VISITORS THROUGH ALL SEASONS.		
1-483	大連郊外星ヶ浦ヤマトホテルの遠望	THE YAMATO HOTEL OF HOSHI-GA-URA, SUBERB OF DALNY.		東京図按印刷社
1-484	大連名所 郊外星ヶ浦海岸よりヤマトホテル展望	HOSHIGAUURA YAMATO HOTEL IN THE SUBURBS OF DAIREN.		大連日華堂書店印刷
1-485	大連郊外星ヶ浦 ヤマトホテル	HOSHIGAUURA YAMATO HOTEL IN THE SUBURBS OF DAIREN.		大連日華堂書店印刷
1-486	(大連郊外)満洲随一の頻海ホテル、星が浦ヤマトホテル	THE VIEW OF YAMATO HOTEL, THE BEST ONE AT THE SEA-SIDE IN MACHURIA.	大正写真工芸所	
1-487	(大連)満洲一の頻海ホテル 大連郊外星ヶ浦ヤマトホテル	THE HOSHIGAUURA YAMATO HOTEL IN THE SUBURB OF DAIREN, THE BEST ONE AT THE SEA-SIDE IN MACHURIA.	大正写真工芸所	
1-488	大連郊外星ヶ浦ヤマトホテル	YAMATO HOTEL IN HOSHIGAUURA (STAR BEACH), SUBERB DAIREN.	大連市小林又七支店	
1-489	(大連郊外)緑樹鬱蒼たる星が浦公園の一部	THE VIEW OF PART OF HOSHIGAUURA PARK WITH A DENSE FOLIAGE.	大正写真工芸所	
1-490	(大連郊外)龍宮に遊ぶが如き星が浦水族館	THE VIEW OF AQUARIUM AT HOSHIGAUURA IN THE SUBURB OF DAIREN (DAIREN PORT)	大正写真工芸所	

1-491	(大連)星ヶ浦の丘上に立つ 後藤新平伯の銅像	THE STATUE OF COUNT, GOTO AT HOSHIGAUURA, DAIREN.	大正写真工芸所	1940年9月9日 旅順要塞司令部検 査済
1-492	大連ノ星ヶ浦後藤新平閣下 ノ銅像	THE STATUE OF THE LATE COUNT GOTO AT HOSHIGA-URA.		
1-493	(大連)現代的設備成れる星 ヶ浦公園と第一次満鉄総裁 後藤新平伯銅像	THE MODERN TIC HOSHIGAUURA PARK AND THE BRONZE STATUE OF COUNT SHINPEI GOTO, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-494	(大連郊外)眺望雄大の星が 浦の海浜	THE WONDERFUL VIEW OF HOSHIGAUURA SEA SHORE.	大正写真工芸所	
1-495	星が浦海岸の風光と支那ジ ヤンク	VIEW OF THE JUNK ON THE HOSHIGAUURA (STAR BEACH)	大正写真工芸所	
1-496	星が浦公園海浜海水浴の実 況	VIEW OF THE BATHING AT THE HOSHIGAUURA PARK.	大正写真工芸所	
1-497	満洲唯一夏の楽土 大連近 郊星ヶ浦海水浴場	HOSHIGAUURA BATHING- PLACE (STAR BEACH), DAIREN SUBURBS.		大連日華堂書店印 刷
1-498	(大連)避暑客の魅惑、大連 郊外星ヶ浦海水浴場	HOSHIGA-URA SEA- BATHING RESORT IN SUBURBS OF DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-499	霞半島に抱かれる西門海水 浴場			
1-500	霞半島に抱かれる西門海水 浴場			

1-501	大連ノ名所星ヶ浦海水浴場	BATHING PLACE OF HOSHIGAUARA, WELL KNOWN RESORT OF DAIREN.		
1-502	星が浦海岸の風光	VIEW OF THE HOSHIGAUARA (STAR BEACH)	大正写真工芸所	
1-503	大連郊外星ヶ浦海岸ヨリ岬ヲ望ム	ONE OF THE BEST SCENERY IN HOSHIGAUARA (STAR BEACH), SUBURBS DAIREN.	大連市小林又七支店	旅順要塞司令部検閲済
1-504	大連郊外星ヶ浦海水浴場	BATHING-PLACE IN HOSHIGAUARA (STAR BEACH), SUBURBS DAIREN.	大連市小林又七支店	旅順要塞司令部検閲済
1-505	星が浦公園より海水浴場及び旅館を望む	THE BATHING PLACE AND THE HOTEL AS SEEN FROM THE PARK, HOSHIGAUARA.	大正写真工芸所	
1-506	水明荘海岸と山手の別荘群			
1-507	黒石礁別荘地の教会			
1-508	大連郊外黒石礁海水浴場	BATHING-PLACE KOKUSEKISHO, SUBURBS DAIREN.	大連市小林又七支店	旅順要塞司令部検閲済
1-509	支那風俗——小平島附近漁夫のハイ縄修理	CHINESE CUSTOM:Repairing of fishing net by fishers at Shopingtao, near Dairen.	大連市小林又七支店	

1-510	支那風俗——満洲婦人の洗濯	CHINESE CUSTOM:Washing by Manchurian women, South Manchuria.	大連市小林又七 支店	
1-511	天后聖母を祀る大連西西崗子の支那廟	THE TENGOKYU (THE CHINESE TEMPLE), DAIREN.		大連日華堂書店印刷
1-512	(大連) 薨美はしき伏見台天后宮(支那廟)	THE FUSHIMIDAI TENGOKYU THE FINE BUILDING WITH A BEAUTIFUL ROOF (THE CHINESE MAUSELEUM), DAIREN.	大正写真工芸所	
1-513	満洲風俗 天后宮聖母祭—— —靈輿に続く活人画の花輿	Manchurian Custom. Tien-Hu-Kung Festival, Dairen. Living Dolls following the Holy Fortable Shrine.	大連市小林又七 支店	
1-514	満洲風俗 天后宮聖母祭—— —音楽を奏し行く高脚仮装 の一隊	Manchurian Custom. Tien-Hu-Kung Festival, Dairen. High footed procession in Chinese historical costumes gay with music.	大連市小林又七 支店	
1-515	高脚踊		南満州鉄道株式 会社鉄道部	
1-516	大連支那学堂(西蘭子公学 堂)	Chinese commacial School, Dairen.		

1-517	大連西崗子公学堂絵葉書 大連西崗子公学堂校舎正面	THE VIEW FROM THE FRONT OF DAIREN SEIKOSHI-PUBLIC- SCHOOL.	大連市小林又七 支店	
1-518	大連西崗子公学堂絵葉書 大連西崗子公学堂講堂	THE LECTURE HALL OF SEIKOSHI-PUBLIC- SCHOOL.	大連市小林又七 支店	
1-519	大連西崗子公学堂絵葉書 大連西崗子公学堂朝会	THE MEETING OF MORNING IN DAIREN SEIKOSHI-PUBLIC- SCHOOL.	大連市小林又七 支店	
1-520	大連西崗子公学堂絵葉書 大連西崗子公学堂中国文教授	THE VIEW OF CHINESE INSTRUCITON IN DAIREN SEIKOSHI- PUBLIC-SCHOOL.	大連市小林又七 支店	
1-521	大連西崗子公学堂絵葉書 大連西崗子公学堂児童室	THE STUDY ROOM OF BOYS IN DAIREN- SEIKOSHI-PUBLIC- SCHOOL.	大連市小林又七 支店	
1-522	大連西崗子の西崗街	DAIREN SAIKO-GAI STREET		1940年8月27日 旅順要塞司令部御 許可済
1-523	大連西崗子ノ西崗街	THE STREET OF SAIKOGAI, DAIREN.		
1-524	多彩な街景『大連』小崗子 街	Shokoshi Street, Dairen.		1936年6月29日 旅順要塞司令部許 可済
1-525	中華民の雑踏せる小崗子大 街	THE VIEW OF THE MAIN STREET OF SHOKOSHI TOWN CROWDED WITH CHINESE PEOPLE (DAIREN PORT)	大正写真工芸所	

1-526	大連西崗子の満人商店櫛比 せる大竜街／大連西崗子の 西崗街	Daido Street, Hsikangtzu, Da iren.		1934年4月16日 旅順要塞司令部検 査済
1-527	大連西崗子の遊里得勝街／ 大連の遊里逢阪町	Hsikang Street, Hsikangtzu, Da iren.		1934年4月16日 旅順要塞司令部検 査済
1-528	(大連)庶民崇敬の中心、沙 河口神社	THE FRONT OF SHAKAKO SHIRINE BY THE POPULACE, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-529	大連の沙河口神社	SAKAKO SHRINE OF DAIREN.		1940年12月18 日旅順要塞司令部 御許可済
1-530	(大連)乗降客の賑ふ沙河口 停車場	THE VIEW OF SHAKAKO STATION BUSTLING WITH PASSENGERS. (DAIREN PORT)	大正写真工芸所	
1-531	(大連)全市民を養ふ龍王塘 水源地の風光	VIEW OF GATHERING POND OF WATER-SUPPLY AT RYUWOTO, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-532	満鉄の鉄道工場(大連)	S. M. R. Railway Workshops.	南満州鉄道株式 会社	
1-533	(大連)沙河口汽車工場の壮 観	THE GRAND SIGHT OF SHAKAKO RAILWAY WORKS SHIP, DAIREN.	大正写真工芸所	
1-534	(大連)甘井子、石炭埠頭に 於ける石炭の積込み	SHIPPING AT THE COAL PIER WITH NEW EQUIPMENT, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許 可済
1-535	大連の対岸甘井子埠頭石炭 の積込中ノ状況	A VIEW OF LOADING OF COAL AT KAN-ISHI WHARF.		

1-536	(大連)甘井子石炭埠頭の偉観／(大連)日満の空を繋ぐ要衝、周水子飛行場	COAL PIER OF KANCHINGTZU, DAIREN/ AIRDOME OF CHOUSHUTSU, DAIREN.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許可済
1-537	・大連・日満の空を繋ぐ要衝周水子飛行場	Airdome of Shusuishi, Dairen	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許可済
1-538	大連尋常高等小学校	A PRIMARY SCHOOL, DAIREN (DALNY.)		PRINTED BY KAMIGATAYA
1-539	大連高等小学校	DALNY PRIMARY SCHOOL.	北野商店	
1-540	大連尋常高等小学校	DAIREN ELEMENTARY SCHOOL		
1-541	大連公学堂	THE CHINESE PUBLIC SCHOOL, DALNY.	北野商店	
1-542	大連中学校	THE DALNY MIDDLE SCHOOL.	北野商店	
1-543	大連高等女学校	THE HIGHER GIRLS' SCHOOL, DALNY.	北野商店	
1-544	大連南満工業学校	Technical School, Dairen.	日華堂書店	
1-545	大連虎公園	TIGER PARK, DAIREN (DALNY).	大連船塚商店	
1-546	大連西公園の猛虎	The Western Park	大連大原商店	
1-547	大連常盤尋常小学校校舎正面			
1-548	大連常盤尋常小学校所蔵ノ虎(両寅の記念)			

旅順・金州の関連絵葉書目録

ID	日本語タイトル	欧文タイトル	発行者	備考
----	---------	--------	-----	----

2-1	旅順戦蹟巡拝記念 バス乗車券		大連都市交通株式会社	凸版印刷株式会社印刷、1939 年 1 月 25 日旅順要塞司令部許可済
2-2	(旅順名所)聖地会館	RYOJUN SEIChIKAIKAN, PORT・ARTHUR.	満蒙社	
2-3	旅順ノ全景	BIRD'S-EYE-VIEW, OF PORT-ARTHUR.		旅順要塞司令部御検閲
2-4	満洲行進曲 極東平和の礎 皇軍の威風と奉天忠霊塔	JAPANESE TROOPS & THE MEMORIAL TOWER TO LOYAL SOULS DURING THE WAR.		
2-5	満洲行進曲(歌詞 一番) 乃木ステツセル両将軍の会 見(水師営)英霊を偲ぶ白玉 山表忠塔	FAMOUS MEETING OF GENERAL NOGI & STESSEL AT SUISHIEI IN MEMORY OF LOYAL SOULS WHO WENT ON THEIR LAST JOURNEY DURING R-J WAR		
2-6	満洲行進曲			
2-7	満洲行進曲(楽譜) 大江素 夫作歌 堀内敬三作曲 我が 国威を朔風に孕む日章旗	OUR FLAG FLYING OVER THE WIDE PLAIN OF NORTH MANCHURIA		
2-8	満洲行進曲(歌詞 五番)			
2-9	満洲行進曲(歌詞 六番) 奉天城壁に翻へる日の御旗	A SUN-FLAG FLUTTERING ON THE WALL OF MUKUDEN.		
2-10	旅順之記念 水師営会見所 に於ける記念撮影／水師営 乃木ステッセル両将軍会見 所			1934 年 4 月 16 日 旅順要塞司令部 許可済

2-11	旅順之記念 戦陣中の海陸 両将／旅順白玉山の表忠塔			1934年4月16日 旅順要塞司令部 許可済
2-12	旅順之記念 乃木將軍筆自 作爾靈山の詩／戦陣中の乃 木將軍／爾靈山山頂の記念 碑			1934年4月16日 旅順要塞司令部 許可済
2-13	旅順之記念 旅順爾靈山に 於ける乃木保典戦死の碑／ 旅順爾靈山我重砲兵観測所 記念碑／名誉の戦死を遂げ た乃木兄弟			1934年4月16日 旅順要塞司令部 許可済
2-14	旅順之記念 松樹山堡壘／ 東鷄冠山砲台／望台砲台／ 二龍山堡壘			1934年4月16日 旅順要塞司令部 許可済
2-15	旅順之記念 我軍の破壊口 ／掩蔽部／内部／コントラ デンコ將軍戦士の所／小銃 弾痕			1934年4月16日 旅順要塞司令部 許可済
2-16	旅順之記念 閉塞船報国丸 ／白玉山納骨神社／閉塞隊 記念碑			1934年4月16日 旅順要塞司令部 許可済
2-17	旅順之記念 戦利品記念陳 列館二十八珊／旅順博物館 ／戦利陳列品記念館			1934年4月16日 旅順要塞司令部 許可済
2-18	表忠塔	MONUMENT TO LOYAL DEAD, PORT-ARTHUR.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部 許可済
2-19	青葉町通り	AOBA-CHO STREET, PORT-ARTHUR.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部 許可済
2-20	爾靈山頂上記念標	WAR-MONUMENT ON NIREI HILL, PORT-ARTHUR.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部 許可済
2-21	白玉山	HAKUGYOKU HILL, PORT-	大正写真工芸所	旅順要塞司令部

		ARTHUR.		許可済
2-22	日本橋	NIPPON BRIDGE, PORT-ARTHUR.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部 許可済
2-23	港口閉塞隊記念碑	MONUMENT OF PORT-MOUTH, PORT-ARTHUR.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部 許可済
2-24	桜の大正公園	TAISHO PARK, PORT-ARTHUR.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部 許可済
2-25	水師営会見所	MEETING PLACE OF SUISHI-EI, PORT-ARTHUR.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部 許可済
2-26	忠魂ノ旅順	THE PORT ARTHUR.	城山会	東京図按印刷社、旅順要塞司令部、同鎮守府 允許、不許複製
2-27	(旅順戦跡) 軍神広瀬中佐と悲痛なる最後の書翰	COMMANDER HIROSE AND HIS LAST LETTER.	満蒙社	旅順要塞司令部 許可済
2-28	(旅順戦跡) 閉塞船沈没の光景	THE WRECK OF JAPANESE BLOCKADER, PORT ARTHUR.	満蒙社	旅順要塞司令部 許可済
2-29	旅順戦跡 旅順港口閉塞隊ノ記念碑	MONUMENT OF THE RYOJUN.	満蒙社	
2-30	(旅順戦跡) 旅順港口閉塞隊記念碑	THE BLOCKADE MONUMENT, PORT ARTHUR.	満蒙社	旅順要塞司令部 許可済
2-31	白煙天に沖す 東鶏冠山砲台爆破	BATTLE SCENE EAST KEIKWANSAN FORT, PORT ARTHUR.	満蒙社	旅順要塞司令部 許可済
2-32	(聖地旅順) 今なほ風血腥き 東鶏冠山砲台激戦の跡	HIGASHIKEIKWANZAN-FORT, PORT ARTHUR.	大正写真工芸所	1938 年 1 月 12 日 旅順要塞司令部 許可済
2-33	旅順戦跡 東鶏冠山砲台露軍自ら破壊の惨状	BATTERY AFTER WAR HIGASHIKEIKANZAN.		旅順要塞司令部 検閲済

2-34	旅順東鶏冠山砲台ノ紀念碑	The monument of Tung-chi-kuan-shan Fort.	旅順川谷販売店	
2-35	(旅順) 東鶏冠山北堡壘	THE HIGASHIKEIKANZAN NORTHERN BATTERY, PORT-ARTHUR.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部 検閲済
2-36	旅順戦跡 東鶏冠山北堡壘 ノ掩蔽部	BATTERY HIGASHI- KEIKANZAN RYOJUN.		旅順要塞司令部 検閲済
2-37	(聖地旅順) 凄惨なる突撃戦 を語る北堡壘の弾痕	BLOOD BATTEL-SCENE, NORTH-BATTERY, PORT ARTHUR.		1938 年 1 月 12 日 旅順要塞司令部 許可済
2-38	(旅順) 東鶏冠山北堡壘	THE HIGASHI-KEIKAN- ZAN NORTHERN BATTERY, PORT-ARTHUR.		旅順要塞司令部 許可済
2-39	(旅順) 東鶏冠山北堡壘	THE HIGASHI-KEIKANZAN NORTHERN BATTERY PORT-ARTHUR.		旅順要塞司令部 許可済
2-40	(旅順) 東鶏冠山北堡壘	THE HIGASHI-KEIKAN- ZAN NORTHERN BATTERY, PORT-ARTHUR.		
2-41	旅順東鶏冠山砲壘露軍コン ドラチェンコ中將戦死ノ場 所	The spot of doath in Aetion Liut.-General Condratenco at Tung- chi-kuan, North Fort.	旅順川谷販売店	
2-42	旅順戦跡 東鶏冠山北堡壘 コンドラデンコ少將戦死の 場所	AFTER WAR RYOJUN.		旅順要塞司令部 検閲済
2-43	旅順望台砲壘ノ全景	THE BIRDS EYE VIEW OF BODAI BATTORY.	大正写真工芸所	
2-44	(旅順みやげ) 露軍の使用せ し望台の海軍砲	A NAVAL GUN.		
2-45	(旅順戦跡) 我が軍を悩まし た望台砲台	BATTLE SCENC OF BODAI FORT, PORT ARTHUR.		旅順要塞司令部 許可済

2-46	(聖地旅順)我軍を悩せる望 台砲台の十五珊加農砲	CANON OF 15CM ON BODAI-FORT, PORT ARTHUR.		1938 年 1 月 12 日 旅順要塞司令部 許可済
2-47	旅順戦蹟 盤龍山東堡壘ノ 記念碑	MONUMENT OF BANRYUZAN, PORT ARTHUR.		旅順要塞司令部 許可済
2-48	蟠龍山の巨砲	CANON AT VANRYUSHAN.		
2-49	二龍山砲台背面外壕内ヨリ 咽喉部ノ左側面ヲ望ム 卅八 年一月三日	THE LEFT FLANK OF THE GORGE, ERH-LUNG-SHAN FORT, VIEW FROM THE OEAR DITCH. 3RD, JANUARY, 1905.	旅順要塞戦紀念 品陳列場	小川一真印行、 陸地測量部版權 所有
2-50	(聖地旅順)激烈なる坑道戦 を展開せる二龍山堡壘	NIRYUZAN BATTERY, PORT ARTHUR.		1938 年 1 月 12 日 旅順要塞司令部 許可済
2-51	(旅順戦跡)二龍山堡壘の外 壕側防穹窖	RUINS OF NIRYUSAN BATTERY, PORTARTHUR.	満蒙社	
2-52	旅順二龍山ノ掩蔽部ト記念 碑	THE MONUMENT OF HIDING PLACE AT NIRYU-ZAN BATTERY.		
2-53	旅順二龍山堡壘の記念碑	Erhlungshan Port Arthur,	旅順東京堂	
2-54	(旅順)二龍山堡壘	THE NIRYUZAN BATTERY, PORT-ARTHUR.		旅順要塞司令部 許可済
2-55	(旅順戦跡)松樹山総攻撃中 の我軍歩兵陣地	RUINS OF SHOJUSAN BATTERY PORT ARTHUR.	満蒙社	旅順要塞司令部 許可済
2-56	(旅順戦跡)松樹山堡壘 壮絶 悲愴な地下戦の跡	SHELTER-TRENCH OF FOOT OF BANRYUSAN FORT, PORT ARTHUR	満蒙社	旅順要塞司令部 許可済

2-57	松樹山砲台右側面斜堤上ヨリ全正面ノ穹窿外部ヲ望ム 卅八年一月五日	OUTSIDE OF THE FRONT CASEMATE, FROM THE GLACIS OF THE RIGHT FLANK OF SUNG-SHU-SHAN. 5TH, JANUARY, 1905.	旅順要塞戦紀念品陳列場	小川一真印行、 陸地測量部版權 所有
2-58	旅順戦跡 松樹山堡壘ノ掩蔽部	BATTERY OF SHOJUZAN RYOJUN.		
2-59	旅順松樹山後方掩兵部破壊の惨状	BATTLEMENT ON SUNGSHUSHAN.	旅順阪本書店	
2-60	旅順松樹山堡壘ノ塹壕及記念碑	VIEW OF TRENCH AND MONUMENT AT SHOZU-ZAN, BATTORY.		
2-61	松樹山掩兵部の内面	INNEAR PART ENPEIBU, SHOJUZAN.	小川写真店	東京図按印刷社
2-62	松樹山堡壘ヨリ水師営ヲ望ム	DISTANT VIEW SUISHIYEI EROM SHOJUZAN.		
2-63	(旅順) 椅子山堡壘	THE ISUZAN BATTERY, PORT-ARTHUR.		旅順要塞司令部 許可済
2-64	旅順椅子山掩蔽部	VIEW OF THE HIDING PLACE AT ISU-ZAN, PORT ARTHUR.		
2-65	旅順椅子山砲台掩蔽部	North Rattery on Isusan Port Arthur.	旅順東京堂	
2-66	旅順大案子山堡壘掩蔽部	Daianshishan Port Arthur	旅順東京堂	
2-67	(旅順) 大案子山堡壘	THE DAIANSHIZAN BATTERY, PORT-ARTHUR.		旅順要塞司令部 許可済
2-68	(旅順) 大案子山堡壘	THE DAIANSHIZAN BATTERY, PORT-		旅順要塞司令部 許可済

		ARTHUR.		
2-69	旅順大案子山堡壘 山頂ノ坑道	THE VIEW OF DAI-AN SHI-ZAN BATTORY, PORT ARTHUR.		
2-70	旅順太陽溝北砲台破壊ノ惨状	The view of breaking place at Tai-yanko North Fort.	川谷商店	
2-71	旅順一戸堡壘ノ記念碑	ICHINOHEHORUI FORT ARTHUR.		旅順要塞司令部 検閲済
2-72	高崎山記念碑	A MONUMENT AT TAKASAKI HILL	旅順二〇三高地 休憩所	
2-73	老虎溝山（一名赤阪山記念碑）	A MONUMENT AT AKASAKA HILL.	旅順二〇三高地 休憩所	
2-74	旅順南山坡山記念碑（一名海鼠山）	Monumint of Nandanhadan Port Arthur		
2-75	（第一輯）旅順二百三高地の遠望	WHOLE VIEW OF 203 METRE HILL. PORT ARTHUR.	旅順阪本書店	
2-76	旅順爾靈山高地全景	VIEW OF JIREZAN, ARTHUR.	東京堂	
2-77	旅順二〇三高地麓より頂上を望む	View of top 203 hill, from bottom A. P.	旅順二〇三高地 休憩所	
2-78	（旅順）爾靈山高地	MT. NIREISAN, PORT- ARTHUR.		
2-79	旅順二〇三高地破壊ノ砲架並ニ我重砲兵ノ観測記念碑	TEH MONUMENT OF OBSERVATORY AT 203 METER.		
2-80	旅順二〇三高地山腹ヨリ山頂記念碑ヲ望ム	MONUMENT ON 203 METRE HILL.		

2-81	旅順二〇三山上の記念砲台	BATTERY IN 203 HIGH- LAND RYOJUN.	大連大原商店	
2-82	旅順 二〇三高地の戦跡	Remains of the battle on the 203 meter height, Port Arthur	大連天野満書堂	
2-83	(旅順) 爾靈山高地	MT. NIREISAN, PORT- ARTHUR.		旅順要塞司令部 許可済
2-84	(旅順) 爾靈山高地	MT. NIREISAN, PORT- ARTHUR.		旅順要塞司令部 許可済
2-85	旅順戦跡 二〇三高地我重 砲兵観測所ヨリ記念碑ノ遠 望	MONUMENT OF THE RYOJUN		
2-86	旅順戦跡 爾靈山我重砲兵 観測所記念碑	MONUMENT OF PORT ARTHUR		
2-87	旅順二〇三高地中腹ヨリ見 タル記念碑	THE 203 MATRE HILL PORT ARTHUR		
2-88	旅順爾靈山上ノ記念碑	THE MONUMENT OF RUSS AND JAPAN WAR ON THE NIREI-SAN IN PORT ARTHUR.		
2-89	(旅順戦跡) 万人齊しく仰ぐ 二〇三高地記念碑	MONUMENT ON 203 METRE HILL. PORT ARTHUR.		旅順要塞司令部 許可済
2-90	旅順爾靈山標識碑		満蒙社	
2-91	旅順戦跡 爾靈山乃木保典 君戦死ノ記念碑	NOGI'S MONUMENT ON 203 KOCHI, PORT ARTHUR.		要塞司令部御検 閲済
2-92	(旅順戦跡) 乃木保典少尉戦 死の跡を弔ふ	THE SPOT WHERE SECOND LIEUTENANT NOGI FOLL, PORT ARTHUR.	満蒙社	旅順要塞司令部 許可済
2-93	露国軍艦バーヤン	The Fate of the Cruiser "Bayan"	旅順川谷販売店	

2-94	旅順船渠中ニ沈没セル アルム砲艦	ALM GUN BOAT AT BOCK, RYOJUN.		
2-95	旅順 第一師団記念碑及水師営遠望	Monument of the First Division & distant view of Suishiei, Port Arthur	大連天野満書堂	
2-96	水師営会見所来著のステッセル將軍と其幕僚	GEN. STÖESSEL TO GOING TO SUISHIEI, PORT ARTHUR.	満蒙社	旅順要塞司令部許可済
2-97	日露役旅順開城（明治神宮外苑聖徳記念絵画館 壁画）			便利堂印行
2-98	水師営に於ける彼我司令官の会見		通信省	東京印刷株式会社製
2-99	（旅順戦跡）両將軍会見の跡を偲びて		満蒙社	旅順要塞司令部許可済
2-100	旅順開城ノ際水師営ニ於テ乃木ステッセル両將軍会見	STTSEU AND NOGI AT RYOJUN.		
2-101	旅順開城談判ノ為水師営ニ於テ乃木ステッセル日露両將軍会見	STTESSEL AND NOGI AT SUISHIEI. RYOJUN		1940年5月11日旅順要塞司令部、1940年5月16日旅順要塞司令部許可済
2-102	（旅順戦跡）日露戦史を飾る開城の条約地水師営会見所	MEMORIAL CHINESE HOUSE OF SUISHIEI, PORT ARTHUR.		旅順要塞司令部許可済
2-103	旅順水師営会見所ノ記念碑	THE MONUMENT OF SUISHIEI AT WHERE THE TWO GENERAL HAD AN INTERVIEW.	大正写真工芸所	
2-104	（聖地旅順）戦史を飾る水師営会見の遺跡	MEMORY, HOUSE OF SUISHIEI, PORT ARTHUR.		1938年1月20日旅順要塞司令部許可願済

2-105	乃木将軍旅順入城之図		遊就館	
2-106	(旅順戦跡)旅順入城記念碑	RYOJUN ENTER CASTLE MONUMENT, PORT ARTHUR.	満蒙社	旅順要塞司令部 許可済
2-107	旅順攻囲戦の我陸海軍首脳 柳樹房第三軍司令部に於て	INTERVIEW OF ADMIRAL TOGO AND GEN. NOGI. PORT ARTHUR.	満蒙社	旅順要塞司令部 許可済
2-108	今は昔 日露戦役記念の写真 二元帥六大将	INTERVIEW OF JAPANESE ARMY GENERALS	満蒙社	旅順要塞司令部 許可済
2-109	旅順口要塞司令官ステッセ ル中将以下		東京神田錦町山 本写真館	
2-110	旅順解放露国将校ノ長崎寄 港中撮影	RUSSIAN PAROLED OFFICERS FROM PORT- ARTHUR AT NAGASAKI EN ROUTE FOR RUSSIA.	小川一真出版部	
2-111	旅順開城記念 降伏者乗船 之図			
2-112	旅順記念絵葉書 旅順要塞 戦利品記念陳列場全景	The Military Museum, a collection of trophies at Port Arthur. No.1.	旅順川谷商店	
2-113	旅順記念絵葉書 旅順陳列 場外庭ニ於ケル露国二十三 珊瑚砲及各種火砲	The Military Museum at Port Arthur.	旅順川谷商店	
2-114	旅順記念絵葉書 旅順陳列 場外庭ニ於ケル露国二十三 珊瑚砲及各種火砲	The Military Museum a collection of trophies at Port Arthur. No.3.	旅順川谷商店	
2-115	旅順記念絵葉書 旅順陳列 場前庭ニ於ケル日軍二十八 珊瑚砲	The Military Museum a collection of trophies at Port Arthur. No.4.	旅順川谷商店	

2-116	旅順紀念絵葉書 陳列場外 庭ノ一部	The Military Museum a collection of trophies at Port Arthur. No.5.	旅順川谷商店	
2-117	旅順紀念絵葉書 旅順陳列 場内ニ於ケル露国探照灯ト 砲弾	The Military Museum a collection of trophies at Port Arthur. No.6.	旅順川谷商店	
2-118	旅順紀念絵葉書 旅順陳列 場内ニ於ケル各種兵器ノ陳 列ト弾痕	The Military Museum a collection of trophies at Port Arthur. No.7.	旅順川谷商店	
2-119	旅順紀念絵葉書 旅順陳列 場内ニ於ケル二龍山堡壘ノ 模型	The Military Museum a collection of trophies at Port Arthur. No.8.	旅順川谷商店	
2-120	旅順紀念絵葉書 場内廊下 ニ各種砲弾ノ配列	The Military Museum a collection of trophies at Port Arthur. No.9.	旅順川谷商店	
2-121	旅順紀念絵葉書 露軍ノ各 種炊具	The Military Museum a collection of trophy at Port Arthur. No.10.	旅順川谷商店	
2-122	旅順陳列場内ニ於ケル東鷄 冠山ノ北堡壘ノ模型	A model of Tung-chi- kuan-shan North Fort at the Military Museum, of Port Arthur.	旅順川谷販売店	
2-123	旅順要塞戦紀念品陳列場全 景	GENERAL VIEW OF THE WAR MUSEUM, PORT ARTHUR.	旅順要塞戦紀念 品陳列場	陸地測量部版權 所有

2-124	(旅順戦跡)旅順要塞戦記念 品陳列場	THE MILITARY MUSEUM, PORT ARTHUR.	満蒙社	旅順要塞司令部 許可済
2-125	(聖地旅順)往時の苦戦を語 る旅順博物館 記念館	MEMORY MANSION, RYOJUN MUSEUM, PORT ARTHUR.		1938年1月20日 旅順要塞司令部 許可済
2-126	旅順戦跡 白玉山中腹ニ於 ケル二十八瓏臼砲	AFTER WAR MT. HAKUGYOKU RYOJUN.		
2-127	白玉山麓ニ於ケル旅順港口 第三回閉塞隊沈没将士ノ記 念碑	MONUMENT HAKUGYOKUZAN BYOJUN		要塞司令部御検 閲済
2-128	旅順白玉山納骨祠			
2-129	旅順白玉山納骨祠	MONUMENT SHRINE ON HAKUGYOKUSAN.	西澤	
2-130	旅順白玉山上納骨祠	Loyalty temple on mt' Hakugyoku, Port Arthur	大連天野満書堂	
2-131	陸海軍旅順戦戦死者納骨堂		東京三葉会	銀座三間印刷所 製
2-132	旅順白玉山納骨祠(其二)	MEMORIAL SHRINE AT TOP PEN-YU-SHAN, PORT ARTHUR.	旅順小川写真店	東京図按印刷社
2-133	白玉山ニ於ケル旅順陣没陸 海軍表忠塔建築工事中	WORKS OF MOUNMET- TOWER.	旅順小川写真店	
2-134	白玉山ニ於ケル旅順陣没陸 海軍表忠塔工事中	MOUNMENT TOWER AT TOP PEN-YU-SHAN.		東京図按印刷社
2-135	旅順白玉山上の表忠塔 (高 さ二百十八尺)	PATRIOTIC TOWER ON PAIYUSHAN.		
2-136	旅順表忠塔設計図		満日社	
2-137	(旅順)白玉山上表忠塔 高サ 二百十八尺	THE WAR MOUNMENT, LU- SHUN.		
2-138	伏見宮殿下御染筆 (表忠塔)			
2-139	旅順表忠塔			

2-140	白玉山中腹より表忠塔を望む	THE MONUMENT OF THE LOYAL DEAD FROM MT. HAKUGYOKU. PORT-ARTHUR.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部許可済
2-141	旅順東港ヨリ見タル表忠塔	Port Arthur,	旅順東京堂	
2-142	旅順旧市街ヨリ白玉山ヲ望ム	PAIYUSHAN PORT ARTHUR.		要塞司令部御検閲済
2-143	旅順鎮守府	THE NAVAL STATION AT PORT ARTHUR.	小川写真館	
2-144	旅順要港部	THE ADMIRALTY HOUSE PORT ARTHUR.		
2-145	旅順市役所		大正写真工芸所	
2-146	旅順偕行社	Kaikosha of Port Arthur,	旅順東京堂	
2-147	旅順民政署及日本赤十字社 旅順委員会	Civil Administration Office & Red Cross Society, Port Arthur		
2-148	旅順民政署	THE CIVIL ADMINISTRATION OFFICE, PORT ARTHUR.	大正写真工芸所	
2-149	旅順関東庁医院	THE HOSPITAL OF KANTO-CHO, PORT ARTHUR.	大正写真工芸所	
2-150	(旅順)旅順市役所	THE RYOJUN MUNICIPAL OFFICE. PORT-ARTHUR.		1935 年 7 月 4 日 旅順要塞司令部御許可済
2-151	旅順衛戍病院ヨリ白玉山ヲ望ム	PEIYUSHAN FROM HOSPITAL, PORT ARTHUR.		東京図按印刷社
2-152	旅順陸軍病院 漲る明色			1935 年 7 月 4 日 旅順要塞司令部御許可済

2-153	旅順乃木町雪中の光景（其一）	SNOW IN NOGIMACHI STREET, PORT ARTHUR.		東京図按印刷社
2-154	（旅順名所）乃木町通の繁盛		大連満蒙社	
2-155	旅順乃木町			1935年7月4日 旅順要塞司令部 御許可済
2-156	旅順鯖江町	SABAYECHO PORT ARTHUR		要塞司令部御検 閲済
2-157	（第六輯）旅順黄金堂前迎橋 より青葉町を望む	AOBA ST. FROM MUKAE BRIDGE, PORT ARTHUR	旅順阪本書店	
2-158	（旅順）旅順青葉町通	THE AOBACHO STREET, PORT-ARTHUR.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部 検閲済
2-159	旅順大和ホテル（黄金台別館 貸別荘）	YAMATO HOTEL PORT ARTHUR.	大正写真工芸所	
2-160	（旅順）旅順駐割歩兵連隊	THE RYOJUN STATIONING REGIMENT, PORT- ARTHUR.	大正写真工芸所	旅順要塞司令部 検閲済
2-161	関東庁 旅大道路白銀山隧道		関東庁	
2-162	旅大道路龍王塘ノ龍王橋	RIUO BRIDGE, RYOJUN.		要塞司令部検閲 済
2-163	旅順停車場	THE STATION OF PORT ARTHUR.	大阪屋号	
2-164	旅順停車場	PORT ARTHUR STATION.		要塞司令部御検 閲済
2-165	旅順駅 吞吐す人			1935年7月4日 旅順要塞司令部 検閲済
2-166	旅順日本橋	NIHONBASHI PORT ARTHUR.		
2-167	旅順新市街全景（其一）	The Whole View of New Ryojun City'		

2-168	関東庁民政部	THE CIVIL ADMINISTRATION DEPARTMENT, OF THE GOVERNMENT OF KWANTUNG.		東京図按印刷社
2-169	旅順 関東庁	GOVERNMENT HOUSE, PORT ARTHUR.		要塞司令部御検閲済
2-170	大島都督官邸 関東民政部 陸軍部	OSHIMA OFFICE MINSEIBU. RIKUGUNBU.	旅順小川写真店	東京図按印刷社
2-171	旅順後樂園の噴水	Gorakuyuen Park Port Arthur,		
2-172	(旅順名所)後樂園公園	VIEW OF KORAKUEN PARK, PORT ARTHUR.	大連満蒙社	
2-173	旅順新市街公園ノ一部	VIEW OF THE PARK IN PORT ARTHUR.	大正写真工芸所	
2-174	旅順都督府陸軍部	Military Department, Kwantung Government-General, Port Arthur	大連天野満書堂	
2-175	旅順博物館			
2-176	旅順博物館列品室			
2-177	旅順博物館列品室			
2-178	(旅順名所)関東庁博物館	THE MUSEUM PORT ARTHUR. (KWANTO GOVERNMENT OFFICES)	大連満蒙社	
2-179	旅順中学校 (302)		日華堂書店	
2-180	(旅順)旅順第一中学校	THE RYOJUN 1ST SCHOOL, PORT-ARTHUR.	大正写真工芸所	
2-181	旅順高等女学校	Girl's high School Port Arthur,	旅順東京堂	
2-182	旅順高等女学校	THE GIRL'S HIGH SCHOOL AT PORT ARTHUR.	大正写真工芸所	

2-183	旅順工科学堂(元露国海兵団)(長サ七十三間)	THE RYOJUN ENGINEERING COLLEGE PORT ARTHUR.		東京図按印刷社
2-184	旅順名所満洲の最高学府工科大学	VIEW OF RYOJUN ENGINEERING COLLEGE, PORT-ARTHUR.	大連満蒙社	
2-185	旅順工科大学ノ本校(長サ七十三間)	RYOJUN UNIVERSITY.		1929年6月17日 要塞司令部御検 閲済
2-186	旅順新市街全景(第十輯)	WHOLE VIEW OF NEW STREETS, PORT ARTHUR	旅順阪本書店	
2-187	旅順新市街ニ於ケル公学堂支那人教育所		旅順小川写真館	
2-188	大連金州道路 龍王塘水源地		関東庁	旅順要塞司令部 検閲済
2-189	(金州)血染の連隊旗で有名な南山戦蹟記念碑	VIEW OF WAR MEMORIAL OF NANZAN, CHINCHOU	大正写真工芸所	
2-190	日露戦役紀年 金州南山の記念碑	NO. 10. A WAR MONUMENT AT KINCHU.	大連船塚商店	
2-191	金州南山に於ける乃木将軍の有名な詩碑	OLD BATTLEFIELD OF CHIN-CHOU		
2-192	金州城(漢詩)		山下汽船株式会社	
2-193	金州八里庄に於ける乃木勝典中尉戦死の所	OLD BATTLEFIELD OF CHIN-CHOU		
2-194	乃木少尉の墓 大和尚東峰の観音閣			東京図按印刷社
2-195	金州大和尚山中腹の洞窟に有る観音閣	FAMOUS PLACE OF CHIN- CHOU	金福鉄路公司	
2-196	大和尚山之朝陽寺			神戸岡部商店印 刷事務所

2-197	南山 金州城壁		DAIREN VOCATIONAL SCHOOL	
2-198	金州城 石田吟松画伯筆		関東局	1936 年 7 月 10 日 旅順要塞司令部 検閲済
2-199	金州民政署の偉観	FAMOUS PLACE OF CHIN- CHOU		
2-200	激戦を語る金州南山戦蹟記 念碑	OLD BATTLEFIELD OF CHIN-CHOU	金福鉄路公司	
2-201	壮嚴なる金州神社	FAMOUS PLACE OF CHIN- CHOU		
2-202	英霊永へに眠むる金州南山 神社	FAMOUS PLACE OF CHIN- CHOU		
2-203	金州孔子廟(城内東南隅に在 り)	FAMOUS PLACE OF CHIN- CHOU		
2-204	日清日露の古戦場 金州城	FAMOUS PLACE OF CHIN- CHOU		
2-205	古都金州の城内満人街	FAMOUS PLACE OF CHIN- CHOU		
2-206	金州市街の展望	FAMOUS PLACE OF CHIN- CHOU		
2-207	靈峰金州大和尚山の雄姿	FAMOUS PLACE OF CHIN- CHOU		
2-208	壮烈鬼人も哭く金州三崎山 三烈士の碑	FAMOUS PLACE OF CHIN- CHOU		
2-209	金州八景に一翠緑滴る名利 響水寺	FAMOUS PLACE OF CHIN- CHOU		
2-210	金州地獄極楽堂の仏像(極楽 篇)	FAMOUS PLACE OF CHIN- CHOU		
2-211	鬼気身に迫る金州地獄極楽 の仏像(地獄篇)	FAMOUS PLACE OF CHIN- CHOU		

洪熙の残照（2）

執筆：奥村松平

解題：菅野智博、甲賀真広、今井就稔

編集：奥村武彦、上田裕子、甲賀真広

解題

『洪熙の残照』は満洲瓦斯株式会社（以下、満洲瓦斯）総務部人事課長の故奥村松平氏（以下、松平氏）によって戦後に書かれた手記である。松平氏の略歴や当該手記を掲載するに至った経緯、史料的价值については、菅野智博、甲賀真広「満洲瓦斯株式会社人事課長の満洲追憶——奥村松平『洪熙の残照』解説」（『満洲の記憶』第7号、2020年）を参照されたい。本解題では主に本号掲載分の概要を述べる。

本号の掲載分は、1945年の8月上旬から10月上旬までの内容である。周知の通り、この間にあったソ連侵攻や日本の敗戦は在満日本人の生活を大きく変える出来事であった。奥村一家は、満洲瓦斯関係者と共に8月13日に新京を離れて朝鮮半島へ向かい、途中の安東で敗戦を迎えた。その後、一部の上層部は操業復帰のために先に新京に戻り、松平氏も家族を残して、数名の技術者と共に8月19日に安東を出発したという。帰路では一時

的に奉天にも滞在し、そこで現地の敗戦後の状況を目の当たりにした。新京帰着後、ソ連占領下での避難生活を過ごししながら各種業務に従事した。手記には、敗戦前後の新京の様子や満洲瓦斯関係者の避難状況、敗戦直後の奉天の状況、日本人の避難生活、ソ連兵関連の噂話などが事細やかに書かれている。ここでは、本号掲載の内容から以下の2つの興味深い点を指摘しておく。

1つ目は、敗戦前後の満洲瓦斯の動向についてである。ソ連侵攻後、社員やその家族の安全をいかに守るかが現地会社や企業にとって喫緊の課題であった。手記をみると、満洲瓦斯は満鉄と交渉した結果「各方面からの要請が多いため充分とは云えないが車輛を五輛用意する、それは十三日朝七時新京駅を出発し朝鮮の鎮南浦へ向う」こととなり、それを受けて婦女子や老人、子どもを中心に社員の家族を避難させ、さらに護衛のために青年独身社員約10名を付き添わせること

とし、その他の男子社員は新京に 残留することを決定した。しかし、発車直前になると「今この危急のとき招集されていない男子が新京に残っても万一戦争に巻き込まれるような状況になった場合満洲瓦斯の本社機構が潰れてしまう」可能性があるため、急遽社長以下男子社員も合わせて一時避難することとなったという。本手記には8月9日以降のことが詳細に記録されており、当時の緊迫した雰囲気伝わってくる。

もう1つは、「満人社員」との団体交渉や退職金問題をはじめ敗戦後の満洲瓦斯の諸業務や様々な対応についてである。ガスは重要な生活インフラであるため、松平氏をはじめ一部の満洲瓦斯関係者はすぐに避難先の安東から新京に戻った。そこで、避難しなかった社員や「満人社員」の手によってガス製造作業は続けられていたことを知った。しかし8月末になると、「満人社員」から退職金を求める団体交渉があり、松平氏は人事課長として退職金の計算作業を行ったため、手記には団体交渉前後の様子が詳らかに記されている。松平氏が退職金を計算するに

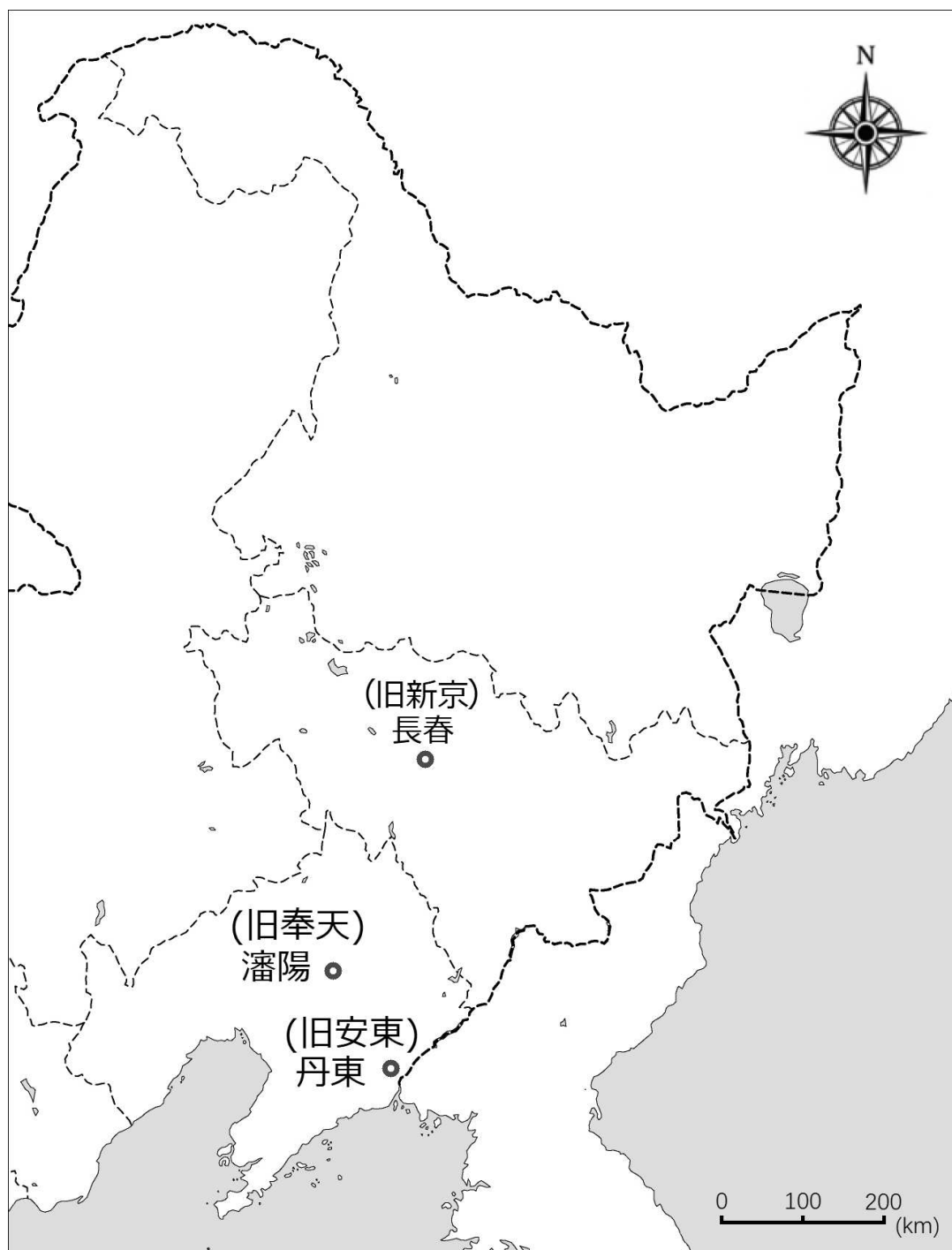
あたり、「奉天では日本の敗戦と同時に市内のあちこちで満人達の不満が吹き出し退職金を出せと強硬に迫るようになった。これに対して日本人経営者の困惑ぶりが目に見えるようだった。結局何れの会社も大体月収の二か月分を退職金として支払うことで事態を收拾し得た模様」という大町奉天支社次長の話を参考にしていた。ここからは、現地労働者への退職金支払い問題は当時の日本人経営会社や企業にとって共通する課題であったことがわかる。

上記の2点をはじめ、本号掲載の『洪熙の残照』(2)からは日本敗戦前後における満洲瓦斯の動向や状況、諸問題への対応、ソ連占領下の経営などが窺える。これらは一満洲企業史や日本人の避難生活のみならず、戦後も長らく続いた引揚者の補償問題を理解する手がかりにもなりうると考える。

最後になるが、本号分の掲載についても奥村武彦氏と上田裕子氏から多大なご助力をいただいた。新型コロナウイルスで大変な中にもかかわらず、ご協力いただいた両氏に衷心の謝意を示したい。



写真 奥村松平氏（1942 年大連朝陽寺本堂前にて）



奥村松平氏の非難經由地（作成者：大野絢也）

凡例

- ・各見出しは執筆者がつけたものである。
- ・本号に掲載するのは1945年8月－10月分の回想であり、それ以降の部分は次号以降に掲載予定である。
- ・旧字体や異体字、表現等は、資料の性質を考え原文のままにし、明らかな誤字と思われる箇所は訂正して掲載した。
- ・判読できない文字は■とした。

本文

洪熙の残照

七月に入り雨はなく暑い日が続く。春以来時々思いだしたかのようにしとしと雨が降り、それは全くの恵みの雨となって畑仕事も捗り秋の収穫時には種々の野菜ものが山のように得られるだろう。そうなれば正子が安心してことだろうし、栄養不足気味の子供達にもお腹一杯食べさせることが出来ると希望がふくらむばかり。その上ただ一羽だが雌鶏が時々卵を産んでくれる。それがこの上ない恵みであり、夕餉にわずかながら色どりを添えてくれることも嬉しい限りであった。ただ一つの卵でも我が家ではその白い卵が金色にも輝いていたのだった。乏しい食生活の中にも満ち足りた喜びがふくれつつ厳しい現実の日々を耐え抜く希望が生まれつつあった。

日々の新聞にも詳しい記事がないから想像を逞しくする他ないが、沖縄ではどれ位の人が殺されたのだろう。多くの兵が散ったことだろう。沖縄の人々は恐らく死生の境をさまよいながら逃げ場のない狭い島々でどんな苦しい日々を送っているだろうか。勝ち誇った米軍の将兵は愈々日本本土攻略の作戦を練っていることだろう。上陸に備えて日本軍は乏しくなった武器で戦えるのだろうか。現役兵はまだ兵器があるからいいが国民の多くは男も女も老いも幼きも身を守るものが何一つもない。それでも竹槍で戦えと言うのか。米軍はライフルや火焰放射器など無数の強力兵器を持っているというのに。大本営の将軍達はその無能ぶりをさらけ出しながらもまだ国民に戦えというのか。何ともやり場のない怒りと空しさの日々がつづく。そしてここは外地満州

国である。米国はじめ諸外国に承認されていない一独立国ではあっても且、日本の傀儡国家と云われても日本国とは別個の存在である。日本全土が空襲の対象となろうとも、ここ満州国までその標的とすることはなかろう。建国当時の満州国国歌には人民三千万と唱われていたが、日本人は軍民併せても一割あるかなし満州族女真族が同じく一割程度で大半は職や食を求めて移住して来た中国人が多数を占めている。その他は朝鮮族及モンゴルや多くの少数民族だ。ここも所謂モザイク国である。大東亜戦に於ける日本の敗勢が夫々彼等に心の変化を及ぼしている筈だが今はまだ表面的には従前と何ら変わるところがないようだ。それだけに何とも無気味ではある。市中を歩いても電車に乗ってもさしたる変化の気配はない。撫松路の周辺でもいつものように平穏の日々が続き日米間の大きな戦争のことは人々の頭の中では描かれていても日常生活は表面的に変化がない。

我が家でも正子も子供達も楽しい日々を送っていた。唯、大連時代と違ってここへ移り住んでから家族らは新京の都心の繁華街へ出る機会が少ない。この頃廸子にバレーを習得させようと相談一決、数回正子が同行して市中のどこかへ連れて行ったことがあるものの、それ以外は子供達の世話にかまけて時間を過ごすばかりで外出と云えば近くの満人市場へ買物に行くか時たま近隣の北川君や高木さんの奥さんと世間話に憂さばらしをする

位が精一杯の生活が続いていた。唯その中で一回きりだが春の或る日曜日に高田精作新社長の夫人の招待で正子が市の中心大同広場近くの某大飯店へ出掛けて行ったことがあった。これが正子が独りで都心へ行った思い出だという。この日は日曜日だったので私が家に残り子供らと留守を守り、畑の手入れや鶏の世話などで時間を過していた。もうこの頃には昨秋の越冬野菜は残り少なくなったが市場には新鮮な食糧が出始めていたので、食料はいつでも手に入る上、日常生活にはまづこと欠くことなく全て順調であった。

日本では米軍機が今も地方中核都市を襲っているらしい。大都市は殆んど壊滅させられたので次の目標として順々に地方を爆撃している模様である。今年三月には神戸がやられたというのが詳細は不明のままである。神戸市灘区に住んでいた正子の両親は事前に危険を感じて広島竹原の少し東に当たる小さい農漁村の大乗村高崎に疎開したという手紙があったから両親はじめ妹和さん、弟成浩も無事であることは判っていた。しかし彦根からは便りが無い。地方の小さな田舎都市なので襲撃の目標になることはなかろうが非戦闘員でも無差別に殺しまくる鬼畜の如き米軍のこと大都市が壊滅したあとは次第に地方に目標を移し物量に物言わせて小都市も爆撃するのでなかろうか。日本軍にはもう之に対向する戦力が残ってないから、後は彼等のほしいままになることは明かである。なんともやる瀬の

ない虚しさである。新京では日本人が既に祖国の敗戦を感じつつあるとき、満人達には更に適確な情報が入手出来ている筈だし、彼等の情報伝達能力は昔から優れたものである。日本の敗戦を見越しているのではないか。それなのに未だに反日的な行動に出る兆しもない。何故だろうかと思議な感じがする。六月末教育招集から解放され第一師団を去った後、在郷軍人に対する赤紙召集が実施されたらしい。このように次第に緊迫する状況の中での社業は多忙を極めていたので外部のことにまかしている暇もなく本社内では社員一同が必死に業務に従事していたが日本本土の情勢を知っている、これから先どうなるのか誰もが云わず語らずただ口を堅く結んだまま作業に従事している姿は誠に健気というべきか。本社構内に設けられた形ばかりの防空壕が今はもう何の便りにもならない奇妙な存在のように目に写っていた。

七月は空は抜けるように青く快晴の暑い日が続いた。その中で社業は順調に進んでいた。この頃関東軍司令部へ赴く用件はなく、吉野町に近い敷島警察署の兵事係へ時折連絡のため出かける程度だった。新京市中の日満人ともそれぞれが仕事に忙しそうに立ち働きつつある姿を観ると、内地の悲惨な状況とは対照的に何だか余りにも静かなのが不思議であった。日本では老いも若きも必死の形相で防空演習をして毎日を米英撃滅を叫びモンペ姿で懸命なのに比べると、同じくモンペ

姿であるもののこの人々は差し迫った危機感に乏しくのんびりと行動しているように見えた。満州国内なのでここまでは米機が来ないということからだろうか。日本人は少く満人や中国人が多い地帯だからか。これを嵐の前の静けさとも云うのだろうか。既に即戦力の関東軍部隊は何れかの南方へ移動したらしく、満州国北辺や他の■点には、新しく招集された部隊が補充されたとの噂があり如何にも不気味な様相を呈しつつあった。

小学校はもう夏季休暇に入っていた。春光小学校三年生の廸子は毎日ランドセルを背負って通学していたが七月の二十日過ぎから夏休みとなり、登校指定の日以外は家で武彦(数え年六才) 玲子(同四才)の遊び相手になったり、家事の手助けしながら沢山の宿題をこなしていた。伶俐な上頓智もあり又機転の利く児なので、私達は何も心配することなく子等の成長を楽しみつつ希望に満ちて見守っていた。廸子は、比較的運動神経も発達しているらしかったので、バレー教室へ通わせることを考えたのかも知れない。自宅が街はずれでもあり激しい時節なのでいつかそんな夢のようなことは忘れて了っていた。何はともあれ、三人の子供が健康に恵まれていたことは何よりもの幸福であり心の安らぎであった。唯、戦争の先行きがどうなるのか、適当な時に停戦することになればよいがと願いつつ、一日一日の無事を喜び暮すばかりであった。でもソ連の動きが何よりも心配だった。

た。独ソ戦争中も日満軍ともにシベリヤを脅かすことをしなかった上日ソ中立条約の効果もあるのでソ連が満州を侵すことはまづないだろうと観察していた。日本が米軍に上陸されるような事態にでもなるなら、皇室も一時満州に避難された方がよいのではないかとふと考えたこともあった程、東京より新京の方が安全なのではないかと考えたものであった。その後の激変を思えばとんでもないことであったが、そんなことが心に浮ぶ程に不安な中にも新京は静かであった。

遠い昔、鎌倉時代弘安四年元寇の再度の来襲あり、九州大宰府迄侵されたときは颱風により敵船の殆んどが壊滅したので国難を危く免かれることを得た。この風を神風と称し、日本に国難生ずるときは神風が吹き国を救ふとの妄説が行れることも度々あり、神風を信ずる者は科学の進んだ今日の事、殆んどいないだろうが、何とか窮余の策がないのだろうか。

八月三日、総務部人事課の椅子に坐っていたとき、突然、吉野加生(マスオ)君が入って来た。同君は大連時代人事課勤務だったが同じく社員の女性八尋恵子さんと結婚することになった。所謂、社内結婚だった。真面目な好青年だったし、主任としての私の部下という関係から同君から直接仲人の依頼を受けた。初めての事だったがお引受けして正子と二人で媒酌させて頂いたことがあった。場所は中央試験場の西あたりだったが思い出せない。その吉野君も新京へ転勤して来て

いたが、遂に召集令状が来ましたと赤紙を取り出して見せた。集合地は錦州県になっていた。同君はこれから出発しますので挨拶に来たと云い、意外に悲壮感もなく、サバサバした動作で別れを告げて出て行った。次第に減っていく社員、数少ない若者が引抜かれてゆく。今日の当り関東軍の末期症状を見る感じがする。市民生活に必須の事業でさへ構ってはいられないというところへ来て了っている状況である。応召する若者も、初期には出征祝いの旗々に囲まれ大勢の人々に万才の声と共に見送られて郷土を出発したのに、今は普段着の協和会服も召集令状一枚をしのばせ奉公袋を腰に単身新京駅へ向って行く。見送る私は只同君の無事を祈るのみだった。相変らず暑い日が続いていた。人事課の部屋の北にはずっと空間が広がり、約百米離れたところに、東西に伸びる石炭瓦斯乾溜棟が見えていた。四六時中、そこでは乾溜用のレトルトを加熱して石炭ガスを発生させているので、炉室は熱気でムンムンしており、作業に従事する人達はいつも半裸状態であった。又炉室の外部西構内には鉄道引込線が進入していて、無蓋の石炭用車輛から瓦斯用炭や燃料用炭が降ろされ、これらの石炭は山のように野積されていた。この山積みの石炭が自然発火して、真赤に燃えている部分があり、消火の仕様もなく放置されたままだった関係からも、構内全域に亘り気温が高いことは当然であったかも知れない。その影響もあつてか、私

達の部屋でも蒸暑さを感じる日が続いていた。

何日か過ぎ、机に向かって仕事に夢中になっていた私の前に人の気配を感じ、顔を上げると、そこに出征して行った筈の吉野加生君が立っているではないか。それは、たしか八月六日のことだった。どうしたのかと驚き尋ねると同君は笑い乍ら答えた。召集令状記載の日時に指定された部隊に到着したところ、点呼実施のあと部隊長から実に意外な話があった。部隊とは名のみで新たな招集兵に支給すべき軍服軍靴等は勿論のこと兵器と名付けるべきものは何一つない状態である。従って今一度自宅に引帰して、出刃包丁でも何でもよいから武器になりそうなものをさがして持って来いとこの命令だった。早速そのまま引返して新京の自宅へ帰り、このような武器を用意したのでこれからもう一度錦州の部隊へ行きますという。見ると吉野君は訓練用の木銃の先に出刃包丁を針金でぐるぐる巻きにしっかりと固定したものを右手に持っていた。出刃包丁は柄が汚れていて、かねがね自宅で使っていたものである。その出刃包丁を招集される以前から在郷軍人の訓練用として用意しておいた木銃の先に括りつけてある。協和服も靴も帽子も自前のものでしっかりとゲートルを巻いていた。それは実に異様な姿である。こうして同君は別段恥じる様子もなく、颯爽と私たちの前から再び姿を消して行った。物不足に慣らされ不満を口にすることなく、命の

ままに行動せざるを得ない若者の凛々しくも痛ましい姿が今も目に残っている。錦州県の部隊に再び集って青年招集兵の部隊は、軍とは名のための哀れな集団だったので、これが南満州の部隊の実体であったであろうことは想像するに余りあるもので、これが南満州の部隊の実体であった。満州国北辺の関東軍はこれ程落ちぶれた存在でないとしてもその戦力は推して知るべきであり、無敵関東軍との誇張も実は当初から国民を欺くための精神昂揚のための空しいものだったのでなかろうか。日本軍上層部の將軍達の虚勢のプロパガンダだったのかも知れぬ。それに躍らされ祖国のためを信じて死んで行った多くの兵や今も殉じつつある国民こそ哀れと云うべきであろう。吉野君が新京からその姿を消してのち八月六日はいつものように暮れて行った。夕刻、勤務を終ってのち社員達はみな帰宅して行った。極く少数の現場当直員だけがいつものように残り、炉室では相変らず徹夜の交替作業に従事する社員や傭員の活動が続いていた。

玄関前の畑の馬鈴薯は順調に生育しつつあった。正子がもうぼつぼつ少し掘って使ってもいいでせうと言ったが、冬の事を考えてもう少し待つようにと話していた。白色レグホンの鶏も一羽ながら大きくなり卵を産んでは子供らを喜ばせていた。木暮家に隣接した部分には玉蜀黍が背丈より高くなり沢山の実をつけていた。素人作りながらも地味もよく肥えているのか出来ばえも美事なので収穫が

楽しみだった。裏の南瓜畑ではつるが四方八方に伸び多くの南瓜が葉の間からかいま見られたので満足していた。全くの素人なので蔓の芯をとめることを知らず、伸びるがままに放っておいたのが、お笑いの種だった。しかしその不手際の部分はよく肥えた地力が補ってくれたのかも知れない。その他の部分畑の南部は何故かもう関心外だった。それだけ会社の仕事のことで新京のことで時局の成行に心を奪われ満州はどうなるのか、これらのことが四六時中頭から離れなかったもので、畑の作物全般のことまでは及ばなかったのかも知れない。

八月七日、満州新聞は配達されていた筈であるが、記憶から消え去っている。唯この日も非常通り電車で出勤していた。広島が米軍の新型爆弾で大きな被害を受けたらしいことがみな最大の関心事であり心配だった。又しても「新型爆弾」で日本は「遅れ」をとって了った。昨年末、話題になったマッパ爆弾が開発されていたなら、こんなことにならなかったかも知れない。次から次へと敗報ばかりが続く。この先日本はどうなるのかと心配しながら今日も作業は平常通り続いていた。それぞれの社員の足は地についていても、その心は薄氷を踏む如き状態だった。時が経つにつれて色々の情報が断片的ながら入って来るようになりそれを総合すると広島が全滅するほどの大きな被害らしい。米軍がとんでもない新しい爆弾でやったとの実情が判明するに従い、彼我

の戦力の差の余りにも大きいことを知らされる。開戦前米国を相手に戦うべきではない。飽まで外交的折衝により解決を目指すべきとの私見が正しかったのだ。日本未曾有の敗戦が目前である。大本営では何を考えているのだろうか。日本全土で国民が塗炭の苦しみを味わいつつある今日、政府は何をしているのか。しきりに本土決戦が呼ぶ声が伝えられるが、本土で戦えば必勝の自信があるというのだろうか。

排日侮日が対米戦争の原因というなら、日本は中国其他の民族に対する侮蔑の感情が絶対になかったと言えるのだろうか。■々当初日本軍部にその批判に対する■■■な答えを持っていたのか。「強い者勝ち」と「破れかぶれ」の無計算の驕慢が祖国をこの窮地に追いつめたのではなからうか。

政府は、否軍部はここまで追いつめられた結果、目が覚めたのか停戦交渉がどこかで始められているという噂が聞こえてくるようになっていた。今になってとも思うが、既にそれより他に執るべき道はない筈である。交渉が進むとして、満州国はどうなるのか五里霧中のまま時間が過ぎていた。

八月八日の朝も六時過ぎ起床、いつものように朝食をとったあと玄関をでた。玄関のポーチ前左側の畑地には堅固な防空壕が用意されていた。裏の柵を出て電車の終点に向った。暫く待ったあと電車に乗って出勤の途に就いたが、この日洪

熙街で乗り換えたか直通だったかは覚えていない。けれども撫松路から洪熙街間の折返し運転電車はなかった筈だから直通だったと思われる。会社から帰宅のときは撫松路行の電車と環状線を廻る電車の二種類があり後者を利用した場合は洪熙街で一旦下車して、次の撫松路行を待たねばならなかったわけである。

会社へ着いてからも日本人社員はみな不安を抱きながらも社業に従事していた。それはいつもの通りの風景であったが、唯昼の休憩時間になると、話題は期せずして広島の話になって行った。その上、戦闘員も非戦闘員も無差別に攻撃対象とするアメリカの非道を非難することに集中して行った。ただここまで来てはもう何とか早く停戦する以外に打つ手はないのでないか。何とも云えない空しい時間が過ぎていくばかりでこの日も家に帰ってからも落ち着かない。廸子は多少判っているようだが、国の大事を理解するまでには至っていない。他の二人は余りにも幼いので無心のまま蚊帳に入って眠りに就いた。不安の心が静まらないまま寝に就く。

八月九日朝、いつものように出勤の途につく。今日も暑くなりそうだった。ソ連侵攻のことを知ったのは出勤してからのこと。この日早朝、満州国境を東からも北からも西からも一斉になだれの如く進入して日本軍と交戦中との情報が入った。不安の中にもソ連の自重を期待していたのが裏切られ、最悪の事態となった。

「戦争」が身近な事実となって迫ってきた。その詳細は何も知る術がない。各国境では日満軍共に圧倒的なソ連軍と戦っているらしいが、その帰趨は既に誰の目にも明らかである。今更云っても始まらないが、昭和十六年日ソ中立条約を結び、独ソ交戦中も日本はソ連を侵さず、しかも日ソ不可侵条約の有効期間中の筈であった。独降伏後シベリア軍を増強しいよいよ日本の敗色濃厚と見るや、弱味につけこんでのこの侵攻だ。正に火事場泥棒的背信行為として批難さるべきである。只でさえ戦力増強を怠った陸軍首脳の無能無策に加えて今日の非勢の関東軍である。まともに太刀打ち出来る筈もない。すべてはソ連のなすままに蹂躪されるのを手こまねて見守るしかない。国策として東満北満の開拓村へ送り込まれた日本内地の寒村の農民達、少壮の若者だけならまだしも、軍の無責任な宣伝に乗せられて、渡満して来た人達の中には多くの老人婦女子や子供達も数知れず。夢と希望に満ちて展開して行った満州の農地、それは半強制的に満人農民から無償同然の安い価格で取り上げた怨念のこもる土地とも知らず入植してきた人たちである。彼等不遇の日本農民達は前線近くに並べられた藁の盾の如き哀れな存在であった。明治初年の北海道に定着させた屯田兵に擬し満州の北の守りの一助として送り込んだのならば、之を保護助成するための最強の関東軍を常駐させてこそ真の国策と云うべきでなかろうか。十分な装備も

整えず弱体化した劣勢の兵力で防衛が出来る筈がない。断片的な敗報が相次ぐばかり、前線の兵や開拓農民その家族達の悲惨な状況が目に見え、居ても立ってもいられない気持で仕事にも気が乗らない。

社員たちもみな迫りつつある現実には不安の表情をかくさない。樋口文書課長は社長と打合わせた後情報蒐集のため満鉄本社へ出掛けて行ったまままだ帰社しない。五時過ぎ状況不明のまま退社し帰路に着く。第一師団兵営の前を通るがさしたる変化はない。六月に別れた兵長や上等兵はもう居そうにない。彼等の無事を祈るばかりである。電車も平同様に運ばれ車内から見る市中の様子は心なしかまだ平静である。終点撫松路に着き急ぎ自宅に戻る。正子らもラヂオ放送によりソ連軍侵入のことは知っていたが勿論詳しくは報道もなく不安のまま時を過ごすより途がない。只覚束ない乍ら侵攻を喰い止めるか停戦が実現することを祈るのみであった。この日長崎に米軍が再び原子爆弾によって攻撃したことなど知るべくもなかった。家族みな不安のまま寝に就く。

十日、出社する。昼食時には折にふれて吉野町辺りでピロシキを食べに行っていた若い松村伸之君や羽藤君も、席にいても仕事が手に着かず、攻め込んで来たソ連軍のことを気にしてその話ばかりしている。しかし炉室では、常のように煤にまみれ乍らの作業が続いていた。それは市民への石炭ガス供給を止めるわけに

はいかないからの必死の作業だった。ソ連の戦車隊が白城子に迫りつつあるという噂が耳に入った。それが事実とすると、新京を目指しているのではなからうか。曾って昭和十四年五月のノモンハン事変のとき、日本軍が惨めな大敗を喫した悪夢の再現だが、敵は満州の中心部をねらってやってくる。関東軍に之を防衛するだけの戦力は最早残っていまい。ふと昨年独身寮生活をしていたとき、出勤の途次見かけた関東軍司令官山田乙三大将の顔が浮んだ。轡を取って歩く若い別当の姿と白馬に跨り道行く人々を傲然と見下ろしていく將軍、そこに明治を今に引きずる陸軍の古い体質を見た思いであった。そのとき満州の危急のときこの將軍が凌ぎ切る能力を持っている筈はないとの不安が心をよぎった。それが現実となって、今眼前に迫ろうとしている。関東軍はこの非常事態にどう対処しようとしているのか。徒手空拳の新京市民は、何の執るべき術もなく騒然となり右往左往し出した。

十一日、撫松路に若しソ連の戦車が来たらどうすればよいのか。何も考えられないまま出社する。市中には落着かない日本人が不安の色をかくさず動いている。しかし電車は平常通り動いている。そしてまだ満人達に変わった動きはない。洋車も馬車もいつものように走っていて何事もないように見える。関東軍はどうしようとしているのか。何の発表も情報もない。ソ連軍を迎えて市街戦となるのだから

うか。常に「居留民の保護」を口実に中国と事を構えてきた軍は、何と考えているのか。司令部から何の音沙汰もない。ソ連戦車軍は王爺嶺を過ぎ白城子に達したらしい。東満方面からも敗報がつづく。市民達は軍の無策を怒りいらい、道路に畳を持ち出してそれを防壁とし、蛸壺を掘っているという噂が耳に入る。関東車がノモンハン事変のとき、戦車と師団を繰り出しても敗戦の憂き目を見たというのに、市街にどんな防壁を作ったところで防ぎようもないのに。まして蛸壺を掘って何の役に立てようというのか。螞蟷の斧にも似た行動が事実であったとしても、手を拱いてぢっとしていられない市民のいらいを嘲えない。嘲うどころか他に何か施す術がないか。地団駄を踏むばかりだ。

満鉄本社から帰って来た樋口文書課長の話では、軍人や政府官僚が家族達らと共にいち早く鉄道を利用して逃げ出しているため新京駅は混乱の極みだという。本当だろうか。我が耳を疑ったが何ということか。一般市民には何の情報を与えないばかりか、居留民保護の責を果たすことなく、軍や官僚が真先に逃げ出すとは、呆れ果てた無責任をさらけ出す醜態だ。開いた口が塞がらず、日本刀を腰に威張っていた将校たちのこの無責任さ、前線では非勢にも耐え必死に戦っているというのに、この様は何ということだ。正に亡国の兆しここに極まったというべきか。このことが、多くの社員にも知れ

わたるに時間を要しない。これが社員たちの耳に入ったとき、みなどんな思いをするだろうか。やる瀬のないばかりである。新京市全域が戦場になるのか、そのとき我々は何をどうすればよいのか。何の答えもないまま社業はつづいていた。

夕刻自宅に帰る。人影は少い。それぞれ家の中で戦況を心配しているのだろうか。撫松路は新京市の南端である。あと何日か経ったらソ連の戦車群がいち早くこの辺りへ侵入して来るのでなからうか。不吉な予感が頭をよぎる。家族たちをどう守ってやればよいのか。隣の北川君や北側の瀬戸口さんの家ではどうしているのだろうか。■■万一のことを話し合っているのかも知れないが、何れも扉を締めたまひっそりしている。正子に危険が迫りつつあることを話をする。子供たちは事情が判らぬまま不安の表情を見せている。

ぢっとしておれないまま部屋全部の戸締りを点検して廻る。各窓には真黒い木綿の暗幕が充分以上の長さで幅でかかっている。それをきっちり閉めて、光が外へ漏れないこと確かめる。各部屋の電燈の白いガラスの傘の上から、外黒内赤の防火幕がつけてあったが、電灯は台所の部屋だけにする。部屋の戸締りは完全だった。玄関から外に出て見る。右側の鶏舎には一羽がじっと■っている。鶏までも不安を感じられるのだろうか。新京の夏の夜は、十時頃迄は明るさが残り、畑の作物の様子もよく判断出来る。南瓜 玉

蜀黍、馬鈴薯、ナスなど、みなそこそこの出来ばえだというのに、収穫を目前にソ連兵が侵入してくるとは何ということか。正子がジャガイモを少し掘ろうというのをもう少し待つようにと停めていたのに。それより南の畑に何を作ったのかもう関心がそこまで届かなかった。隅には随分深く掘ってゴボウを作り、人参の種も蒔いておいたが、今は見て廻るきもしない。

そのときは何時頃だったか。八時過ぎか或いは九時過ぎだったか。畑を見廻しているときドーン、ドドーンと遠くでぶい爆音が轟いたのを耳にした。瞬間、ソ連軍の爆撃だッと察した。東方南湖の森の向うより北、大同大街沿いに政府の建物群を襲ったのだろうか。それに続いて鈍い炸裂音がいくつかして、その方向の空が一面にパッと明るくなり、その青白い光は暫く続いて、異様な光を保っていた。恐れていたことが遂にやって来た。続いて大編隊の爆撃があるかも知れない。これは大変だと、すぐ玄関から家に入り正子にその事を告げ、防空壕へ避難することにした。当面の食物、水筒などは正子が用意し、廬子に薬函を持たせ、何枚かの夜具を皆が協力して壕に運び入れた。家の電灯は全部消し、瓦斯の元栓を閉めてそれを確かめた上、懷中電灯と蠟燭の小箱、マッチ箱も用意して、家族皆で畳一枚分位の壕内に移り終り、壕の入口の板戸を閉ぢて避難を完了して先づはホッとす。愈々、新京も戦場となることが実感として身に迫る。壕内に蠟燭をつけ

夜具を敷きのべた上子供らをごろ寝させる。夏なので寒さを感じないが、何となく湿っぽい。全部が避難し終ってから少し気持ちが落ち着く。外の気配が気になるが、その後更なる爆音はないらしい。ソ連の最初の攻撃は小手試しだったのかも知れない。ままよ、今夜はこのまま壕内暮らしだと定めて、灯りを消して寝につく。

狭い壕内で布団は敷いたとは云え、芋ころがしのようなごろ寝なので五時過ぎ目が覚める。どうやら昨夜は二発ばかりの照明弾を最後に、ソ連の爆撃機は襲って来なかった。今日はどうなるのやら気になるまま壕を出て家に入る。正子も起きてきたが、子供達はまだ眠っているという。八畳座敷の暗幕を開けると、明るい朝の日差しがさっと部屋一杯に満ちる。正月に課員の若い人達をこの部屋に招待したとき、危く一酸化中毒になりそうな迷惑をかけたことを思い出す。日本家屋と違う極寒地の冬の密室の怖さと認識不足の怖しさを改めて思い出していた。

床の間には江戸時代の藤井竹外の七言絶句の軸が掛かっていた。

「古陵松柏吼天飈 山寺尋春春寂寥
眉雪老僧時輟帚 落花深處説南朝」

昭和十四年五月頃、まだ大連市常盤橋角の南満瓦斯営業課に勤務中のこと、昼の一時間休みのとき四階の食堂で食事を摂ったあと、碁や将棋を楽しむ人達の傍で時間を過していたとき、小柄で黒い満服姿の五十才台位のひとりの老人が昇って来て、階段近くの窓際に長机を一つ寄

せてから、持参の袋から徐ろに、筆墨と紙を取り出すなり、独りで紙に何やらを書き出した。ふとその姿が目に入ったので興味を覚え、傍へ行くと漢詩を書いている。

その筆運びをずっと見つめていると、口の中で何か呟き乍ら無心に書き続けている。穂先の揃っていないようなチョボ筆なのにその筆先の流れの見事さに心打たれたので、書き終るのを待ち片言の満語で一枚書いてくれるかと問うとよろしいという返事が返って来た。そのための用紙も何枚用意しているようだった。お金はいくらかと尋ねると五毛銭（ウモーチェン、五十銭）だの返事と同時に持参の詩集を取り出し、どの詩でもよいから好きなものを選べという。李白か杜甫の詩をと思いつつ頁を繰っていると好きだった「古陵松柏」の文字が目についた。これを頼むと手まねで注文すると老人はすぐに紙を展べて又もや何やらぶつぶつ呟き乍ら書き出した。ずっと筆の運びに見入る。何とも云えない見事さ、流麗な動きに圧倒される思いで、感嘆するばかり。終ってから紙を巻いて呉れたのを受取り、五毛銭を支払ってから老人に礼を云って別れたが、この時お客は私一人だけだったらしい。流石は文字の国の人、巷のこの老人、名ある人かどうか知らない、勿論署名もないがその時の老人の筆の使い方、その美しさが今も目に残っている。後日、これを彦根へ送り表装を依頼、大連へ送り返してくれた軸が今ここに掛けてある

この一幅である。無量の感慨が胸をよぎる。

朝食後急ぎ出社して対策を相談せねばと早目に家を出る。電車は何事もないように運転されていた。出社して聞けばソ連戦車隊は既に白城子を過ぎ新京を目指しているらしいとのこと。また極めて断片的乍ら東満北満方面の悲報がつづく。それなのに軍からも政府からも何の指令も発表もない。唯あきれるばかり。しかし今となっては各自が自衛策を講ずるより外はない。チチハル鉄道局長だった高田社長は勿論、事の重大さは充分判っている筈なので会社として事ここに至ってどう対処するか苦悩していた。社員たちはみな落着かない表情をかくそうとしない。俺たちどうすればよいのかと云わんばかりの目をしている。社長はまだ決断に迷っている。午後二時過ぎ社内各課の部屋や炉室の状況を見廻り一巡して自室へ戻ろうと本社表門近くを玄関口へ歩いていたとき樋口文書課長が外出するのに出喰わした。何処へ。と質問したところ満鉄本社へ行くとの返事。この今日の事態となつて情報蒐集ばかりではなかろう、社員はみな心配している。社員の家族達をどうするのか。その対策を考えるとでないのかと少々語気鋭く迫ったところ、社長の命により満鉄本社へ社員家族避難のための車両割当ての交渉に行くのだという。少し云い過ぎたかなと感じたがこの返事に満足して同君の帰社を待つことにする。

今日はソ連機の爆撃編隊がやってくるのかも知れないと思ったが、その事もなく空は青く静かであった。新京特別市は満州国の首都である。世界から兎角の批判があるとしても国際的に関心の集まる場所であり、同じ首都と云っても日本の東京都とはその性格を異にしている上、人種の構成も異なる場所である。又関東軍司令部の所在地というだけで、都市防衛のための軍事施設も殆んど無いに等しいのではないか。そんな関係を知悉していて、ソ連は敢て空爆を避け地上戦での新京奪取を狙っているのかも知れない。而も関東軍は在満日本人居留民に対し一片の布告もなく自ら敵前逃亡にも等しい行動をとっている。その事は云わず語らず対ソ戦力の衰乏を表していると云っても過言ではなかろう。事ここに至って何をか云わんやである。あの六月からまだ教育招集が続いていたら、自分にどんな運命が待っていたろうか。首都新京周辺警備が目的だったが、中年兵に三八銃を持たせて戦車群を迎撃せよと云うことになったのだろう。一か月の教育だけで「長期外泊」を命ずとの名目で解散させたのは、或いはそのことの無駄を覚ったのか。こんな思いが脳裏を掠めたまま人事課の部屋に戻って樋口君の帰社を固唾を呑みながら待つ外はなかった。

一般市民たちはどうしているだろう。それよりも尚、国境に近い方面に配備された兵や開拓民たちはどうか。ハルビン支店の社員たちはどうしているだろうか。

白城子は新京北西約三百軒、殆んど無人の荒野を進むような勢いでこちらに向かっているのではなかろうか。日露戦争から四十年経ってのこの有様、明治、大正、昭和と月日を重ねる中、日本の将軍達は軍刀を腰に肩をいからせつつ、国民に威張りちらし、叱咤するのみで、それ以上の何をして来たのか。孫子の兵書に敵を知り己をしれば百戦危うからずとある。日本の将軍たちは、この兵法書神髓の実施を怠り、本当は玩具の兵隊となり果っていたのでないか。曾つてこの満州の野に祖国の繁栄を祈りつつ死んで行った多くの兵隊たちの霊に対し、どの面下げて応えようとしているのか、本当に腹立たしく且情けないことになろうとしている。

樋口君が帰社したのは何時頃だったかは記憶にない。かなり遅くて社員たちの退社時刻を過ぎていたような気がする。すぐ社長室に入り樋口君の報告に聞き入る。このとき何人の部課長たちが社長室にいたのかも覚えなない。

高田社長は満鉄本社から帰社した樋口課長の報告を聞いていた。その内容は各方面からの要請が多いため充分とは云えないが、車輛を五輛用意する。それは十三日朝七時新京駅を出発し、朝鮮の鎮南浦へ向う予定であること、それ以上の車輛の割当は無理である。依って避難する人達はその時間迄に必ず新京駅のホームに集合し連絡を待つことというものであった。以上の結果、社員の家族の婦女子老人子供で避難を希望する者全部へ連絡

すること、尚、之等の人々の擁護のため青年独身社員約十名を付添わせること、其他の男子社員は新京に残留すること、当面避難家族に必要な白米は呌(カマス)入りのもの約二十個を用意すること、及当座の生活用資金を経理課で用意し青年社員に托すること等が決定された。列席する者いづれも遂に来るべきものが来たと悲愴な面持ちであった。これらが決定されたあと人事課長としての私が各社員社宅全部へ連絡のため速刻出発すること、それには一輛だけであった社長用乗用車を使用することが高田社長から命ぜられた。明朝七時新京駅集合とあれば、あと半日の余裕しかない。私は直ちに社長室を出て部屋に戻り会議の結果を電話で正子に知らせた上、全社員宅へ連絡のため乗用車で出発するが、帰宅時刻はかなり遅くなる見込であるから衣類その他必要と考えられるものをすぐ準備すること、子供らにも持てるものは夫々分担させること等を話し、明朝六時には出発の心積りすること、尚北川君瀬戸口君の家族にもすぐ通知するよう云い終って電話を切った。これを聞いた正子がどんな風に受けとったか考えている時間はなかった。すぐ玄関を出ると乗用車が用意されていた。若い運転手鈴木久雄君が社命を受けドアを開けて待っていた。車に乗込むなり会議の要点を話し全社員宅へ連絡のため向う旨を伝える。鈴木君も心得て、まづ新京北東部の社宅街に向う。町名の記憶はないが繁華街吉野町より東の方面だ

った。到着するとすぐ社宅の人達に全員集合を要請の上、ソ連軍の侵入が迫っていること、明朝七時出発予定の用意の車輛に老人婦女子が乗込み避難すること、青年社員何名を選び添乗させること、目的地は朝鮮鎮南浦、急なことだが必要と考えられる品は各自判断の上、準備すること、尚万一この場に居ない社員家族には、速刻連絡してほしい旨伝達する。異議を唱える人は一人もない。皆待っていたかのようにホッとした面持ちである。次の社宅へ向かう旨を述べてここを去る。次は中西部の興安大路の独身者寮を経て安達街の社宅群へ、ここを終えて南部の洪安街社宅群へと急ぐ。唯市内に散在する他の会社の社員の家族の娘さんである女子社員には時間の関係上連絡し得なかったことが心に残っていた。しかし危急のとき娘さんが家族と別れ参加することの不自然さと不安とを考えたので敢て連絡しなかった。洪安街の社宅の人達に伝達が終るとすべての使命の終了を感じ、鈴木君へ撫松路の自宅へ車を向けてくれるよう依頼し、市中循環の電車線沿いの道路を西へ走りつづける。洪安街近くの法務院の建物が次第に後方に去り、やがて視界から消える頃前方に木立群が黒く迫ってくる。洪熙街の分岐点である。間もなくここへ着き、それから大きな道を一路南へひた走る。鈴木君はずっと前方を見つめながら運転している。随分手慣れた運転ぶりなのですっかり安心しながらすっかり暮れなづんだ辺りの景色に

見入る。日赤病院前を過ぎる。満映前、春光小学校前を過ぎれば、あとは撫松路終点も近い。連絡の電話を受けてから正子はどうしているだろうか。廸子や武彦玲子もまだ起きていよう。帰心矢の如しという思いで西方の窓外を見る。何時頃だろう。まだ十時にはなっていないだろう。日はすっかり落ちていたが、薄墨色の西の空には地平線近くににぶい光が残り地上のすべての黒と対照的に強い印象として目に焼きついている。洪熙の残照と云うのだろうか。そのはるか向うからソ連軍の戦車の大隊がこちらへ向かって進んでいる。その轟音が聞こえてくるような錯覚を感じた。

あれから何年になるだろう。昭和初めに読んだことのある第一次世界大戦に関するレマルクの「西部戦線異状なし」で、フランスの首都パリが陥落したときもこのような状況だったのだろうか。そう考えると二十年もたたない時間の経過の中で、自分も家族も含めて今正に首都新京陥落の場に遭遇しようとしている運命の不思議を思い、無量の感慨を禁ずることが出来なかった。又何としても家族を迫りくる危急から脱出させねばとそればかりを考え頭のなかは一杯であった。車はしばらくして我家の裏口の木柵のところに到着した。はっと我に帰り車を降りる。

鈴木君はまだこれから社に戻り車庫入りをすませてから自宅に帰らねばならない。まだ一時間近くかかるだろう。よくその労を犒って鈴木君の去るのをちっと

見送ってから、急ぎ勝手口から「帰ったぞ」と大きく声をかけ乍ら靴の紐を解くのももどかしく廊下を急ぎ台所の四畳半の間に入る。三人の子供たちもみな起きていた。部屋には大きな革製トランクや大小ルックサックが用意され正子を中心にして避難準備が略々完了していた。夕刻の電話連絡を受けたあと、正子はすぐ畑へ出てよく熟した玉蜀黍を幾つも採り、廸子らに手伝わせてその皮をむき、適当に焼き一本づつ紙に包んだり、白米を焼いて焼米を作って袋に入れたり、握り飯を作るなど大わらわになって携帯用食料の用意をする傍ら、それぞれの夏冬用の衣料を出しトランクに入れたり大小のルックサックに分けて詰め込んだり、有り金全部を身につける準備などが略完了したところであった。その説明を聞き、それ以上の準備の仕様が今はないことを悟っていた。限られた状況、不十分な時間の中で精一杯の用意がかうしてなされたのである。この条件の中でこれ以上の準備のしようのある筈がない。よくやってくれたと正子の心配ばりを喜ぶと同時に、この乏しい準備で知らぬ異境に旅立たせることに限りない不安と心許なさを感じざるを得なかった。殊に咄嗟のこととお金も先月分給与を渡した分の残りだけしかない。子供たちはそれぞれが小さいルックサックを背負うべく用意されているが、何ほどのものが入っているのだろうか心許ない限りである。若いといっても正子は女である。自分ひとりだけなら

どんな危急の場合も何とか処置のしようもあろう。しかし子供が三人、廸子は三年生だといっても女の子である。万一のときどうなるだろうか。武彦玲子は幼いので正子の負担が大き過ぎる。今夜一夜が家族と共に生きる残された僅かの時間である。明日避難列車で送り出してしまったら再会出来る可能性があるのかどうかは、唯神のみぞ知る。これが今生の見おさめになるのでなかろうか。鎮南浦という北朝鮮の土地は全然未知のところで知人もいない。たとえ知人が居たとしても、この状況下でどれほどの頼りになるものでもない。あれこれ考えると唯々胸迫まるのみで言葉にならない。漸く不安の心を紛らわすように言葉が口を突いて出た。

「どんな形で三人の子を連れてゆくのか、一応その形をして見せて欲しい」と。その問いに答えて正子は廸子、武彦にリュックサックを背負はせた上、自分でも大きなのを一ツ背負った上、満三才になったばかりの玲子を背負袋で逆に胸にくくりつけ右手に長さ二尺の茶色牛革のトランクを持ち、左手で武彦の手を引いて行くのだとその形を示した。それは正に悲愴であり悲壮であった。今夜を最後にこの次どこでどんな姿で再会出来るだろうか。見ず知らずの土地、鎮南浦までは行けるとして、それから後はどうなるのだろうか。若い社員が何名か同行してくれると云っても、大勢の老人婦女子の家族達の全員の面倒は到底見切れるとは考えられず、まして鎮南浦は北朝鮮の地、どん

な運命が待っているだろうか、その先は誰にも解らない。不安が拵がってくるばかり。

ふと故郷の両親たちの顔が目浮现ぶ。又広島の大乗村へ疎開した岳父母の顔が見える。満洲の地へ連れてきたことのわが罪を詫びたい。新京駅で正子たちを送り出したあと私自身にどんな運命が待っているのか。それさえも皆目見当がつかない。只管神仏の加護を祈るのみしかない。

北川君、瀬戸口君の家族達も今や準備に大童になっていることだろう。正子が私からの電話連絡をうけて北川瀬戸口の家族に通報に行ったとき、それを知った材木商の高木さんと沢田さんの家族も同行させてほしいと必死の依頼があり、両家でも同様の準備が進んでいる筈という。この危急の際無下に断わることもならず、黙認することに腹をきめた。そうこうしている内時は刻々に過ぎ十二時も近い。一刻でも早く寝み身体を休めねばと子供達を寝かせ、ようやく最後の夜を眠ることにした。

十三日、朝、しばしまどろんだ夜も早や暁近く、曇天の空が白くにぶい光をひろげていた。新京最後の日である。何としても時間前に新京駅へ送りこまねばならない。北川君の家族も奥さんはモンペ姿で行動し易い服装をしている。同行を懇願された高木さん沢田さんの家族も婦人と子供だけである。高木さんの主人は奥地へ商用で行って連絡のとれないまま

である。このとき何故か瀬戸口技師及家族は同行せず、独自の行動をとるということだった。私は家族を駅で見送れば、その後は撫松路へ帰っても無駄なことなので会社の構内へ泊り込むこととし自身必要な品々は持ち出していた。裏口や玄関の鍵をかけて出たが、鶏にはこれから先の日々餌を与えられない。閉ち込めておいてはかわいそうなので水と餌を補給した上、小屋の入口は開けはなしておいた。これで自由に外で草を啄ばむことのできるだろうと。それから玄関を離れ柵外へ出る。恐らくは始発であろう電車にみな一緒乗り込んだと思う。と云うのも沢山の荷を持って新京駅まで歩いた記憶がない上、まだ市電も通常通り運行されていたし、まだ敗戦前なので市中は騒然となり乍らも電気水道ガスの供給にも変化はなかったので、今までにない異様な旅立ち姿の人たちで満たされた電車が撫松路の終点を離れてしづかに新京駅に向い出した。朝早いせいもあるが、朝もやに曇っていたというより今にも降り出しそうな空模様だった。ずっといいお天気が続いていたのにこれはどうしたことなんでしょう。大連でもそうであったように、新京でも雨は滅多に降らず、たとえ降っても永続きせず、精々一時間も降ればあと嘘であったかのようにカラッと晴れるのが通り相場だった。従って誰も洋傘一本の用意もないのが当たり前だった。正子たちが新京の撫松路の社宅に移り住むようになって丁度丸一年、こんなにも早

くこのような事態になろうとは夢想だにしていなかった。食糧に乏しい大連から新京へ来て豊富な食べ物が店々に並んでいるのを見て安心もし喜んだのも昨日のこのようだ。それが今こんな姿で新京を離れることになろうとは誰が予想しただろう。そしてあと少しの時間の後、新京駅頭で家族達の乗り込んだ列車を見送らねばならぬことになるとはと余りにも酷い運命ではなかろうか。今は唯家族たちの、子供達の無事を祈るより外に道はない。それとなく皆の顔々を眺めている内に電車は新京駅前の終点についた。心配していた雨が降り出した。皆急いで電車を離れ駅前広場を横切り駅構内に入る。新京駅は待合室もプラットホームも避難支度をした人々でごった返しの混雑である。指名された青年社員が社旗を高く掲げて社員家族らがその許に集まるよう声を囁らして叫んでいる。待合室に集った人々やプラットホームへ出ることを許された日本人たちは何れもがルックサックを背負いつつ手には銘々可能な限りの荷物を持ち、新京駅へ辿りつけた安心感と何時列車に乗り込むことができるかと期待と焦燥感に満ちた心持で次の行動に移る時を待っていた。外では折悪しく雨が激しく降り出していた。今迄ずっと好天気がつづいたのに、今日に限ってこの雨はどうしたことか。その降りしきる雨について続々と人達が駅に詰めかけて来る。プラットには列車が停車しているが、一向に動き出す気配がない。時刻はもうと

つくに予定の七時をだいぶ過ぎて了っている。待合室では片隅に荷物を積んで腰かける人、冷たい床に横に寝そべっている人、壁に寄り懸っている老人婦人はいくつもの塊まりとなって不安げに話し合っている。騒然としている駅舎待合室の床の隅っこには糞が盛り上っている。しかし今はそれさえ苦にならないし、又気にしている暇はない。唯只管乗車指令の出るのを待つのみである。時は刻々と過ぎて行き雨足も益々激しくなって、唯不安が募るばかりである。全満が騒然となりつつあるとき列車のみが時刻通り運転されると思うことが無理である。部署々々に人たちが夫々最善を尽そうとしているけれども、それが仲々予定通り運ばないのだろう、只待つしかないのだ。

早朝に起き出し咄嗟の準備を整えて急いで駅にやって来た家族たちの中には緊張が過ぎ去り、糸が切れたように疲労の色が現れ出した。気疲れが嵩じたのちの待つことの心の緩みと身体の疲れが交叉して焦りと困惑の色が濃くなり始めた。時間は午前十時をとくに過ぎている。それなのにまだ指令は来ない。先刻プラットにあった列車は出て行つたが、まだ次の列車が着く気配もない。連絡にいていた筈の樋口君は現われたが何時になるとも返事がない。このままでは家族達の疲労が嵩じるばかりなので一応家族を本社まで戻らせて、そこで休憩させ待機させることに相談一決、駅には数名の若い社員を連絡員として残し、家族全員を

本社へ誘導することになった。幸いに先ほど激しかった雨も小止みとなり、曇天ながら移動にはさしたる問題はなかった。距離は歩いて十分足らず、乗車指令が出されてから出発しても充分間に合う。昼食にはとりあえず応急の握り飯が配られたので空き腹を満たすことは出来たし、家族銘々が椅子に掛けるやら床に新聞を敷いて腰を下ろすやらで、不運の中にも稍気分を和らげることが出来たようであった。雨は又降り出していたが前ほどは激しく降らない。又移動するときまでに止んでほしいと祈るばかりであった。駅は前にも増して混雑が激しいようだが、まだ乗車の指令がないと時々連絡が入る。早く雨が止んでほしいと祈る。この雨についてソ連の戦車隊はとくに白城子を過ぎてこちらへ向っている筈である。気が気でない。心のあせりを感じるばかり。それにしても満州ではこんなに雨の降りつづくことは曾つてなかった。どうして今この危急のとき、こんなに降りつづいて皆を悩ますのだろう。戦争で火砲の攻防が激しいときは天候にも異変があると聞いたことがある。けれど、そんなに激しい砲撃の応酬があったとも考えられないのに、今になってこの雨はどうしたことだろう。本当に非情の長雨というより他はなく天がうらめしい。罪のない大勢の家族達が今必死の思いで避難しようとしているのに、余りにも非道ではないか。而も防寒の用意は多少あるとしても雨に対する防具は皆無の人達ばかりではない

か。而も防寒の用意は多少あるとしても雨に対する防具は皆無の人達ばかりではないか。そして満州では殆んど長雨は今までに経験したことがないというのに、これはなんということか。正に異常というより他に云いようがない。

軍からも他の方面からも何の報道もない。せめて停戦の発表でもあれば又考えようもあり、対策の立てようも換えようもあろうというのに。今は国そのもののが的(アテ)にならない存在になりつつある。否もう崩壊して了っているのではないか。軍も行政も全くその機能を喪失して了っている。こんな状況になっては夫々が自分自身の判断で行動するしか道がないのだ。そして迫りくる危険は自ら防ぐ術を考えるより他に方法がないところまで来てしまったのだ。本社内で多数の家族が皆不安の面持ちで語り合い、お互いの顔を見合っている。その中に正子は廸子ら三人の子供を傍にして撫松路の人達と一緒に時の来るのを待っている。私は駅との連絡や社長、部課長との話合いで家族を構っている暇がない。こうする内にも時は刻々と過ぎて三時となり、四時が五時が過ぎてゆく。雨は時に激しく又小降りになり変化するが一向晴れる気配がない。最初の予定時間、午前七時からやがて半日近くも遅れて了っているのにまだ連絡がない。満鉄社員達も必死になって活動してくれている筈だ、その混乱振りは已むを得ないとしても余りにも遅い。待つ家族達の中からも失望の声、不満の

叫びが出始めていた。それを気にしつつ対応に苦慮していた六時前、駅の連絡員が「乗車指令」が出たとの知らせが飛び込んで来た。それを家族全員に伝える。幸いこの時、雨は小止みになっていたのので家族の人々も比較的行動し易くなっていた。皆夫々に多くの荷物を担ぎ手に持ち、子供らの手を引いて駅に向う。既に列車は正面のプラットホームに皆が乗り込むのを待っていた。我が社への割当ては先頭から五輦を指定されたが、なんと車輪は全部無蓋車である。普通客車を予想していたが期待は完全にはづれて了った。この混乱のときだ、贅沢は云っておれない、とに角危険の迫りつつある新京を脱出出来さえすればよい。乗り物が何であろうと構まうことないじゃないか。老人を先に子供婦人と次ぎ次ぎで足場のない無蓋車によじ登り押し上げられて乗込んでゆく。正子廸子武彦玲子も同じようにして三輦目に乗り込んだ。これでやっとソ連軍の脅威から脱出させることが出来ると安心すると同時これから先どうしてゆくのやら、どんな運命が待っているのか判らない。今はこれしか選択の道はないのだ、あとは運を天に委せるより他はない。子供らの顔を見ながら、どうか無事に安全なところへ避難できますよう、いつどこで再会出来るようになるのか皆目判らないが、どうかみな生きてほしい。又再び無事な顔が見られますようにと心に祈りつつ全員の状況を見て廻る。駅の待合室にはまだ列車待ちの大

勢の日本人がつめかけて来ている。プラットは人、々、々で大混雑である。あちこちから人を呼ぶ声叫ぶ声が飛び交っている、喧騒そのものだ。社員家族ら全員がどうやら無事乗り込むことが出来たが発車の合図はまだない。まだいつ発車するか判らない。若い添乗員も十名程乗り込んだ。麻袋入りの白米も二十俵積み込み完了。乏しい調味料など共同炊出し用具を既に準備がすんだ。あとは発車を待つばかりとなった。社長も樋口君も北川君ら皆見送りつつも心配をかくさず、真剣な顔付きであった。高田社長は元チチハル鉄道局長だった。当然新京駅長とも顔なじみの筈である。社長は駅長と話しているのか今列車の傍にいなかった。発車時刻の打合せというか、その情報を取りに行ったのかも知れない。雨はまた降り出し無蓋車の家族達の上に無情に降りそそいでいる。何とも痛ましい光景である。プラットにいる私たち見送る者は濡れないが、次第に濡れていく家族達の身を思い気が気でない。車上ではどこにあったのかテント用のシートを引っ張り合っている者もいるが、全部には行き渡らず、ない人々は防寒ずきを頭に被るより外方法はない。

こんな状況を見廻っていたとき突然樋口君から社長の指令が伝えられた。発車まではまだ時間がかかる。「今この危急のとき招集されていない男子が新京に残っても万一戦争に巻き込まれるような状況になった場合、満州瓦斯の本社機構が潰

れて了う結果になる虞れがある。依って社長以下男子社員は全員家族と共に一時避難することに決定した。見送り社員初め全員避難の準備を整え列車に乗込むように」と。これを聞いて見送りに来ていた男子社員全員は、それとばかりに会社へ或いは社宅へと散って行った。降りしきる雨も苦にならない様子でみな必死に急いでいた。私は会社へ泊り込む用意をしていたので、その荷物と人事関係の重要書類、社規、極秘書類持ち出しの為、羽衣町の人事課へ引返し手落ちのないよう必要必須物件を風呂敷に包み、これによしと自分に言い聞かせて新京駅にとって返した。

列車はまだ動く気配がない。遠い社宅の社員達はどうしたのか。一人一人確めている暇はなかったが、次第に社員たちは夫々自分の荷物を持って引き返し集まってきた。各車輦には夫々社宅の者同志が一塊まりになっている。正子は子供らと撫松路の人達と一緒に乗込んでいた。高木さんと沢田さんの家族もいる。時間は大分経過した。各車輦の社宅群の社員家族に異常がないか様子を見て廻ると同時に、荷物を取りに帰って行った社員が駅に帰着したかどうか調べるため各地区の社員に尋ねて廻ることも必要だった。

そして十三日の夕刻雨がまだ降りしきる中、あたりがうす暗くなりかける頃、漸く発車する気配が感じられ出した。もうあれから二時間を経過している。社員

は全部到着していることを確認したころ、高田社長もその家族の無蓋車に乗込んだ。それと同時にプラットにいた社員全部が車によじ昇り、いつ発車してもよい準備が完了した。私達が乗り終ってもプラットも待合室も次から次から詰めかける人達で満ち満ちていた。その混雑ぶりはまさに日本の敗戦を象徴するかのようであった。

私が無蓋車によじ登って驚いたことが幾つかあった。それは無蓋車に乗ったのが初めてであったこととも関係あるが、無蓋車というから勿論のこと乍ら天井のないことは承知の上であったが、周囲の高さが臍の高さ位しかない為、風がまともに吹きつけること、殊にそれらが石炭輸送用車として使われていたので、内部には石炭が少し残っている上、車内は真っ黒に汚れていること、その上用便をもよおしても内では到底用を足せないこと等であった。こんなことを考えているとき、突然列車が動き出し南に向って動き出した。列車が動く。これでやっとソ連の脅威から家族達を守ってやることが出来ると安堵すると同時に、之が新京の最後かと感慨も亦無量であった。一年前家族を迎えに行ったときは、特急アジア二等車の客として赴任して新京駅に降り立ち、翌年同じく八月今度はこうして家族共々石炭用無蓋車に乗せられて新京を去ることになろうとは。それは実に惨めな流転の姿であった。折しも亦雨は強く降り出していた。

同じ無蓋車に乗った者同志みなが期せずして各自のルックサックを車の真中に積み上げていた。誰が用意したのか TENT 用らしいシートがあり、みなでそれを引張り合い乍ら雨除けとしたが勿論充分でない為、私も正子らも頭から雨に濡れだしていた。真中に積まれたルックサックの山も車の中に雨水が溜まるにつけ、それが黒い水となって下の方からルックを染め出していたし、上からは強くなった雨が何の容赦もなく降り注ぎ、ルックサックの袋そのものは勿論その内容物まで次第に濡れてゆくことが心配されだしていた。

時間はもう午後八時を過ぎ次第遠ざかっていく新京の街の姿も夕闇の中に消えて、あとは唯強い雨足のみが視界を遮って了っていた。この雨の中の夜おそく正子が用意の焼きもろこしを濡れたルックサックから取り出して子供たちに食べさせた。廸子はそれを記憶して、そのときの焼きもろこしのおいしかった味が今だに忘れられないという。子供や婦人、老人たちは無蓋車の中で次第に溜まる雨水が真っ黒に水嵩を増すほどに腰を下ろすこともならず無言のまましゃがみ込んでいる。無事新京を脱出できた喜びを感じながらも、これから先はどうなるのか不安のまま身じろぎもしない。少い人はシートに雨をよけているものの強風に吹きなぐられて雨は遠慮なくこれらの人々をも次第に濡らしてゆく。男達は何れも老人婦女子を庇いつつこの人達を囲むよう

にして外側に立ち車の壁に寄り乍ら立ちつくしている。次第に濃くなる暗闇の中を列車は雨の中を音を立て乍ら南へ奉天めざして進んでいた。

安東へ

出発してからどれ位時間が経ったのだろう。どちらを見廻しても光はどこにも目に入らない真の闇の中、唯耳に入るのは列車の車輪が軌道をかむ音ばかり。数輦前にある機関車が一路奉天をさして列車を引っ張ってしてくれる音が頼もしく響いている。その健気な満鉄の機関車員たちの活躍に期待と感謝の気持で胸がつかまる。雨は矢張り続いているが、もうこれだけ濡れて了えば更に苦になることもない。男たちが身につけている協和帽も協和服もずぶ濡れで、それは下着類は勿論靴下から靴にまで達している。今はなるがままに任せるほか途はない。幸いなことに真夏なので、全身ずぶ濡れになってもさして苦にならない。避難に必死な為なのか、若さの故なのか、それにして今どの辺りを走っているのだろう。唯広原をひた走るだけで視界に入るもの何もないので、さっぱり見当がつかない。時間が知り度くても時計もどこかへ忘れて来たので判らない。四平街はもう通過したのだろうか。うづくまるように塊っている家族達も疲れのため眠っているのか、ひそとして声を出す者もなく静まり返っている。そして車輛のゆれる度毎に

人々の塊りも右に左に揺れているばかりである。私も側壁にもたれて立ったり蹲ったりしながら、ずっと目覚めていたが、知らず知らずに眠っていたこともあったのかも知れない。人間が限界の状況にあると、身体のはたは心の苦痛というものを感ぜないようになるというか、五感の能(ハタ)らきが鈍くなってしまって、唯夢遊病者のような状況になるのかも知れない。こういう状況が長く続くと、必然的に老人の場合は身体全ての機能が之に耐え切れずに体内異変を生じ死に至ることがあるのかも知れない。その点年令の若い者ほどこの悪条件に耐えきれののかも知れない。

列車が新京を離れるころ強かった雨がいつまで続いていたのか、ずっと降りつづいていたような気がするが、時には雨足も弱く小降りになったこともあったのかも知れない。ずっと目覚めていたと思うが、いつ四平街を過ぎたのか全然判っていない。暗かったせいもあるだろうが、更に南の開原や鉄嶺の小さな駅さえ全然気がつかなかった。列車といっても全車輛が無蓋車ばかりで十五輦、それに貨物どころか全部人間が満載されて走っているという異様な光景であった。

十四日の夜明けごろか、気がついたときは空も明るくなり始め、しばし雨も止み雲の切れ目が見えるようになった。ソ連軍の危険から脱出できたことと雨が降り止んだことの喜びで全員がほっとしたのか、あちこちから感激の声がもれ出し

ていた。列車を引っ張ってくれる機関車からはモクモクと黒い煙を吐きながら喘ぐように重い車輪を回転させ軌道に沿って列車を進ませている。満鉄の機関手も我々の為に徹夜の作業でここまで避難させてくれたのだ。列車は静かな音を立てながら南進を続けていた。

ここまで来たらもう大丈夫だと思う気の緩みと疲労から知らぬ間に眠っていたらしい。下着までズブ濡れながらグッスリ眠り込んでいたのがどれ位の時間だったのか、見当がつかないが、周囲の人達のざわめく気配を感じ目をあけると、列車は速度をずっと落として大きな駅のプラットにすべり込むように進んでいるではないか。奉天だとすぐ判った。それはまぎれもなく見覚えのある奉天駅のたたずまいであった。やっと奉天に辿り着くことが出来たのだとの実感が胸をつきあげてくる。よかった、全員濡れ鼠のような姿ながらも無事に奉天まで避難して来られたのだ、喜びがこみ上げてくる。皆ようやくここまで到着出来たことの喜びを全身で示しながら、笑顔で語り合っていた。列車は奉天駅のプラットホームをずっと過ぎた地点まで来てやっと静かに停車した。それは丁度列車の延長だけプラットをはずれたところでの停車らしい。

列車が停ると同時に若い男子社員達が車から飛び降り近くの黒い柵に近づいて用便をし出した。それと知るや各車輛からは我も我もと人々が降り出し、老人や婦女子もみな降りたものに手助けを受け

ながら降りる。婦人たちは機関車の停車位置からずっと前方の遠くの叢まで行って用を足している。私も正子や子供らに手を貸して降りさせた。後方には奉天駅の開札口が見え、何人かの人影が何事が起ったのかと不思議そうな顔をしてこの光景を眺めていた。

奉天は五年前勤務したことがあり、なつかしい駅前の状況が見える。駅前の人々の様子も落ち着いていて普段と少しも変わらないらしい。まだ危険が迫っていない関係からのんびりしている様子に写る。ここは奉天支店の所在地である。それにしても時間は何時頃だったろうか。午前十時頃だったか、もっと遅くお昼近くだったのかも知れない。高田社長の姿は見かけなかったが、奉天駅長室へ行っているのかも知れない。この列車は特別列車なので、停車時間はかなり長いものと、みながそのように決めてかかって行動しているらしかった。

少し時間が経ってから若い社員が奉天支店へ連絡のため走った。全員ずぶ濡れの惨状を伝え、焚出し応援を依頼するためだった。駅から支店の所在地平安広場までは通常歩いて十分もかからないところなので、情報はすぐ支店へ伝えられる筈である。時の奉天支社長は大坪清人、次長は大町正武さんで、大町さんは大連での人事課長として私の上司であった人なので、誰よりもなつかしく又お世話にもなった人である。明朗で穏健篤実な文化人でピアノをよくする早大政経学部出

身。明治時代の文豪、大町桂月の孫に当る高知県出身の人だが、勿論東京生れの東京育ち、大学時代あの東海林太郎さんと音楽の縁で親友だったという話を直接聞いていた。恐らく突然の新京本社関係社員及びその家族の全員が一時避難のため北鮮、鎮南浦に向け南下の途中、奉天駅に停車中との連絡を受け、さぞかし驚かれることだろうと突然の意外な報にその驚愕ぶりが想像される。その上焚出し要請を受け、恐らく即時全社員動員して握り飯作りに懸命の努力を尽くして下さる模様が目に浮んでくる。

平安広場の支店の一階は、その約半分位の面積を食堂経営者に賃貸ししていたが、この頃もまだ同じ事情にあったかも知れない。しかし大町さんの事だからその食堂経営者にも全力応援を要請して下さるものと考えられる。連絡が届いてから約一時間位経過したころ、四斗樽がいくつも奉天支店の社員の活躍で車輛の横に運び込まれて来た。それには心尽しの白米の握り飯がいっぱいだった。又茶を入れたやかんやバケツも用意されてあった。大町次長は高田社長初め全員を夫々見舞を述べられ、その暖かい心尽しにみな涙を流さんばかりだった。昨夕出発以来、全員が殆んど何も口にできず腹ペコの状態だった。食物を入れたであろうルックサックも車輛の中央に堆積されたまま空からの雨で濡れるままとなり、又下からは石炭滓で黒い墨水のような水が次第に浸透して汚染し、それが順次上の方

までに及んでしまう状態だったので、手をつける暇もない有様。そこへこの焚出し応援には全員本当に救われる思いに声も出ない。これが本当に「地獄で仏」と感激に咽ぶばかりであった。私も大町次長に感謝の言葉を述べると共に、新京の状況と避難の事情を伝え、互いの無事を語り合ったのだった。

列車はいつ発車するか判らなかった。この時曇ってはいたが、雨は止み一時小康状態だった。予定は以後、安奉線で一路鎮南浦を目指していた。私にも恐らく殆んどの者にも未知の土地へ向う不安はかくしようもなかった。この奉天での温かい慰労と激励がどれほど全員の精気を回復してくれたかは図り知れないものがあつた。あれからどれほど時間が経っただろうか。どうやら列車が発出しそうな様子を察知してか、全車輛に人々が再びよじ上り始めた。後部車輛の人達はどんな関係の人々か全然知る由もない。そして列車は暫くして再び動き始めた。我々は大町次長初め社員が手を振って見送る中を出発して奉天から遠ざかって行った。

列車は機関車の煙突から真黒い煙りを間断なく吐きつづけ、車輪はゴトンゴトンと音を立てながら線路をかんで進むばかり。しばらく見えていた奉天の街の姿も遂に視界から消え去り、左右何れも高粱の畑ばかりであった。山あり谷ありと外景の変化があればそれなりに心が多少なりとも慰められるのに両側は高く伸び

た高粱の緑ばかり。車輛の中には3cmばかり雨水が溜まり、それが真黒になってルックサックの山を染めているのが見える。子供達は立ったりかがんだりして正子に寄り添っている。また雨が降り出して来た。やっとのことで体熱で乾いていた衣類を再び濡らし始めた。せめてものに雨が無ければと天を怨んでみても仕方がない。唯無言で耐えるばかりである。どれほど進んだか、この方面の地理には全然無知だったので、どこを走っているのか判らない。そしてやがて又日が沈み、雨の中であたりは真暗になった。そして列車はこの暗闇の中を喘ぐような音を立てながら同じような速度で東へ東へと進んでゆく。車の上ではもう声を出す者もない。自分たちにどんな運命が待っているのか知る由もなく、唯無言で耐え忍んでいる。行先は鎮南浦、全く知らない北鮮である。朝鮮には住んだこともないし又通ったこともない。日韓併合以来日本の統治下にあるとは云え、日本本土ではない。人情も違うだろうが、どんな見当がつかない。

神戸時代に習った琴古流尺八の師匠で名手の内田秀童師がどんな事情があったのか、朝鮮へ移住されたことを思い出していた。が又関東大震災の時デマを信じた罹災者が多くの無辜の朝鮮の人々を虐殺したという話を中学生時代聞いたことを思い出し、言い知れぬ不安が心をよぎった。雨は時にはひとしきり強くなったり、又そぼ降る雨と変化していた。人々

は無言でこの雨をちっと耐えるしかなかった。私も揺れる車壁に倚りかかり乍ら立ち尽くしている内に眠っていた。人はこういう極限状態に落ち入ると通常考えられない状況にも耐えられるものらしい。時には目醒め次の瞬間又何も判らない状況に落ち入り乍ら列車は音を立てて車を引っ張って走ってくれていることに言い知れぬ安らぎを覚えつつ身を任せていた。

列車は同じように黒い煙を吐きながら東進を続けていた。私は前方に向って車輛の左側壁に倚りかかって、これから先どうなるのか見当がつかないまま、何とか家族達が無事に故国に帰れる術がないものかを考えていた。それにしても日本はどうなるのかさっぱり見当がつかない。とんでもないことになって了った。唯子供達の、正子の無事を祈りたい。そんなことを考えながら後ろへ飛ぶように去ってゆく高粱の林立を眺めていた。その時雨は小休みのようだった。ふと気がつくと前方高粱の畑の中に一人の子孩が立っているのが目についた。列車の速度はそんなに早くはなかった。その子孩の前を過ぎ去るとき、その手に提げている小さい縦長の袋、25cm×15cm位のものが見えた。その袋には白い紙が貼ってあり、二十円と書いてあった。それは明らかに日本軍隊の兵士用の乾パンの袋であった。それと判った瞬間に車はとうにその前を遠ざかっていた。ああ、あれだけの乾パンがあつたら三人の子供をしばらく楽しませてやれるのにナと、なんともやり切

れ切ない思いが心をよぎった。七月の給与を正子に渡してから二十日近くも経ち、手持ちの現金が少ないまま突然の避難行、多少の株券や貯金はあるものの、突嗟のことで間に合わず、正子の財布には数十円しか入っていない。これでどうなるのか心細い限りである。それにしても安奉線の途中の高梁畑に立つ子孩の手に、どうして兵士用の乾パンがあるのだろうか、それが不思議であった。又二十円という金額が、はるかに手の届かない高額であることが何とも情けなかった。それが十四日の夕方のことであったのか、十五日の朝のことだったか、今はもう茫として判らない。

雨は時には強く時には小雨となり降ったり止んだりしていた。ただ記憶には降られっぱなしであったことが恨しいものとして残っている。誰もが洋傘なんて用意する必要のないこの満州で、この時に限ってこんなに集中的に降ったことが、異常なものとししか考えられないから尚更である。

どれ位時間が経ったのか、列車の走る音と車の揺れる単調さに慣らされ、何ごとも考える力を失って了っていた。ふと我に帰ったとき見上げた東の空に灰色の雲が切れて久し振りに少し青空が現れはじめ、太陽の光が輝くのが目に飛び込んで来た。それは目に痛いようなまぶしさで、雲間から真直ぐに四方を照し始めていた。お天気になった！雨が熄んだ！前の車輛からも後の車の人達もみな一様に

喜びの声が上った。傍らの婦女子も皆立ち上って、輝く空を見上げて喜びを満面に浮べている。みな生氣を取り戻し、その嬉しさをかくそうとしない。暫く進んだとき列車の速度が急に落ち始め、前方に建物が見え街に近づいたのかと思う間もなく、機関車は大きな音を立てて停車した。何本かの軌道が並んでいるのが見え駅らしいと頭をめぐらしたとき反対側に小さい駅舎が目に入った。それが安東駅だった。安奉線の終着であった。

雨に降られどおしでやっと安東まで辿り着いたのだ。そして雨は止み青空がのぞき、皆が蘇生の思いをかみしめていた。けれどもこれから先、鴨緑江の鉄橋を過ぎれば、そこは朝鮮である。言い知れぬ緊張が、今このほっとした喜びの中にも漲っていた。時間は午前九時ころだったか或いはもう少しあとだったか。このときは時間を気にするよりも食べもののことが頭に浮び、どうしたものかと思索し始めていた。

高田社長と樋口君が降りて安東駅へ向って行った。或いは、機関手と打ち合わせに行ったのかも知れぬ。停車して暫くして樋口君がこのままでは無理だから社員と家族ら全部安東で下車しようという。私もまだ知らぬ安東の地ながら、ここは支店の所在地、濡れ鼠のような全員がこのまま越境するのは無理と判断。安東支店へ行けば何とかなると応諾。北川君他の責任者も誰も異議を唱えるものなく、相談一決すると同時に前部一輛目から五

輜目までの社員及家族が続々と降り出した。石炭汁で真黒に染まったルックサックも皆手伝って車から降ろし了った。それから後は先頭の者からお互いに助け合い乍らルックを背負い列になって小さい安東駅の改札口を出てから先頭の人達は街の少し広い通りを西へ動き出していた。

我々が下車し出したのを見て、後続の車輛の人達、それは我々の社員及家族数よりもずっと多い、恐らく倍以上の数の人たちも当然下車の指令が出たものと受取ってか、続々下車し出し列車乗員全部が降りるのを目撃していた。同じように皆濡れ鼠だった。私は社員家族特に老人や子供連れの人達の荷物を運ぶのを手伝いながら列について支店へ向っていた。

安東支店へ先頭が辿り着いたときの様子はどんなだったか私は知らなかった。余りにも突然で、而も多数の新京本社全員の社員家族の闖入に、支店の社員は勿論山崎正在支店長も度肝を抜かれたようにびっくりしたであろうことは想像に難くない。山崎支店長は当時五十才前後だった。直接確かめてはいないが、或いは奉天の大町次長からの電話通報があったかも知れないが、我々の予定は鎮南浦だった上、列車はノンストップでも不定期運転なのでいつ安東駅に到着するか、恐らく掴めていなかったと思う上、まさか予定はづれの安東での強行下車して大勢がやって来ようとは、夢にも考えなかっただろう。我々が安東駅の開札口から駅前広場へ出る前、そしてまだ後続車の人

々も降り始めた頃、高田社長は駅長室へ行き、予定外下車の理由につき諒解を求めたのかも知れぬ。安東支店長等と共に社長からそのときの交渉の様子の説明があった。駅長は兎も角として安東駐在の軍の鉄道司令部将校から「折角避難列車を仕立ててやったのに、何故無断で勝手な行動をとり安東で下車したのか、怪しからん」ときつい剣幕で難詰されたという。高田社長は新京発以来の降りつづいた雨で全員づぶ濡れの上、食料を取ること出来ない、このまま鎮南浦行を強行すれば、病人続出するかも知れずここ安東には幸い支店があるので、その所属社員宅へ分宿させることも可能なので、窮状を理解しての許可方を懇願の結果、ようやく事情已むを得ないとのことでやっと下車が認められたのだという。

唯、問題は我々が下車したのを見て後部車輛全部が降りて了い、その多数の人々を何れに収容するかで司令部関係将校も困ったらしい。この話を聞いたとき、その人達が興農合作社の人々等であることを知ったが、その人らが何処へ収容されたかは知る由もない。私は一度支店へ着いてからも、まだ残る人々らを助力応援のため駅に向い共に支店へと誘導しつつ、ある時誰からともなく日本無条件降伏の天皇陛下の録音放送があったらしいと聞かされた。遂にやっぱり敗戦降伏かとがっかりすると同時に、これでよかった、戦争が中止になってもう逃げなくても好いと、肩の荷をおろした気持ちになる

と同時に、半面これからどうすればよいのかと判断に困り、ともかく社長らと協議せねばと支店へ急いだ。

支店の中庭には大きな釜が用意され、厚生課長向畦地俊雄君の指揮で焚出しの準備が進んでいる傍ら、多数の人達は濡れた衣服の乾燥や洗濯しながら宿舎の割当てを待っていた。みなもう日本降伏の事を知っていた。殆んどが伝聞で、直接ラヂオ放送を聞いた人はいなかった。やがて若い社員や婦人たちの手で沢山の握り飯と沢庵が配給され、殆んど一日ぶりに口にすることができた食事だ。みな笑顔が浮び蘇生の喜びを語り合っていた。正子や子供たちも夫々二つ宛のお握りでお腹もいっぱいになって堅かった表情にも和やかさが返っていた。

宿舎割当は山崎支店長らの尽力で、社員社宅へ分宿するものが夫々荷物を持って散って行った。高田社長家族はどこへ行かれたか、支店長宅へでも行かれたのか知らないまま樋口、北川君らと私は支店周辺の民家へ分宿が決められた。私たち家族は支店所在地の横の道路を挟んだ真近の岡田さんというお屋敷の一間に入れて頂くことになった。同家は羅紗を商う旧家だったようで附近の家に比べ立派なお宅だった。難民同様の我々をよく受け容れて下さったと恐縮しながら入居させて頂き、玄関の間を廊下で隔てた左側の八畳一間を使うように指示されました。私達は子供らと共に五名が持参した大きなトランク一個及大小五つの汚れたルッ

クを部屋へ持ち込んでから同家の御家族の部屋の前で廊下に坐って直接御挨拶をしましたが、突然の招かれざる客のこととて、快く御歓迎下さるものでないことは、御返事下さった口調からもそれは感じられました。無理ありません。見ず知らず難民同様の親子を五人それも子供三人も連れての不時の闖入者なのですから。それにしても社宅収容からはみ出した我々の数家族の者の受入れが、たとえ日本降伏のラヂオ放送があったからと云って、その直後に安東の山崎支店長の尽力だけでは容易に諒解が得られるとは考えられず、矢張り一列車全員千人以上もの人数を民家に収容されたのには、軍から安東市長への指示があったのではないかと考えざるを得ません。

私たちは立派な岡田家の一部屋を与えて頂き、何とも感謝の申し上げようもない次第でした。それにしても岡田家の御主人には遂にお目にかかることがありませんでした。私自身は数日後に家族を安東に残したまま新京へ帰ることになりましたが、その後三ヶ月程正子と子供三人が不安と不自由の中にも無事に過せましたのは岡田さん方の皆様の御好意の御蔭であると感謝しております。毎日だったかは覚えませんが、夕方遅く入浴させて頂きました。勿論岡田さんの皆さんが済まされた後、私は武彦、正子は廸子と玲子連れ入浴出来たのです。正子は汚れた衣類の洗濯したあとお風呂を掃除しお湯を全部流してから部屋へ帰るのが常と

なりました。部屋では貸して頂いたロープを張り洗濯ものを乾した。真夏だったので乾くのも早く、お蔭で身綺麗に過させて頂くことが出来ました。眠るときは持参の冬物を布団の代りに子供らに掛けて私ら二人はごろ寝の毎日だった。それでもいつソ連兵が来るかも知れないという不安におびえる気持が抜けなかったので、部屋の真中においた大トランクの下げ手を腰ひもを繋いで入口のドアのノブと連結し、私がトランクを枕に寝るという毎日でした。それは全くのお笑い草で、廊下側からノブを引張れば大した抵抗にもならず、全くの気休めに過ぎなかったけれども、そうしないと気持が安まらなかった。食事は午前と午後の二回支店の中庭に集まり焚出し給食の握り飯を二個宛頂いて帰るといふことの繰返しだった。翌八月十六日は何かの用件で安東駅まで行き駅舎を出たところ、駅構内の黒い枕木で作られる長い柵に沿った道路を一人の若い日本兵が西方へ歩いているのが目にとまった。そのとき遙か彼方から三人の屈強な男が旗のようなのを二つ手に振りつつ、その日本兵に駆けよるなり、その冠っていた戦闘帽をひきちぎり地面にたたきつけたあと胸を強く押したり背中を叩きつけたりの暴行を始めた。若いその兵は何も言わず直立不動の姿勢で何の抵抗も示さず倒れかかっては又直立する無言の状態でした。暴行は暫く続いたが散々殴ってやっと気がすんだかのように三人の男は向こうの方へ立ち去って行っ

た。五十米ほど離れた所での出来事で、これを見ながら何も出来ない自分が情けなくなり、敗戦の惨めさをつくづく味わされた。そのときの見慣れない旗が新しい韓国旗だった。十五日のラジオ放送の翌日のことです。日本の敗れるのを見越して早くから独立旗が用意されていたのかと準備のよさに驚くやら、朝鮮とは直接戦争をしていないのに何故日本の若い兵が痛めつけられるのかとの疑問が残りました。

この日、安東神社が焼討ちされたということも後に知りました。これから何が起こるか判らないと不安を感じたが、その後は何事もなく街は平静だった。それはこれからの変化をずっと見つめているようだった。十七日、支店屋内にいますとき、社員が一人の男を案内して来たので、私が応待することになり用件を聞いた。その男は私に向って自分は朝鮮人だが随分日本人の世話になって今日を迎えました。今敗戦で日本人が困っておられるのを知り恩返しをしようと思ってやって来た。実は米を少々持っているのでこの際安くしておきますから買ってくださいませんかという。随分奇特定の人も居るものだと些か心を動かされ値段によっては経理の北川君に取次ごうと考え値段を聞くと、特別安くして一升当たり十円だと云う。それを聞いて全く呆れてしばらくその男の顔をしばらく見つめていた。当時の相場は一升当たり一円前後だと漠然な数字が頭にあった。親切ごかしに日本人の弱み

につけ込み、よくも途方もない笥棒な値段を吹っつけたものだと思ひを感じたのが率直な心の内だった。勿論すぐ丁重に断り話を打ち切りにした。新京から列車に積み込んだ二千■は若い人達で支店へ運び入れている筈だが、いずれは焚出しも難しくなるので、安ければと思ったのだがとんでもない幕切れとなり、ますます日本人の立場が弱くなることを覚悟せざるを得なかった。

この日の午後のこと、仕事がないので支店の構内を廻り廊下つづきの部屋を北側の方へ歩を進めたとき支店の若い社員が喧嘩をしていた。異常な事態なのでイライラしているのだと思い、すぐ停めに入ろうとするより早く一人が相手に殴りかかった。相手は素早く身をかかわしたのでガラス障子に右手をたたきつける結果となり、右腕を大きく深く切って了った。私はすぐ血どめをしながら喧嘩の相手にすぐ外科医のところへ伴うように命じ二人が出て行くのを見送ったが、その結果は遂に判らないままになって了った。意外な出来事が起こるものである。

翌八月十八日ソ連極東軍司令官の命令として新京の電気ガス水道等の関係者は公共事業としての本来の使命に鑑み、すぐ仕事に復帰操業するようにとのラヂオ放送があったらしい。高田社長がどこからか之を聞き、ソ連の命に従い即刻帰京の段取りを整えることになった。第一陣として社長と樋口文書課長、北川経理課長及経理課社員二人の数名が早速新京目

ざして安東を出発した。私は社員家族の面倒を見るべく残留することになった。私はこのころ今後はソ連が満州を占領、日露戦争以前の状況に逆戻りしソ連の指揮の下で中国人が動き、日本人は最下位の存在として生きてゆくことになるのかと百八十度思考の逆転を迫られるのかも知れない。それも敗戦の結果として日本人が受容せねばならない運命になって了ったと考えるに至った。

こうして安東での希望のない避難民としての日がつづいていたが、突然私に大きな変化がおとづれてきた。それは八月十九日だったか、その翌日の八月二十日かははっきりしない。社長らが安東を発ち順調に行けば十九日には新京到着も無理でないが、正確なことは今は確かめようがない。北川君は町田市に健在だが、恐らく日付までは記憶していないかも知れない。何れにしても社長らが新京本社へ無事到着してから間もなく長距離電話が安東支店へかかって来た。そのとき私は偶然近くにいたので電話にかかると

「ソ連の命令通りに社業を復活するためには技術者が必要であるから私が三名の技術者を伴い即刻帰京せよ」との連絡であった。それを聞き私は考えた。兎に角ソ連の命令に従い仕事を続ければ、案ずるより産むが安しの言葉通り、全てがうまく運べることになるかも知れないと。それで新京から電話の趣旨を山崎支店長や向畦地俊雄君（厚生課長）に伝え、安東での避難生活中の社員及家族らのこと

を依頼した上、技術関係社員中から年配者の鶴木栄、渡辺誠之助、大平敏雄君の三名を名指して、即日新京へ出発同行することを求めたあとすぐ岡田方へ戻り、正子に私と社員三名が新京へ復帰するよう要請を受けたことを伝え準備に取り掛かった。私は妻子四人を全く知人のない安東に残しておくことは不安だった。特に正子が持っている現金が少ない上、幼い子等三人を托して私だけが去ることに多分のためらいがあった。しかし社命である以上、已むを得ない。大勢の新京組家族がいることだし、厚生課長ら責任者も残ることから困った場合は相談するように伝え、又案外事態は好転するかもしれない、何時再会出来るか全然予測出来ないが、どうか子供達のためにも頑張ってくれと正子に頼み、正子も状況をよく理解してくれた。こうして不安を残し乍ら身支度を整えた。身支度と云っても自分のシャツなど着替えを何点かルックにつめるだけだ。途中何が起るか判らないので人事関係の重要書類は人事課員に托したように思う。

当時は全満が混乱の中にあっただので列車に乗るのにも全然料金は必要としなかった。尚、安奉線で取りあえず奉天まで行き、大町支店長から情報を得たのち新京へ出発する予定だったので、お金は出来るだけ正子に残し、私の財布に極めて少額しか持たず荷物はルックサック一つだけで安東を出発した。同行は前述の三人の社員だった。

十五日以後は皮肉にも快晴つづきで、而も真夏のこととて若さの故も手強い身軽に行動出来る自信もあった。一行は先行き少し希望らしいものを持ちながら列車に乗り奉天を目指した。当時は、安東は以前のように平静だった。唯、八月十七日か十八日か、私が岡田邸の部屋に帰っていたとき突然背の高いソ連将校が同家にやって来た。胸に沢山の略章をつけているので有力な将校であると判った。岡田家の人が応待していたが、何事が暫く話があったのち何事もなく去って行った。勿論通訳が同行していた。訪問の内容は知らないし又岡田さんに尋ねもしないままに過ぎた。私は満州進駐ソ連軍の少数の先遣部隊将校が何らかの調査のための訪問だなと直感していた。

その事より次の日、私が安東支店から午後帰宅したところ、正子が先刻大変なことがあったと不安げに云い、何がおこるか知れない不吉の予感におびえている。と云うのは、私が帰る前に岡田邸の裏の家―それは私たちの部屋から塀越しに見える―へソ連兵が来て同家の二才の幼い男の子を抱き可愛いとピストルであやしている内に暴発して、その子を頭部貫通で死に至らしめる事件が生じた。そのソ連兵は自らもびっくり仰天して咄嗟に逃げて了った。同家では余りに突然の出来事なので、家族はおろおろするばかりで何とも云いようのない悲惨事が突然起つて了った。之を伝え聞いた近所の人々も

敗戦の苦汁がどんなものかを感じ始めていた。

列車不通

八月十九日、私は正子と子供三人を安東に残したまま技術社員三名と共に安東駅から奉天行に乗車した。列車は恰も平時の如く朝鮮京城を発して鴨緑江鉄橋を通過してやって来た。平時とちがうのは無賃無切符で乗車出来たことであった。車内は戦争終結の影響があつてか比較的閑散として乗客は殆んどなく、機関車石炭車のあと一、二輛しか連絡されていなかった。この日も快晴だった。列車が安東駅を出たのは正午前だった。数日前この線を走って安東へ来たときは雨に降ればなしで、而も無蓋車だったこと、曾つては石炭をバラ積していた車輛だったので、降る雨に祟られて次第に石炭汁で持ち物が黒染めになったことなどを思出しながら、皆お互いに残して来た家族の無事と再会を祈りつつの旅出となった。再会がいつ可能かは誰も予測出来ない。それははかない願望に過ぎなかった。けれど何か知らず前途に微かな光が見える様な展開となりつつあることを感じて、心細いけれど何か自信が出たようで、車中ではみな明るい顔をしていた。

数少ない乗客の中に一人の若い日本兵がいた。それは兵長だった。丁度私達の席の反対側に一人で没念と座っていた。既に無条件降伏後のこと、私は安東駅頭

での出来事を目撃したことなどあったので、稍不安と不審にかられて、その兵に言葉をかけないでは居られなくなった。それで何故この列車に乗っているのかを尋ねた。その兵長は第一装の汚れない美しい軍服軍靴を着けキチンとゲートルを巻いていた。その若い兵は私の問いかけに答えて次のように語り出した。その兵は北支天津駐留の日本の部隊所属で隊長の命により八月十日前後に天津を出発して朝鮮京城（ソウル）の原隊へ連絡のために使し、今は再び折返し天津へ復帰する途中だとのこと。勿論京城にいる間に日本降伏を知らされたが、天津の所属部隊へ帰ることを決意し列車に乗った。ところが列車が朝鮮内を通過中、軍人に対する民衆の不信と反感の眼差に異様なものが生じているのを感じ、随分心中苦悩と矛盾を覚えつつも遂に鴨緑江の鉄橋通過時に意を決して銃と帯剣を車窓から放棄してきたところだという。その所持していた筈の三八銃には菊の御紋章が打ち込められてあり、上官からは天皇陛下よりお預かりした銃を汚してはならぬと厳しく戒められたはずである。私が第一師団で教育兵として招集中も僅かな銃の汚れさえ咎められ毎晩数名が捧げ銃の姿勢で廊下に立たされたこと等を想起し、その若い兵長の苦悩ぶりが察せられた。けれど敗戦の放送を境として過去の軍務に関する全ての意識を捨て去り一個人人間として生き残る道を模索せざるを得な

い時が来たと語るその兵長の選択を正しなかったものと慰めたのだった。

窓外には同じように高粱の畑が続いていた以外は、今は記憶に残るものは何もない。何時間か随分長い間列車は同じような速度で走りつづけていた。そのノンストップの筈の列車が突然停車するらしいのに疑問を覚えながら窓外に目を移した。目にとび込んできたのは見慣れた日本風の田舎の駅であった。その駅名表示板には本溪湖と書いてあった。そこは無煙炭の産地で有名な所であった。小学校時代から貴重な石炭の産地、而も日本には生産のない無煙炭の産地として「本溪湖」の名は脳裡に刻みつけられていた。ここが「本溪湖」かと、懐かしいものに出会ったように感じたことは事実だが、同時にノンストップ奉天行の列車が何故ここに停車したのかと些か不満の混じる疑問を持って何かあつてのことかと窓外に首を出し答を見つけようとした。駅は無人のように見えた。その時機関手が降りて来て「今日はここ停まりだ。これから先は危険で行けない」という。何ということか、そんなことがあつていいのかと思ったが列車が動かねば何とも仕様がなない。私たち四人と兵長とは一緒に下車して駅前広場へ出た。その他に乗客がいたか覚えてない。振り返ると通告通り列車は後進してもうその影がなかった。知らぬ所で突然降ろされて困った。低い山間の小さな街らしく民家は山裾に張りつくように並んでいて、駅から山迄の距

離はないので、殆んど一本筋の道路が駅前広場が尽きた十字路を右の方向へ鉄路に併行するように伸びているだけ。とんでもない破目に陥入ったものと悔やんでもどうしようもない。午後六時は過ぎていたが、夏の日は永くいつまでも明るかったのが何よりだった。とにかく食物と宿をさがさねばと兵長を加えて五人が一本路をブラブラ歩きで様子をさぐりながら進んでいったが街にも家にも人影がない。どうしたんだろう、これだけの家があるのに殆んど人の姿が見えない。逃げて了ったのかも知れないが、その時はまだそこまで深刻に考えていなかった。丁度一本路の真中あたりに店屋らしい一軒が見えたので、内に入り声をかけたが奥からは何の返事もなくひっそりしている。全くのゴーストタウンのようで、當(アテ)がはづれたのと食物が求められそうになることにがっかりして、元来た道を引返して来た。再び駅前広場へ戻りどうすればよいか考えながら、ふと見ると駅から真向いに二階建の木造建の一戸があり、それはどこかの事務所らしかった。

ガラス戸の入口には満州杭木株式会社の古い社名看板が掛けてあり、一階には二、三のニス塗りの木製机が並べられている。皆と相談の上ここを宿と決め、一階の土間にござ寝でもよいから泊めて貰うべくガラス戸を開け声をかけたが、同じように誰も出て来ない。妙なことがあるものと更に大きな声で案内を乞うと奥から返事の声が返ってきた。一同ホッと

して待つ間程なく年配のやせた一人の満人が現れた。満語のうまい鶴木社員が尋ねると日本人はもう居ない、満人は留守番だという。今夜泊めてほしい旨を伝えると二階へ昇れと承諾してくれた。ヤレヤレやっと宿が見附かったと満足して脱いだ靴を持って二階へ昇ると、そこは広い畳敷きの一間であった。畳は黄色く変色してガランとしていたが、表の窓硝子越しに駅がよく見える最適の場所であった。夜具とて一枚もないが、臥することさえ出来ればよかったので、みな安堵して車座になって今後のことなど話合っているとき、鶴木君が満人に食べるものはない、何でもよいからほしい、お金は払う旨伝えると饅頭を作って持って来れた。それは五人の腹を満たすには充分の量ではなかったが、兎に角食にありつくことが出来ただけでも幸いであった。お湯をお茶代りとして腹にいれたあとは満人に朝食の分も予約で頼みこの日は安眠出来ることを喜んだ。

食後色々ソ連軍のことや日本人の運命、先行きのことなど話している内に兵長がいつの間にか姿を消していた。下の便所へでも行ったのだろうと疑う者もなくしばしの時間が経過して行った。私たち四人は別にそれを気にしていなかった。夕闇が部屋を暗くし始めたころ階段の軌む音に振り返ると満帽満服の男が昇って来た。ふり返り見るとそれは若い兵長ではないか。余りの変り果てた見すばらしい姿に驚く私らにその兵長は語った。これ

から先、奉天を経て天津へ行くのに第一装の軍服ではどうも不安でならなかった。ので戦闘帽、軍服上下、ゲートル及軍靴を全部満人に渡し、その代りに満人から古い満服と綿の靴まで手に入れ、すっかり兵隊とは判らないように変装することに成功し、これでやっと気分が落ち着いて来たという。兵隊用の下着も全部取替えて貰いこれで安心して眠ることが出来ますと満足げだった。余りの見事な変貌に驚いたが、その方が危険がないと察し、仲々の名案だと笑いながらも変身の美事に安心もし、一同ごろ寝ながらも明日を夢見て臥すことにした。疲れていたのか、ぐっすり寝込み目覚めたときはもうすっかり明るい日差しが輝いていた。留守番の満人から又饅頭を貰い、いくらかの代金を渡して今日は奉天へ行くことが可能だろうし、この場所なら駅へ列車が到着すればよく見えるので安心とばかり暫時雑談の花を咲かせていた。

やがて外の空気が恋しくなり、身支度を整えて駅周辺の様子を観察することになり、靴をはいて戸外へ出たときはもう朝九時ごろだった。ところが出て見て吃驚り仰天、なんと駅前広場から昨日歩いた町の一本道も全部が沢山の黒い服をまとった中国苦力の人、々、々で身動きもままならぬ有様。これはどうしたことかと訳が判らぬまま広場の人混みに加って列車を待ち乍ら考えていた。日本人の姿のない町から一変して波の押しよせる如き中国人苦力の数を見ている内に、それは

本溪湖炭鉱から開放され中国本土へ向う為、列車を待っているのだと判断した。彼らも自由の身になって、祖国に待つ肉親のところへ帰りたいのだと判ると共感を覚えるものがあつた。けれど我々協和服姿が日本人だと判り、群のどこかで点火されると群集心理でやっつけろと襲われかねないとの懸念が生まれたので、人混みから脱出することに決め、駅のすぐ前の小さい道路を数軒の鉄道員宿舎らしいのに沿って東へ辿り、道の尽きたところから小さい山となり坂道を登って、眼下に鉄道のトンネルを見ながら進んで行くと炭鉱関係かと見られる事務所らしい建物が先一〇〇米位のところに見えてきた。そこまで離れて了えば安心と更に歩を進めかけたが、別の一つの懸念が我々の行動を停止させた。余り駅から遠ざかると、列車が来ても気がつかず奉天行が果たされない虞があるじゃないかと。結局再びとって返し、駅近くまで来て駅のすぐ隣の鉄道員宿舎に頼み込みそこで待機することと決し、五人がその玄関前に立ち入口の戸を開け声をかけた。けれどこの家も無人だった。ここの主人は満鉄社員なので、何れの駅かの勤務に従事しているのかも知れないと想像できたが、家族はもうここを去って日本へ向って行ったのかも知れぬ。無断で上り込むのは一寸気が引けたが、外は依然として無数の中国人が列車待ちしているので、迂闊にその群れに加わることの危険を感じ、この留守宅で列車待ちをさせて頂くこと

とした。玄関の間は二畳位、その奥に床の間付きの六畳で家の真中には黒い鉄板で覆った直径 1m 位のオンドルが冬の暖房用に設置されていた。

こうして暫しの憩いの場を得て安心した五人は又車座になって雑談する心の余裕さえ感じ得るようになっていた。外からは内容は判らぬままの苦力たちの声が聞えていた。私達と同様に列車を待っているらしく広場を去る気配はない。もう昼頃なのに食べるものは何もない。若さだけが空腹を満してくれた。雑談中、鵜木榮君が自分のルックサックから小さな黒い漆塗りの小箱を取り出し我々の前においた。それは金鵒勲章だった。金鵒勲章は日本兵でも抜群の武功がなければ下賜されないもののだとは子供の頃から聞き知っていたが目にするのはこの時が初めてだった。鵜木君は少し年長で元海軍兵であった。階級は聞き忘れたが、どこかの戦場で大きな手柄があつたのだろう。その功により頂いたこの勲章を避難するときも又こうして新京目指して帰ろうとするときも肌身離さず持って来たい。それを取り出して云う。今にも奉天行の列車が駅に着いたら大勢の中国人苦力たちと一緒に乗込むことになる。偶然同行することになった兵長は軍服など全部を満人と交換して満人同様の姿になり安心だが、自分が列車中で苦力に取り囲まれて萬一この勲章を見付かったときどんな目に合うか判らないのでここで処分しようと思うがどうかと聞く。その処置を尋

ねられても誰一人として名案が浮ぶわけがない。隠し持っていたても彼等に持ち物まで点検される破目になることは絶対にないとは誰も保証出来ない。皆が答えに窮していたとき同君は意を決して、この家へ置いておくことにすると宣言して立ち上った。どうするのか見守る中で同君はオンドルの焚口の扉を開き黒く輝くその小箱を焚口の奥深くに差し入れて扉を閉じた。誰もが同君の心の内を思い悲愴を感じて何も言わず黙ったままだった。同君はその処置が済むと、これでよしとばかり比較的さっぱりした顔に戻っていた。それを見る一同は「敗戦」がもたらす変化を嘔みしめつつ、今後に対処する心構えを一層新たにしたことだった。

午後列車は突然やって来た。そして本溪湖の駅へ止まった。この機を逃しては大変と飛び出して駅へ走った。大勢の中国人苦力たちも勿論全部が乗込んだ。機関手に尋ねると確かに奉天へ行く列車だという。前日、私達奉天行が途中下車せざるを得なかったので今日本溪湖駅で停車してくれたのか、或いは大勢の苦力が開放され中国へ帰るべく待機しているとの情報が満鉄にもたらされたものかは判らない。今は多勢の苦力達と同乗することを問題にしている暇はない。この列車を逸して奉天に辿りつけないのだと割切っていた。鵜木君が勲章のことに心中未練を残しているかどうかはもう考える余地は全くななくなっていた。四人が向い合って坐り、兵長の満服姿は反対側の近い

席に苦力らと一緒に腰を下ろしていた。列車は間もなく発車、すぐトンネルに入ったがそれを過ぎると車輪の軋む音を立てながら順調に進んでいた。ヤレヤレこれで奉天へ行けると安心し車内を見渡す心の余裕が生じていた。車内は苦力たちで一杯だったが、解放感に満足してか、みな明るい表情で私達に注がれる眼差しも穏やかなものだったので、朝からのすべてが考え過ぎの杞憂だったと判り彼等に対して申訳ない誤解をしてしまったと後悔していた。機関手の話で前日奉天行きを中止したのは、奉天市中が不穏な状況にあったことや無条件降伏の放送後周辺にいた部隊で解散を命ぜられた日本兵が三、三、五、五、奉天を目指して行く農道で農民に襲われ身ぐるみ剥れた上殺されてあちこちに死体が転がっているという危険な情報があったからだという。今日は市中が元の平穏に戻ったので運転することにしたとのこと、随分物騒な話で一寸心配だったが、民間人にまで危険が及ぶとは考えられず、平安広場の支店へさえ辿り着けば先は何とかなると高を括っていた。

学生時代何度か無銭旅行を経験し窮すれば通ずとの言葉通り、世の中全ては何とかなるものだと思案外のんきなところがあつたことも否めなかった。

それにしても、安東へ避難する途中、本溪湖辺りからかなりの時間は鉄道沿線の両側が山に囲まれた地形であつたことなど全然知らなかったことに驚いていた。

雨中の避難で周囲の地形などを考える余裕などなかったのか、心労で頭が茫としていたのか今度同じ線路を逆戻りして気がつき我ながら人間の記憶の不確かさをあきれていた。本溪湖のトンネルを過ぎてからは奉天迄は遥かに視野の広がる満州の広野であった。奉天駅で支店からの焚出の握り飯で蘇生の思いをしたことなど回顧しつつ、大町支社次長に再会出来ることを楽しみに一刻も早く奉天へ到着することを願いつつ車窓の移り変りを見つめていた。

奉天の変貌

夕方それは暮れなずむころやっと奉天の駅に着いた。降りたのは私たち四人だけだった。どのプラットホームで列車から降りたのか漠然として記憶の彼方にある。唯奉天の開札出口に近いブリッジの階段を南を向いて降りつつあったのを思い出す。大勢いた中国人苦力たちは下車しなかったし、安東から同行していたあの満服姿の兵長の姿もなかった。列車は彼等を乗せたまま錦州方面へ行く予定だったかも知れない。とすると、やはり奉天駅が一番ホームでなく、他のホームに着いたのかも知れないと推測している。奉天駅に幅広いブリッジがあったかどうか正確なことは判らないが、兎に角ブリッジの階段を降りていた記憶が残っている。そのブリッジの中段まで降りたとき、広い奉天駅の待合にもホームにも全く人

影がなく、気味悪い薄闇があたりを支配してあった。突然眼に飛び込んで来たのは大きな図体のソ連警備兵の姿であった。近くに一人はるかかなたに一人、短いチェコ銃を持って辺りを払うが如く、威圧するかのように静かにこちらを向いて進んでくる。私は大きなショックを受け、背筋が凍る思いがした。彼等は薄闇の中あたりを睥睨して堂々と闊歩していた。直かにソ連兵を見たのは之が最初だった。その瞬間、私の脳裡から旅順の戦跡、爾靈山も奉天大会戦も一挙に消しとんでしまった。こんな気味悪い駅から一刻も早く逃げだしたくてブリッジを降るとすぐ無人の開札を抜けて出た。出口の駅の広場にも全く人の姿がない。前方には僅か数台の洋車が揖棒を下ろしたまま並んでいたが、満人の姿は見えぬ森閑として異様な雰囲気が漂っていた。

前日奉天で大きな混乱があったという機関手の声が思い出された。奉天支店のある平安広場までは歩いて五分の距離だが一寸待て、混乱の後だとするとこの薄暮では気味が悪い。支社へは明日行くことにして今夜は大町支社次長宅に泊めて頂こうと同行の三人にこの旨を伝え、駅前から真直ぐに千代田通りの左側歩道を歩き出した。次長宅は千代田公園手前の道を左へ折れ二筋目浅間町の角から数軒目だった。人っ子一人の姿も見えない大通りを過ぎやっとなりつきホッとして煉瓦塀の内を見ると、全く灯りがついていない。若しかしての懸念が頭を横切った。

表の扉を強く叩き、大きな声で何度呼んでも内はひっそりとして反応がない。次長方も家族ともども何処かへ避難してあったかも知れない。当にして来た一夜の宿もないとなると全く困って了った。支社迄は約十分の距離だが、一人も通らない薄闇を歩くのは危険である。こうなれば未知の人の家へ頼んで泊めて頂くより外に途はない。そう話して露路を角まで戻り、富士町を北の方へ當もなく歩く。三人とも不安げに私について来る。夕闇は次第に濃くなりどこかに宿を求めねば、どんなことになるかと心配が胸に迫ってくる。全く當もなく歩き始めたとき、角から三軒目左側の小さな家にぼんやりと一つの灯がついているのが目に入った。途端、私はすがりつくようにその家の扉を叩いていた。内から人の気配がした。助かったと思った瞬間、その家の主人は内から扉を開いて何の用かと問う。私は手短に「ガス会社社員であるが、次長宅を頼りにして来たところ居ないので困っている。それで一夜の」と云いかけると「それなら御免」とばかり内からドアを閉めて了った。ここへ泊めて頂かねば他に頼むところはない。意を決して必死に声をかけ乍ら扉を叩いていた。暫くして迷惑なと云わんばかりに再び主人は扉を半分開いてくれた。私は「決して怪しい者ではありません。何もいりません。只一晚だけ泊めて頂きたいのです」と辞を低くして頼んだところ願いが通じたのか、それじゃ入りなさいと扉から手を放して

私たち四人を迎い入れてくれた。小さい昇り框に靴を脱ぎ玄関の間から座敷へ招じ入れられた。正直なところこの時ほど「地獄に仏」とばかりこの家の主人に仏を観じたことはなかった。外はもうとつぷりと暗くなっていた。

その主人は六十才近い日本人であった。此の家は狭い玄関の間の他は、六畳位の部屋一つ、その奥に一間があるだけだった。電灯は点いてない。灯りと見えたのは壁際にしつらえた小さい置床の上の蠟燭立に立てられた十 cm 位のローソク一本の光だった。このローソクの光が私たちを助けてくれたのかと思うと、それは極楽浄土の光のように思えた。

勧められるまま私ら四人は六畳の間で主人の前に車座に坐し、招じ入れて頂いたお礼と奉天支店を経て新京本社へ復帰の途にあること、明朝出立して支社へ向う旨を述べお礼を云ったところ主人は納得がいったのか笑顔が浮んでいた。

その話によるとソ連兵の奉天進入のため近所の人々はみな何処かへ避難して行き、この主人一家もどこかへ逃げていたが、娘さんが亡くなったので茶毘に付し、主人一人だけが遺骨を持って家に帰り、今夜ここでお通夜をしているのだとのこと、見るとローソクの傍に遺骨入れらしい小さい箱が一つおいてあった。訳を聞くと更に不安と鬼気迫る中で通夜のローソク一本が小さな焰を出して燃えていた。次長宅の不在のわけが判ると同時、この老人が通夜のために家に帰ることがなか

ったら、どの家も全部不在でどれだけ歩き廻っても泊めて頂く家なんか一軒もなかった。本当に幸運にもこの御不幸の家に救われた偶然を感謝することしきりだった。

更にその老人の話はつづき前日の混乱につき詳細を知ることが出来た。前日ソ連軍に降伏した日本兵が続々と千代田公園に集結しつつあった。ところがそこへ突然に平安広場の少し南、青葉町の満鉄消費組合へ多数の暴徒が侵入して商品を略奪しはじめた。それを発端に我も我もとばかりに組合へ押入る暴徒で大混乱だとの情報が入った。それを聞いた相当数の日本兵がそれとばかりに銃を手に駆けつけて消費組合の入口を塞ぎ「中にいる日本人は全部外へ出ろ」と大声で怒鳴り、日本人全部を脱出させ、略奪に入った暴徒めがけてあたり構わず銃を発射したので、かなりの死傷者が出たらしい。銃の発射音と人々の阿鼻叫喚の声はすぐ周辺地区に知れ渡った。これを知った市場あたりの満人たちが蜂起し、平安広場を挟んで市街戦が勃発した。日本兵と満人たちの射ちあいはいかなりの時間続き、一時は大変な騒ぎだった。市場の満人たちは何時銃を手に入れていたのか。日本の敗戦を見越して以前から用意していたのか。それともソ連軍から手に入れたかは推測の限りではないものの、一時は市中騒然となり、歩く日本人はいつ屋上から狙撃されるかわからないと戦々恐々の有様だった。尚、北の大広場近くの奉天

神社は敗戦降伏後間もなく襲われて、滅茶苦茶に破壊された。そんな混乱の後なので明朝平安広場へ行くときは余程注意されないと、とんでもない災難にあうかも知れないよとの話だった。この老人の話聞いて「矢張り」と本溪湖で不時停車した理由が納得出来た。それにしても大町さんのことも気がかりなので、明朝は一刻も早く支社へ出向き、その安否を確かめねばと思っていた。

大町さんについては忘れられない話がある。それは私が昭和十六年大連の若葉町社宅アパート三階に住んでいたとき、大町さん方を訪れたことがあった。大連駅前常盤橋の南満州瓦斯本社前の電停から老虎灘（ローコタン）行の電車で中央公園前を過ぎ嶺前屯の手前の桜花台という美しい町名のところに大町人事課長宅があった。大町さんが大町桂月文豪の孫であることは前にも書いたが、ピアノをよくする人で黒光りする大きなピアノが据えられていた。祖父が高知県出身だったが、東京生れの東京育ち、早大政経学部入学後グリークラブに入り、先輩の東海林太郎と懇意になった。東海林太郎さんが卒業し満鉄入社したので、その後交流は断えていた。大町さんが大学卒業後、幹部候補生として現役入営していたところ、当時「赤城の子守唄」という歌謡曲が大流行、部下の兵隊が外出してはその唄を習い覚え、兵士の間でもよく唄われていた。音楽が趣味の大町さんがその唄の歌手名を尋ねたところ、東海林太郎（ト

ウカイリンタロウ) だという。妙なことがあるものと曾ての友のことを思出し、そのレコードを直接聴いたところ、聴き覚えのある声の主は正に友人の東海林(ショージ) 太郎だった。確か満鉄に入っている筈と思っていたところ、東海林太郎は鉄嶺の小さな満鉄図書館館長へと左遷にも等しい転勤の後、退職し歌手に転向し、何曲目かが大ヒットしたと知り、その成功を喜んだと聞いた。大町次長の無事を祈りつつ、こんな思い出が私の脳裡をかすめていた。

色々老人から話を聞いている内にかなりの時間が経過し、二重窓の外はすっかり真闇になっていた。そろそろ寝ようと考えていると、外の露路からコツコツと高い靴音が聞こえて来た。その靴音は明らかにソ連兵のもので、警備のために巡回しているのは確かだった。その音は千代田通から私たちの歩いてきた路、富士町をこちらに近づいてくる。あたりは無人なので真闇である。その中でたとえ蠟燭の灯りでも明かりがついているのは此の家だけである。私たちはその靴音を聞いた途端に、おびえるように声をひそめソ連兵の動きを探りながら、ちっと聞き耳を立てていた。がソ連兵は立停まることなく、同じ歩調の靴音を響かせながらすぐ前を通りそのまま北へ遠ざかり再び帰ってくることはなかった。息をひそめていた私たちは漸く愁眉をひらき、皆が臥す準備に取りかかった。

さて寝るといっても着のみ着のままでごろりと横になるだけで布団も枕も何もない。この家の主人もごろ寝だ。老人の話が夢中に、時には興奮して聞いていたが、この時初めて室一杯に軍隊用毛布、正方形で毛足が長い黄緑色の毛布が隙間なく敷きつめられて畳は全く見えないことに気付いた。どうしてこんなに軍隊用毛布を手に入れることが出来たのかと思ったが、今の私には関係のないことと仰臥して眠ることとした。

蠟燭は新しいのが点じられたらしく、まだ細い光を放っていた。目を閉じて眠ろうとしたが、何だかしら身体がムズムズして眠られない。私だけかと思っていると他の三人とも寝つくことが出来ないらしい。尚暫くの間我慢して眠ろうと努力したもののどうしても辛抱出来ずに起きると三人とも身を起した。誰かがワッ蚤やと叫んだ。見ると私の身边にも何匹もの蚤がうごめいている。眠れないのはそのせいだと判かり、蚤を除り始めた。幸にも軍隊用毛布は毛足が長く、蚤がとびはねようとしても毛足に阻まれてとべないで毛の中でうごめくばかり。私たちは夢中になって蚤をとり始めた。毛布の上をはい廻りながら除りつぶした蚤が三十匹以上、他の三人もみな同じように多くの蚤を征伐し、お互いにその数を競い合ったのち、その数のあまりに多いのにあきれた。何故こんなに多いのかは誰も口にするのを遠慮した。どうやら身の蚤の除去作業が終ってからは安心し

てぐっすり寝入ることが出来た。そのあとは朝まで夢も見ず、夜が明けるのも知らずに熟睡出来た。

外はすっかり明るくなり、ガラス窓からはまぶしいばかりの光がさし込んで狭い室内を照らしていた。目覚めても顔を洗うでもなく、勿論食べるものとて何もない。老人はよく眠れましたかと尋ねてくれる。お蔭で一夜を無事に過ごすことが出来ました、市内の状況もよく判りました、これから支社へ向います、どうぞお身に気をつけて頂きますようにとお礼を述べ、この家での一泊が叶えられなかったら、どうなったかと思うと本当に嬉しく、深く頭を下げてこの家を出た。老人は玄関迄見送ってくれたが、之が最初で最後の出会いで本当の一期一会であった。

日はキラキラと輝やき今日も暑くなりそうだった。私の関心はただ一つ、早く奉天支社へ行き、大町支社次長の安否を確かめることにあった。老人と別れ、富士町を一〇〇mばかり南へ、そして千代田通りへ出た。この大通りを横切り忠霊塔の西側萩町通りにかかる。日本人がうかつに歩いていると屋上から打たれるかも知れないと、昨夜注意されたが市街にはチラホラ人影もあり、それほど陰悪な状況ではないかも知れない。でも注意しながら千代田公園に沿って南下する。萩町の右手に個人病院の看板が目に入った。約五年前奉天支店在勤中、まだかなり寒い日の夜突然廬子がお腹が痛いと言い出

したことがあった。大和区朝日街一段九十三号という渾河（コンガ）に近い借上げ社宅のあたりには全く医者がない。真夜中のこととて困ったが、腹痛となれば放っておけない。満三才の廬子を抱き四戸建てアパートの二階から外階段を降り、遙かに右手に奉天第一大隊の兵営を見ながら、千代田公園の東側大通りの康往会館の角まで来たとき幸運にも一台の洋車（ヤンチョ）が通りかかった。すぐ声をかけてどこでもいい医者へ急ぐように頼んで来たのがこの病院だった。洋車に待機してくれるよう頼み、病院の扉を叩き白衣をひっかけ乍ら出て来た先生に病室へ案内され廬子を診察台に載せて診察をお願いした。ところがあれだけお腹が痛いと言っていた廬子が診察台にのせられた途端案外けろりとしているのが親の目にもはっきり判った。先生に申しけないと何とも云いようのない気持ちになったとき、先生はニコニコして時々こんなことはありますと云い乍ら簡単に診察して、異状ありませんから御安心なさいと逆に慰められ、再び待たせておいた洋車で帰ったことを思い出していた。

同行の三人は奉天の地理が判らないので無言で私についてくる。食事は昨日朝本溪湖の杭木会社で饅頭を食べただけで丸一日何も腹に入っていない。けれども心の緊張と若さのせいか空腹を感じることもなく歩いていた。千代田公園の入口の広場を右へ曲がると平安広場は近い。逸る心を抑え支社の前に着いて驚いた。

入口は窓を全部板を張りつけて這入れないようにしてある。一寸とまどったが、そこは勝手知った支社のこと、左手青葉町側へ廻る。成る程昨日この広場を挟んで日満間にかなりの射撃戦が展開されたらしいと驚いた。それにしても市街で被害の跡も見当たらず、たたずまいは昔との変化がない。唯支店の窓はみな板で封鎖されているのが異様だった。チラホラ人影もあるし、恐れていた程険悪な状況でもないらしかった。話に聞いた千代田公園の降伏した日本兵たちはどこへ連れて行かれたのか、それらしい姿は全然なく、ソ連兵を見かけることもなかった。青葉町側の食堂のドアは閉まっていたが、押すとすぐ開き中に入ることができた。階下の食堂施設は他の経営者に賃貸してあったが、今はガランとして人気がない。勿論お客とてある筈がない。二階に昇ると支社長室に大町さんはいた。突然のことで驚かれたが、安東より新京へ復帰の途中だと説明すると納得された。我々が安奉線で避難の際、駅での焚出し救援の礼を述べる。列車が安東方面へ去ってから、奉天でも迫り来るソ連軍から家族を守るべく、北朝鮮の天津へ避難させたとの話だった。そんなことは知らずに大町宅に泊れず、昨夜危機一髪で危ないところを老人に一夜の宿を許されて助かった次第を告げる。大町さんからは一昨日の平安広場を挟んでの銃撃戦の様相を知らされた。家族社員を避難させてからは支社幹部他一部社員はずっと社内に泊り込

みだったという。我々が昨朝以来絶食状態と知り、早速社員に食事の準備を命ぜられた。非常時なので極めて簡素ながら食事を供されて腹一杯となり四人はやつと蘇生の思いをした。他の三人は三階の社員寮に昇って行った。多分奉天の社員と交々体験を語り合っているらしかった。私も大町さんも、この閉塞状態の中で今回の敗戦前後の新京及び安東での状況や高田社長らが新京へ復帰したこと、我々も一晩支社に泊ったあと明朝新京に向け出発したい旨を告げた。このとき外は特に目を引くものは何もなく静かであった。私たち二人はここ一週間の余りにも大きな変化と現実の危機に直面して、どう対処すべきかお互いに判断しかねていた。

高田社長らはソ連軍が奉天入りするのと丁度すれ違うように、新京へ到達することが出来たのかも知れない。ソ連軍は戦車隊を先頭に八月十八日ころ、ここまで進入してきたものらしい。大町さんとの話は尽きることがなかった。奉天では、日本の敗戦と同時に市内のあちこちの会社で満人達の不満が吹き出し、退職金を出せと強硬に迫るようになった。これに対して日本人経営者の困惑ぶりが目に見えるようだった。結局何れの会社も大体月収の二か月分を退職金として支払うことで事態を収拾し得た模様だと知ることが出来た。この事実を耳にしたことが新京本社へ到着後、同様の事態が勃発した際落着いて対処することができた一因ともなった。

大町支社次長の話はまだ続いた。ソ連軍侵入してから市内の様相は一変、日本兵の降伏や武器の押収、日満人間の市街戦の他に、一層悲惨な事件が市中至るところで発生したとのこと。それはソ連兵による女狩りだった。夕刻近くになるとあちらこちらで日本人の婦女の強奪が始まった。それは老若の如何を問はず、女であれば無理やり車に乗せて何れかに連れて行くという乱暴が開始され、或る会社の女子寮などでは、女子全員をトラックに積み込み一晩明けると再びトラックで元へ送り返したという。このような暴虐が毎晩続きだしたので、日本人女性はみな頭を坊主刈りし男装して難をさけようと苦心している。戦いに敗れた国の国民、特に女性こそ全くの犠牲者で、飢えた野獣のような奴等の手にかかり、尊い命を落したり、あたら一生の運命を無残に狂わされるとはと、正に地団駄踏む思いだった。

交々話し合っている内に刻は過ぎ夕刻となる。再び簡素な食事を大町さんや同行の三人と共に頂いたあと明日の予定を立てる。あたりが暗くなる頃三人は再び三階の部屋で寝ると云って出て行った。大町さんは今夜も支社長室のソファで休むというので、私は隣の庶務課の部屋でニス塗りの木製事務机を並べ、着たまの姿でその上でごろ寝で臥すことにした。ソ連軍の戦車隊は恐らく新京から奉天へ、それから更に南下して辺りを征圧しつつ大連に行くのだろうか。安東は支線安奉

線の終点なので、戦略的にさして重要な地ではなかろう。どうかそうあってほしい。ソ連兵が安東に行くとしても、さして大きな部隊を必要としないだろう。大連迄の鉄道幹線を押さえて了えば安東入りは遅くなってもよからうにと独りで推測し、残して来た正子や子供達の身の上に恐ろしいことが起きませぬようにと祈るばかりだった。

案の上あたりが暗くなり始めた頃から市中を駆け巡る車の音が、遠くでまた近くで聞こえ出した。又今夜も市内で所構わずに惨事が起り始めたのかと、車の音が止むとその付近の婦女の悲鳴が聞こえるようでそれが気になり仲々寝つかれない。うとうとする中で鈍いトラックの音が真夜中過ぎまでもつづいていた。頭を上げて見る空は暗かったが、残されたわずかな市街の光を映じて、街の空だけがぼ一つと鉛色に物悲しげであった。悔しさがこみ上げてくる。そして悲しかった。糞ッロスケめがと憤りが胸をしめつける。そうこうしている内に車の音にも慣らされて了ったのか深い眠りに陥っていた。

翌朝は割合早く目覚めた。夢も見ず眠ることが出来たが、一晩中不気味なトラックの音が耳につき放しだったので安眠とは云えなかった。新京の情報はなく、全然見当がつかない。何といっても満州国の首都であり政治の中心なので、国際的にも関心の集まるところ、その中で如何に無暴なソ連の奴輩とは云え、奉天の夜に展開された非情野蛮な行動には多少

ブレーキがかかっているのではなかろうか。それに比し奉天は日本で云えば大阪にも似た経済中心の街、侵入した暴戾のソ連兵は国際的監視の目から解き放されように、したい放題に暴虐を繰り返している背景がこんなところにあるのかも知れない。無力となった日本人、特に女性が血に飢えた狼のような奴らのなすがままに、多くの被害者が出ているのかと思ひ、やりきれなさに頭が痛む。悪夢のような夜が明けたが、それは随分永い時間であったようにも感じられた。

奉天在勤時は、丁度紀元二六〇〇年の祝祭が行われた年で、千代田公園の南の野球場でアメリカのプロ野球の披露があり、その巧技に舌を巻いたが、その僅か一年有余の間にあった色々なことが走馬灯のように思い出された。十五年九月に長男武彦が生れ、母乳が少なく配給の毎日一瓶の牛乳も冬は中味が凍って蓋を突き上げる始末で、又押入れに貯蔵の林檎が全部シャーベットのようになったこと、正子が病気となり、頼んだ藪医者が単なる風邪だと診断したのに治らず、他の医者に診て貰ったら丹毒で手遅れ寸前と判り、あわてて入院させた医大病院の中庭に柳絮（ジョ）が風に吹かれて雪のように吹き溜っていたこと、子供が増え生活もギリギリの中、私が胃病で苦しみ、更に何日か欠勤の已むなきに至り、仕事の責任を悩んでいたことなど。そのとき突然ソ連国境に近い海拉爾（ハイラル）からわざわざ訪ねてくれた叔母の手

助けが嬉しかったことなど思ひの尽きない街であった。私一人残業で十時頃平安広場から歩いて帰るとき、千代田公園の南の一边が余りに長く、いつも歩数を数えながらすき腹かかえて帰宅を急いだことなど、苦しい思い出の方が多かった。そんなことが走馬灯の如く頭の中を駆け巡った。

しかし、その頃は平穏であり、希望に溢れて充実した生活があった。奉天市鉄西地区には内地から有力企業が続々と進出し、競って多額の資本を投下し、広い範囲に巨大建設が進められ、キリンビールなどの進出もあった。それらの完成の暁を見越し、奉天支店でも第二ガス工場を計画、予算六千万円が敗戦時には投下資本八千万円にも達し、概ね完成に近い状況にまで漕ぎつけたが、突然のソ連進入で瞬時にすべてが潰え去って了った。これも苦しい思い出となって残っている。

大町さんも起きた気配に、支社長室に入り朝の挨拶を交わす。お互いに何だか気の重い朝だった。今日一日も無事に済むだろうか。社員や家族らに何事も起らねばよいがとの懸念が頭から去ることがない。三階から技術系社員三人も降りて来て、朝の挨拶を済ますとすぐ又姿を消して了った。支社へ辿りつけた結果、朝夕二食ながら食事に恵まれ活力も回復、一刻も早く新京へ向はねばならぬ。奉天市内の情報も直かに知ることが出来た。朝の食事が済んだあと、三人の同行者に

も出発を伝え、大町さんの見送りを受けて、お互いの無事を祈り乍ら一階食堂の出入口から青葉町を奉天駅に向った。

この日も快晴で、間もなく駅前広場に到着したが、新京行は何時に出るか判らない。待合室には人影はなく、プラットの所々にソ連兵が警備についているだけで、列車は全然見えず待つより他はない。列車を待つ人達は二十人位が横一列並んで、思い思いの格好で荷物を前に腰を下ろしている。私たちも待つしかないとこの人らに交じり前から十列目位右から五、六人目の場所にルックを前に直に腰を下ろした。以前なら正確に時間表通りに上り下りの列車が到着するので、本線は勿論、安奉線の客も亦錦州を目指す人達も切符売り窓口で切符を買う人、見送る人などで待合室は人であふれ、プラットにも多くの客の姿があったのに、今は全くの様変わりである。駅前広場にも我々のように列車待ちをする者以外は、殆んど人影はない。いつ出るか判らぬ列車を辛抱強く待つ内に少しずつ人数が増して、私たちの後ろにはもう七、八列もの人が腰を下ろしている。ここへ腰を下ろしてから大分時間も経つのにまだ列車の出る気配がない。敗戦国民だからソ連兵の指示を待つしかないとあきらめていた。待ちくたびれてぼんやり前方を眺めていたとき、二人のソ連兵が現れて前方の日本人客の列の間に割って入り、荷物を調べ出したのに気付いた。指示された人は逆らうこともなく鞆やルックを開き

内容物を見せている。危険物所持の取締りかなと思ったが、そんなものを所持していないので大丈夫だと落ちついてた。暫くしてソ連兵は居なくなった。が、どうも様子が変わった。間もなく前列からささやくように情報が伝ってきた。ソ連兵の貴重品泥棒だと。それから三十分位後、こんどは別のソ連兵が私たちの列に入ってきた。それ来たとい寸身構えたが、私らは何も持っていないと気軽だった。しかし、奴らは何をするか判らないので、全く不安がなかった訳ではない。ところが、私たちの服装とか持物で見当がつくのか、私らの前を素通りした。よかったと内心ホッとした瞬間、ソ連兵は私の左側二人目の六十才前後の小柄で丸顔白髪まじりの日本女性の前に足を停めた。そしてその女性の持物の小さな鞆を開けと手まねで指示している。何事も起らねばよいがと不安にかられつつ見つめていると、その老女は已むを得ず指示されるままに鞆を開いた。すぐ傍なので一挙手一投足がよく見えていた。その開かれた手提げ鞆の中には婦人用ハンドバックが一つあった。ソ連兵は銃を左肩にかけたままそのハンドバックを開けよと指示している。言葉は通じないがその指示は私にもよく判った。老婆がそれを開けると、その中には婦人用金時計一個と金指輪が二つ他に少し真珠か何か宝石らしいものなどが入っているのが私にも見えた。老婆はこれからどこへ行こうとしているのか、恐らくこれからの避難生活の

資金に充当するために後生大事に持出して来たのだと推測していた。ソ連兵はつと右手を伸ばしてその三つの金製品を取り上げると、自分の右ポケットに入れて了った。老婆は必死になって身を乗り出して返してほしいと行動で示し、挙句には両手を合わせて今にも泣き出さんばかりにソ連兵を拜んでいた。その祈りも空しくソ連兵は表情も堅く立去ろうとした。その時、別のソ連兵が急ぎ足で駆け寄ってきて、腰を下ろしている私のすぐ前に立つや、大きな声を出して先のソ連兵に強い口調で何か話し出した。後から来たソ連兵は腕章やヘルメットが普通の兵と違っていた。私はそれがソ連のゲーペーウで日本の憲兵同様の権限を持つ兵であることをすぐに覚（サト）っていた。そのゲーペーウ兵は先のソ連兵に大声で叫びながら命令した。その命令を受けたソ連兵は、相手のゲーペーウの顔をぐっと睨みつけ、如何にも不服そうに頬を脹らせ黙って立っていた。そのままで何秒間がつづいた。ゲーペーウ兵が重ねて強く叫んだ時、ようやく自分の右ポケットに蔵い込んだ金製品三ヶをくやしそうな顔で老婆に返したが、そのあともう一度、今度は顎をつき出して、ゲーペーウを睨みつけた後、不貞腐れた態度で悪びれた様子も見せずに立ち去って行った。老婆は涙を出し乍ら、ゲーペーウを手を合せて拜んでいた。満面に喜びを浮べてホーッとした満足感と感謝の気持が重なり、危ないところを助けてもらっ

た嬉しさ一杯の姿がそこにあった。これを見ていた私もゲーペーウの活動に感激すると同時にソ連の正体を垣間見た思いで、そこに日本軍とは異質なものを感じていた。これが日本軍の場合、兵隊が憲兵に対してあの様な態度で終始するだろうか。恐らく兵はそれこそ直立不動の姿勢を執ったであろう。あの仏頂面の不貞腐れた態度を執ることは金輪際無かうにと。ソ連は国が大きい上、多民族で兵の数も比較にならない程多いので、軍律が行届かない面が多いのだと独り我点をしていた。その後も相当長い時間同じ姿勢で列車待ちをしていたが、幸いにも其後はソ連兵の略奪はなく老婆もどこへ向うのか知らないが無事だった。日本人の間からはもっと頻繁にゲーペーウが来てくれたら、こんな悲劇は起らないのに、半時間位に一度しか来ないので、其の合間を見ては口助（ロスケ）が襲ってくる、本當に溜ったものでないと悲鳴とも云えるささやきが聞こえていた。

どれほど時間待ちをしたか新京行の列車は突然やって来た。その頃には私たちの背後に多くの列が出来て全部で四、五百人になっていたのではなかろうか。警備のソ連兵の誘導でプラットホームへ出て列車に乗込むことが出来た。今度も無蓋車でなく普通の客車であった。四人は相對した席に坐し、ようやく新京に帰えることが出来ると気がゆるむと同時に疲れが出て、いつの間にか居眠りに陥っていた。

人間の記憶というものは妙なもので、願いが叶い順調に事が運んだときのことは時間の経過と共に殆んど消滅して去るが、異状な経験、肉体的苦痛や苦悩の体験は意外に心の奥深く刻み込まれていて、案外に永い年月忘れ去ることはないものだと思ふ。

奉天の街が次第に遠くなり、大町支社次長の無事を祈りつつ同行の三人と雑談している内にいつしか眠ってしまい、鉄嶺も開原も全く夢のうちに過ぎ、ふと気がつくと列車は四平街の長いプラットホームに着いていた。四平街駅の東側には街の姿は全くなく、ただ広い野の彼方に遥か水平線が伸びていた。短い時間停車したあと、列車は再び動き出し、公主嶺を過ぎて一路北へと走りつづけた。

占領下の首都

夕刻列車は無事に新京駅に到着した。去る十三日薄闇迫る雨の中大混乱の中、家族と共に無蓋車で出発したことが夢のように思い出していた。今の新京駅はひっそりと静かであったが、唯目につくのは人影の少なさと、警備のソ連兵の大柄な図体だった。そのことは日本の敗北と満州国の消滅を象徴していた。然し、奉天駅到着のときの様な強いショックは感じなかった。駅前広場の西側には、北から順に磐城町、露月町、羽衣町とイロハ順の通りがあってここに満鉄住宅が並んでいた。その西の端に満州瓦斯本社の一

区劃があり、その見付には、社長公館と構内社宅が前後に、更なる西側一面が本社と工場敷地となっていた。

歩くこと数分で本社門前に漸く到着した。とうとう帰り着いたと、ホッとしながら本社の構内に入る。ガランとした静寂の漂う構内、そのとき私は感で、社長は社長室にいないと判断、すぐ間を隔てる生垣をくぐりぬけようとした時、若い社員が二、三人居ることに気づき声をかけた。彼等は降伏後、所属部隊の解散ですぐ新京へ帰って来たという。彼等の無事帰還を祝ったあと勝手口から社長公館の扉をあけて入る。

高田社長は樋口、北川両君と共にここに居た。ここが事実上の指揮室であり協議室であった。私たちは復帰の電話を受けてから新京到着までの経過を報告したあと社長からねぎらいの言葉をかけられ、古巣に帰ることが出来たことを実感して喜び合った。私以外の技術系三名はすぐ夫々自分の構内社宅へ帰って行っただが、社宅の遠い私は取り敢えず北川君同様公館の応接間に泊ることになった。電気も水道も以前同様に操業していたので不自由はなかった。あのとき避難しなかった技術課長瀬戸口君や軍隊から帰った社員及び相当数の満人傭員の努力で、瓦斯製造作業は曲りなりにも動いていた。

撫松路組の瀬戸口課長一家が避難しなかったことを確認したのはこの時だった。八月十三日家族らと社宅を後に新京駅へ向うときは、私自身家族の行末を案じる

ことで頭が混乱していたのかも知れないし、降られ放しでの安東着後も異常な経験つづきだったので、そのことはすっかり忘れて了っていた。瀬戸口充輔君が避難しなかったことにつき、私は一つの判断に達していた。同君は大連生れの大連育ちで、而も大連高等工業専門学校卒業で頭脳優秀人柄も良く、社員間でも高い評価を受けていた。言葉の判らない私と違って、彼は満語も達者だし、満人間でも恐らく信頼される資質の持主だったから、大連から新京へ転勤しても日満人間にその人物に関する情報はすぐ社員傭員に達していた筈である。兎に角、満州しか知らない同君は満人らから情報を受けていたかは別として、ソ連軍が侵入して来たとしても、萬一窮したときは満語を駆使することにより、難を避け得るとの自信があったのではなかろうか。又、鎮南浦へ避難后、敗戦により祖国に帰るにしても帰るべき郷里がないということも、或いは独自行動の一つの動機であったかも知れない。

もう一家族避難列車に同乗しなかったのがいた。それは家族ごと歩いて何処かへ避難する當てがあつての行動だったが、敗戦となつたので新京の社宅へ引返して来たという。ソ連兵に対する虞れから、五十年配の奥さんが丸坊主となり男装して構内社宅にいるのに出会い、驚きつとお互いの無事を喜び合った。

社長はじめ安東からの復帰組と部隊解散による帰参者らの内、構内組はこの奥

さんの献身的奉仕で朝夕の食事をとることが出来て、先づは安定し会社作業もどうやら軌道にのせることが出来た。この頃でも瀬戸口君は撫松路から通勤していた。

とや角する内に私は本社の人事課の部屋の様子を見に行つて驚いた。三つあつた書類戸棚や事務社員用の机及椅子が全部無くなつていた。それらの内容物や戸棚の書類は全部その場に乱雑に放り出されてバラバラの状態であつていらつたし、事務机の中味もあたり一面にバラまいた状態で手が付けられない惨状であつた。当初私はソ連兵が何らかの理由で、それらを必要として運び去つたのかと思つたが、いやそうではなく暴徒が持ち出したのかも知れないとも考えた。何れにしても、当時の木製の室内具が全部無くなつていた。その中で何故か私の課長机だけが中味も殆んど手つかずの状態に残されていたことが意外のこととして印象に残っている。が、課長用椅子はやはり無くなつていた。他の文書課、庶務課も同様だつたろうが、私はそこまで確める必要を感じなかつたので、そのまま公館へ戻つた。

会社の構内は男野郎ばかりであつた。その中でただ一人の男装の女性がどこかの社宅にいるという変則的な状況で、先の見通しが無いまま社業が動き出してゐた。工場の煙突からは細々と黒い煙が昇り、ガスホルダーには瓦斯が充満しつゝあつた。

私は安東から持ち帰った僅かな着換しかなかったの、社長の諒解を得て或る日、撫松路の自宅へ当面の必要品を整えるべく徒歩で出発した。お金があまりないので、電車賃も節約したいのと、満語が充分でないため不測の事態を避けたかったからでもあった。二里程の道も苦にならなかった。第一師団兵営跡は、当然ソ連兵が警備していた。今は日本人もチラホラ歩いている中を、興安大路を下り南新京駅前広場を右に見つつ女学校の角を曲がり洪熙街へ、更に右折して真直ぐに南下して日赤病院前から満映前へかかり、春光小学校の校舎を右手にその異状がないのを確かめ乍ら通り過ぎ、ようやく撫松路の自宅へ到着した。

自宅は疎開前と何の変化もないように見えた。南側の玄関前へかかると前方の畑に若い女性が背中をこちらに向けて蹲がんで移植鋤（コテ）で馬鈴薯を掘っているのが見えた。私は服装からすぐに木暮さんと判断していた。彼女も足音に気付いてか振り返り私と判るや悪びれることもなく「頂いてますのよ」との言葉と挨拶された。家族のためにと精を出して作った作物であっても、一旦は放棄して避難した者としては所有権についての異議を唱えようもなく、お互いに敗戦国民だ、お役に立つならばと割り切って「ご遠慮なくどうぞ」と返事しつつ家に入った。暫くぶりの我家だったが何の変化もないように見えた。いつもの団欒の四畳半の間の押入れから下着類など衣料を取

り出しルックに詰める。そのとき自身浅黄色の協和服を着ていたが、押入れにあった筈の背広服上下や中折帽が無くなっているのに気付いた。矢張り各部屋を見廻ると、全部の窓の黒木綿の暗幕や電燈の防室カバーが全部無くなっていた。改めて箆笥の引き出しを検べると、紙などの一番下におき忘れていた金時計一個が盗られずに残っていた。突嗟の避難のときすっかり忘れて了っていたので、実に嬉しかった。すぐルックの底に蔵い込み、更に応接間の書籍やノートなど十冊ばかり詰め込んだ。下の抽出しも念のため調べたが、妻や子供の衣類があるだけで、この時はさして必要を感じなかったもので、そのままにしておいた。一応当分の所要品を持ったので家を出た。このとき畑にはもう木暮さんの姿はなかった。又鶏もどこへ行ったのか小屋の中になかった。その帰路、満映前を通ったが、ここにも何の変化もないように見られた。

数日後に聞いたところによると、満映の人々も私達に遅れて避難列車で新京を離れたがその途中で無条件降伏の放送を知り全員が一緒に引き返し、八月二十日新京駅に着いたという。甘粕満映理事長はみな避難のため出発するのを見送ったあとも新京に残り、ソ連の新京進駐を見届けた上、満映で覚悟の青酸加里自殺を遂げた。何でも理事長と共に新京に残った人は、理事長の行動をよく監視するよう注意されていたが、甘粕理事長はそれらの監視のわづかの隙を見て毒を煽つ

たという。それは満映の人達が無事新京駅に帰り着いたことを確めて安心した上の決行だった。恐らく木暮実千代さんも他の人達と行動を共にしたものと推察している。と云うのは、木暮一家は避難するに当り、気心のよく判っていた満人に大事な家財道具類を托し、馬車に満載して南新京より二つ南の部落、大屯（ダイトン）というところへ疎開させたとの話を耳にしていた。恐らく東郷画伯のあの大きい作品も、この時一緒に運ばれていったまま日本の敗戦で、行衛は判らぬままになったのでないか。とすると、私の畑で会った木暮さんも、新京帰着後殆んどガランドウに化した家に淋しく住んでいたことになり、私の畑の作物も少しはお役に立ったかも知れぬと自らを慰めていた。

新京に帰着して何日か経ち、撫松路の自宅へ帰り当面の必要品を持ちだすことが出来た。その間、新京の街が意外に平穏で、市民の生活も外見するところ落着いていて変化はないようだった。奉天で経験したような険悪な様相は感じられず、矢張り予想していた通り、無血入京を果たしたソ連軍は、治安の維持に重点をおいているかに見えた。新京駅でソ連兵を見かけて以後、所々で兵の姿を見るだけなので、尚更そんな気がした。それはソ連極東軍司令官が新京へ進駐していたことや、ソ連軍政下新京市に対する国際的関心が窺まっていたことから、ソ連兵達も比較的自重を要請されていたと考えるこ

とが妥当であるかも知れぬ。それは首都新京攻防で、日ソ両軍が直接対決し戦火を交えたわけでもないから当然の結果とも云えなくもないが、帰京した者にとっては幸いであった。

私たち四人が新京へ帰着する迄に本社へ戻った男子社員らによって、二つの大仕事が仕遂げられていた。ソ連がいつ新京へ入ったのかは明らかでないが、日本の無条件降伏が発表された日と前後してのことと推測されるが、新京へ進駐してきたソ連極東軍司令官ワシュレフスキー将軍の要請で、公共事業関係者として高田社長ら数名が安東から新京へ帰ったのが八月十九日、その頃満州中央銀行が民衆に襲われているとの情報があった。恐らくこれを耳にして、樋口、北川君らが社長と協議の上、即刻若い社員を連れ、荷車を引いて中銀へ駆けつけて、徒らに暴徒に略奪されるくらいなら、事業継続を要請され乍ら一文もない我が社の窮状を考慮し、資金を提供してほしいと訴えたとのこと。これに対し、銀行側も動乱下のこと、すぐ事情諒解とばかり、多分廃業のため銀行に集められていた日本銀行券、満州中央銀行券など諸種のものを混ぜ合わせて詰め込んだ麻袋数個の持出方を指示された。それを用意の車に積み、途中無事本社へ運び入れ、社長公館に収容した。汚れた麻袋のこととて、そこに多額のお札が入っているとは誰も考えつかなかった筈で、その額凡そ二百三十数万円だと北川君から聞かされた。当時多数

の暴徒が銀行を襲い、夫々がこの時とばかり略奪を始め、銘々が新券の箱を肩にして運び出したりで大混乱の真最中だった。その危険を冒してよくこの大金を運び出すことが出来たものと驚いたり喜んだりだった。

もう一つ大仕事が仕遂げられていた。というのは、本社工場の西端に常時瓦斯用炭及燃料炭を荷卸しするための鉄道引込線が敷設されていたことは前述したが、更にその西側に満州農林の引込線があった。当時そこに白米の麻袋を積込んだ貨車が一輛放置されているとの情報があった。それを知った社員たちは「今となつては早い者が勝」とばかり夜の闇に乗じて、この麻袋入り白米をてんでに肩に擔いで本社の食糧倉庫へ移した。そこには白米の他のメリケン粉入り袋もあったので、勿論全部を運び了っていた。この話は樋口君から聞かされたが、これらの仕事が私たちの帰京以前に仕上げられていた。

八月下旬になると、招集されていた若手社員が続々と帰還して来たので、社内も賑やかになった。みな協力して、社業の復興に精を出すようになったので、稍活気に満ちた雰囲気醸し出されつつあった。

その合間の時間を見て、市内の空気を探るため吉野町界限を歩いて見た。驚いたことに新京駅から真直ぐのこの辺りの大同大街は人馬や洋車の往来が頻繁で、以前よりもずっと殷賑の極めていた。吉

野町入口附近の大街の中央には背の低い太ったソ連女兵（ニューエピン）が警笛を首にかけて、手ぶりも鮮やかに交通整理をしていた。それは如実にソ連軍の支配を表していた。更に吉野町通りに入ると、両側にギッシリと所狭しとばかりに屋台店が並び、すっきりした身形（ナリ）の中国人が声喧しく品々の売り捌きに熱中している。屋台で道幅の狭くなった通りには中国人、満人たちが我が世の春とばかりに犇き合っている。その人の群れに混じって歩き乍ら、これらの屋台に並べられている商品を見て、又驚いた。なんと日本製の清酒、煙草、罐詰、醤油、砂糖や味の素など、今まで一般民間人がどれほど欲しくても仲々手に入れられなかったものばかりが、ずらりと並べられているではないか。私は自分の目を疑ったが、正にそれらは正真正銘の日本製のものばかりだ。私はすぐ軍人当用品として軍用倉庫に貯蔵されていたものが略奪によって中国若人の手に渡ったものか、或いはソ連軍に接收された後に、何らかの方法で放出されたものだろうと推測していた。前線の兵なればいざ知らず、後方勤務の上級軍人だけが「戦時」を悪用して一般庶民の目を盗み、己らだけでこんな贅を尽くしていたのかと思うと、腹が立つと同時にどんな形であろうと、これらが庶民の目にふれるようになったことが、皮肉にも何やら新鮮なものを見る意外さと爽快さを感じ平和を歎んでいた。然しいかに晴ればれとした気持ちを感じ

たとて、お金のない自分には相変らずそれらは縁の遠い存在でしかなかった。時世は変り、ソ連兵の世であり、中国人満人の新しい世界が展開しつつある。その中で日本人はこれからどうなるのか、どうすればよいのか全く予測のしようもないまま時が過ぎていた。

構内の社長公館では高田社長をはじめ樋口、北川の両君と男ばかり四人の合宿生活がつづいていた。ソ連軍政下の変則的な操業中で、日常の規則的な仕事はなくこれからをどうすればよいのかを協議しても、予測不可能な事態の中では、唯当分成り行きも静観しつつ行動するより途はなかった。食事は朝夕の二食で、男装の婦人に頼み腹をみたすことを出来たのは何よりも幸せだった。時にはスキ焼の御馳走があって、こんな贅沢が許されてよいのかとも考え、その度に安東に残して来た正子や子供達が今日も無事に過しているかと、それが気がかりで白米を口にする度毎に、家族たちに済まないと胸のつまる思いがしていた。

八月二十五日過ぎた頃、構内社宅の様子を見廻わった。撫松路の自宅でさえ泥棒に入られていたし、無人となった鉄西地区の軍人社宅は根こそぎ略奪され、床板から柱まで木部がすっかりとられたとの噂を耳にしたので、為念留守社宅を検べておかねばと思いついたのだった。二十八戸の社宅の内、社員が帰任しているのは四、五戸のみで、他は無住のまま、みな安東へ避難している。是非ともその

保全策を施しておく必要があった。一番北の社宅から室内の模様を検べ始めたところ、どの社宅もひどく荒らされている。その余りの惨状に吃驚して了った。一人や二人の泥棒が盗みに入ったというような生易しいものではない。大勢が押入り、空き家になっているのをよいことに、箆笥のすべての引出しから品物、衣類、各種生活用品らを畳の上にまき散らした上、所々には人糞が盛り上がっている始末で、何とも手のつけようがない。衣類特に婦人用晴れ着や美事な帯や腰紐など小物類は引張り出して、座敷中に足の踏み場もないほどに散らかしているという無残極まりない状態である。よく注意して見ると、撫松路の自宅と同様に木綿物が全部無くなっている。窓の木綿の黒い暗幕や電燈カバー類は各戸とも全部無くなっていた。何故か絹物の晴れ着など日本人が貴重と考えるものは部屋中にばらまかれていた。その状況から社員及び家族全員が新京を離れた後に暴徒が大挙して各戸に略奪に入ったものと考えざるを得ない。何とも手の施しようもないまま、とりあえずすべての社宅の入口を施錠してそのまま保全することとして検分を終了した。

八月九日の拂曉は日ソ中立条約の有効期間中にも拘らず、突然ソ連軍が各方面から国境を破って満州国内に攻め込み、優勢且有力な武力で日満守備兵を倒して侵攻した為、この方面の入植日本人や市民は大きな被害を被ったことは既に周知の事実である。この中で、ようやく生き

残り、無蓋車で避難の幸運を掴んだ人々でさえ、途中で多数の暴民に列車で襲われたのか、最初に新京に到着した避難民は殆んどが持ち物何一つなく、身ぐるみはがれて多くの男女が素裸だった。余りの惨状に新京市民が衣類を供出してよく窮状を救ったという。これらの避難民が収容されたのは、あの略奪で荒らされた軍人社宅だった。食料としては一人当り三合の高梁だけで鍋釜類何一つ持たない人達は罐詰の空き缶などを探したり燃料を探し歩く毎日だとの話が耳に入ってきた。敗戦が一朝にして、人の運命をどん底に突き落す悲惨さに言葉も出ない。それは他人事ならず、私達にもどんな運命が待っているのやら暗然とするばかりだ。

或る日、何かの用件で新京駅前に行ったとき、日本軍将校団がソ連兵に監視されながら大同大街を駅に向かって行進して来るのに出会って啞然とした。日本軍の将校達は第一装の軍服を着ていたものの、全員が肩章を剥がされ、腰に吊るしていた日本刀も奪われて、丸腰のままのみすぼらしい姿である。而も、兵卒同様六列の縦隊を組まされ、ソ連兵の指揮のままに行進しつつ、こちらに向かって来る。昨日迄は傲然と肩を怒からして四囲を威圧していたのとは余りにも対照的な囚人の如き一団と化しているではないか。年令もまちまちで若い将校たちも含まれていた。忠実に軍務に精励していた将校もいたであろうに、この姿を親が見たらどう思うかと言葉にならない複雑な思いであ

った。人数は二百名位だが、ソ連はこの日本の将校団をどこへ連行しようとしているのかは判らなかった。

これと前後した或る日、ソ連兵の一団が市中行進して来るのに偶然出遇った。それは、入城行進というのであろうか。所は大同大街ではなく興安大街を北進していた。ソ連得意の八列位の縦隊で、あたりを圧するばかりの勢いで整然とした隊列を組み、独特の脚を折らずに高く揚げての行進である。私はその整然とした隊列よりもソ連兵の持つ銃に注目していた。前方から後方まで二名の内一名が、チェコ製のマンドリンと言われていた円形の弾倉がある連発銃を持っていた。それは入城行進のための示威の演出だったかも知れぬが日本兵の三八式銃との威力の隔差を思わざるを得なかった。日本では日露戦争に勝利して以来、武器の進歩には意を用いず、精神訓練のみを重視して今日の敗戦となったように思えてならない。日露戦争当時でも機関銃と三八銃の隔差があったのに、勝利に酔い痴れた將軍たちの頭脳は、その時点で発達が停止凍結して了ったのだろうか。

三八銃だけでなく戦車、大砲、航空機等に外国と比べ質量共に大きな差を生じている時に、日本軍は何を考えていたのか。資源の不足を理由とするなれば、このような途方もない大戦はすべきでなかった。將軍達が中堅若手の将校達の鬱勃たる奔流の勢いを説得抑止する力がなかったとすれば情けない話であり、国を守

る為の哲学を缺き、唯時の勢いに流されたとすれば、將軍達の責任は余りに大きい。このような感慨を持ってソ連兵の行進を見つめていた。このソ連部隊は恐らくあの第一師団の兵営に入ったのだろう。敗戦直前の一か月間教育訓練で入営を命じられたあの兵営へ。

明治の世、私がまだこの世に生を享ける以前に、大敵ロシヤと死闘二年有余漸くにして手にした勝利の結実を、僅か一週間で殆んど戦うことなくすべてを失うほど日本人は淡白になったのだろうか。世界を敵として闘うことを選択した理由をどこに見出し得るというのか。十五世紀大航海時代の到来から世界の先進国が植民地獲得に狂奔したのに遅れること四百年。ペリーの来航で開国してからも、攘夷思想を内包したまま欧米先進国の模倣にやっきとなり、富国強兵、文明開化に狂奔、植民地獲得争いの尻馬に乗り、大陸にまで手をつけた結果が此の始末、正に螻蛄の斧にも似た醜態は何としたことだろう。五族協和の別天地を世界唯一の理想のパラダイスと観じて渡満した私が見たものは、看板に偽りありの譬にも似て、協和会発足当初の理想も現実の世界では実現されないままに、次第に軍事色の濃厚なものと化し、遂には根底から崩壊するに至ったのを直視する破目になるとは皮肉であった。

それにしても新京市内の平静さは意外と云うより他なかった。殊に奉天での混乱とソ連兵の暴虐ぶりを見たものとして

は、それは予想外であった。しかし日を経て色々な情報を知るに及び、矢張りソ連将兵の低劣さに惘れる事件が続出し、又もや敗戦国民として悲哀を味わされることになった。

もう一つ意外だったのは、市内の中国人、満人が日本人に対してあらわに敵意を示す行動に出なかったことである。北満や東満など、あちこちで日本人への暴虐、略奪、強殺等は巷間伝えられる通りだったろうし、暴民によるこの時とばかりの報復が各地で数多く行われたことは否定出来ない。けれど、新京市内での此の種の事件はあまりなく、そこに私は大陸育ちの彼等の鷹揚さ、腹の大きさを感じ、ソ連人とは一味も二味も違う民族としての特異性を見る思いがしていた。悠久五千年の歴史で醸成された度量の大きさを学ぶべきものと感じていた。そして、敗戦以前は自覚すると否とに拘わらず、我々日本人の背中には日の丸が附着いていたのだと感ぜざるを得なかった。その日の丸の護符が消えて了まった今は、武器を持つソ連兵や現地諸民族の群れの中で、ぼつんと唯一人の個として生きて行かねばならない不安は限りなく、而も先行きの生活の保障がないままの明け暮れが、どれほど惨じめなものか。国籍のある本国日本は遠く離れた世界、今踏みしめている大地は祖国のものではないばかりか、永年に亘り専横な武力を背景として侵し続けて来た他国の大地である。

八月下旬、祖国日本へ米国軍司令官マッカーサー元帥が占領の第一歩を印したと情報があつた。日本はどうなるのか。肇国以来未曾有の敗戦無条件降伏である。太古白鳳時代、朝鮮百済国へ派遣した日本の援軍、が白村江の闘いで惨敗を喫したという歴史はあつても日本国全土を挙げて無条件降伏し、戦勝国の軍司令官が日本全土を占領することは初めてのことである。これからどうなるのか。全く予測がつかない。米国やソ連に分割統治されるという噂が聞こえてくる。天皇の責任追及の問題もあるらしい。天皇は退位されるのだろうか。日本の国体はどうなるのか。軍国主義の桎梏から解放されたとしても、新たな籐（しがらみ）によって国民はこれからも末永く苦しまねばならないのだろうか。在満の我々日本人はどうなるのか。このまま祖国に帰ることも叶わず、ソ連軍占領下、最下位の民族として生きて行くことを強いられるのではなかろうか。すべては個人の手の届かないところで決定されるのだろう。あれこれ考えても何の足になるものでない。すべてをただ運命として享受せねばならない。となれば、一個の人間として真剣にそして恥かしくない生き方を選ばねばならない。かく自分に言い聞かせた後は、覚悟が出来て腹が坐ったというか、当面の問題に真剣に取り組むことで、その日その日を大切に過すことにした。

工場では今日も日満従業員が真っ黒になって懸命に石炭乾溜作業に従事して居

た。その風景は以前と何の変化はない。そして新京の市街は外観だけは平静に推移していた。

繁華街吉野町では、今日も人混みで溢れるばかりの賑わいの中で、物の売買が行われ変則的な市場経済が営まれていた。売買交換成立の手段としての紙幣は、依然として満州中央銀行券、日本銀行券、朝鮮銀行が用いられていた。これらの紙幣は、この地方の隅々にまで有効通貨として通用しているからだろうが、その信用性の根拠はその精巧な印刷技術によるものだ。その中へソ連軍の軍票が罷り通るようになった。その軍票とは赤一色刷りと青一色刷りの紙幣でまことに粗末そのものであつた。大きさは 8cm×15cm 位のもので、通貨として何種類だったかは記憶がない。唯、それは初歩の印刷業者でも簡単に模造出来るような一色刷りの広告と大差ないお粗末なもので、ソ連軍により強制的に流通させられたものであつた。翌年二月一杯でソ連軍が引揚げると途端に紙幣としての価値を失い紙屑と化して了つた。その引揚げの時期の情報を知らない者が最も損害を蒙つたのだが、一番の被害者は日本人だろう。それと同じことが後日、中国国民政府軍発行の軍票及び共産八路軍発行の紙幣にも起り、なけなしの私物を売って紙幣に換え、それによって生活を維持するしかない日本人は各軍の動きの情報の欠落から、手にした軍票がゼロになる悲劇を蒙つた者が多かつた筈である。

団交から操業停止まで

乾いた暑い日がつづく中で八月も終わろうとしていた。社長公館では四人の合宿生活が繰り返されていたし、状況は依然不透明なままであった。

八月三十日午前、突然満人傭員代表から社長に対し団体交渉の申し入れがあった。それは明治四十二年創業以来初のことで、その事自体が満人社員の対日観の変革を示すものであったが、私は当然来るべきものが来たと感じていた。会社側として高田精作社長の他に樋口克己文書課長、北川文英経理課長と共に人事課長として私が出席することになり、場所は社長室が選ばれた。中国語に堪能な向畦地俊雄労務課長は当時まだ安東に残留していたので、通訳として誰が居たのか思いつくことが出来ない。満人社員側からは七、八名が出席して来た。彼らが社長室へ入るのは初めてのことであったが、その内二、三名は顔見知りの者だった。工作工の王永海がその代表の首席だとすぐ判った。彼が満人社員を組織するオルグであったのかと意外だったが、こうした活動を密かに進められていたであろうことは、別に驚くほどのことではなかった。私は労働組合運動についての認識も持っていたし、毛沢東の影響が満州国内にも浸透していたことも当然のこととして理解することが出来たからである。永年勤続の優秀な満人傭員も沢山居たが、年令

の比較的若い王永海が其の代表であるとは一寸予想外であった。

団交の主目的は、日本の敗戦の結果、満州国も自然消滅の形で株式会社としての満州ガスも存在の意義を失ったからには、今日まで経営者であった日本人側が満人従業員に対して退職金の支払いを行うべきである。この要求に対して返答せよというのが、高田社長の冒頭の挨拶につづいての彼等の申入れであった。その上で、若し自分達の要求を入れない場合は即時暴動を起して会社をたたき壊し、必要なものを奪うなどでその目的を貫徹する積りであると、些か穏当でない脅迫めいた言葉も付け加えられていた。その口調は穏やかでない響きを含んでいたが、それが本音ではなく是非とも自分達の主張を受け容れ「那邊（ナーベン）、那邊、一樣（イーヤン）」の退職金を出せという強い要求の表現の一面であると私は理解していた。そして現在ソ連軍の占領下その極東軍司令官の命によって操業し、瓦斯を供給しているものの需要者側から料金を徴収する環境も欠如して了っている状況下、満人傭員達が俺たちの生活の保障をどうしてくれるのかという将来に対する大きな不安がこの様な要求となって噴出してきたのは当然であった。それを聞き乍ら、この時私は新京へ帰還の途中奉天支社に立ち寄り、大町支社次長から偶然耳にすることが出来た奉天での企業と満人社員間の交渉の経過を想起していた。又、新京帰還後、北川経理課長が満州

中央銀行から入手していた紙幣の総額及び、この満人社員達の要求である「那邊（ナーベン）、那邊、一様（イーヤン）」の程度、即ち他の会社並みのものを支給するとして、その総額が凡そどれほどの金額となるかは、略胸算用で計算して、その程度なれば無理することなく充分彼等の要求を受け入れることにより、彼等を満足させ得るものと考えていた。私は即刻社長にその要旨を告げ諒解を得ることに努めた。ついで高田社長から皆さんのお話はよく判りました。出来る限りの努力を払って要望にお応えするように努めます、その要旨は人事課長がこれから皆さんにお答えしますと云って言葉を切った。満人社員たちは目をギラギラ輝かせ乍ら返答を待っている。そこで私は社長の諒解を得てから立って次の諸点について説明した。皆さんの要望に対して社長が極力お応えするようにと約束されたので、之に従い人事課長として即刻その準備に取りかかるが、人事関係の重要書類は避難のとき持出して今手元にない。それに代わるものとして人事課に残されている資料の中から所用書類をさがし出すまで若干の時間が必要なこと、資料発見の節はそれを基として皆さんの退職金の計算作業に着手し、たとえ徹夜してでも出来るだけ早く要望にお応えできるよう努力する。尚、金額に関しては、社長の諒解を得た上で現在の会社の能力に従い可能な限り多くお渡し出来るようにしたい考えであると答え、支払いの準備完了次

第、皆さんの代表に支払い日時を連絡すると述べ私の話を打切った。王永海代表や満人社員達はこれを諒とした上、団交の目的を一先づ達成したものとして社長室から引き揚げて行った。

この後社長公館に引き上げてから私は社長に人事課の部屋が略奪により戸棚や椅子、机等類は殆んど残っていないまでに荒らされている上、人事関係書類も乱雑に散らかされている状況だが、その中から前期分の書類を捜し出すことと、彼等の要求が他企業並みを要求しているところから凡そ給与の二か月分支払いが適當の旨を述べて、口頭決裁を得たのちすぐ人事課室に入り資料さがしを始めた。部屋一面に散らばっていた書類の中から間もなく前期分の日満人給与や賞与支払関係書類を見つけ出すことに余り時間を要しなかった。又給与袋なども多数残っていたので平時と変わらずに比較的順調に支払い準備を完了し得る見込のついたことを報告し終って自らもこの難関を切抜け得るとの確信を得てやっと安心することが出来た。

この時点で人事課員の松村伸之君（島根県）や羽藤君（福島県）が社内に居たか記憶が戻らないが、どちらにしても若い社員の協力なしではスムーズに事は運ばない筈だし、現実にはさして困難を感じることなく作業を進め得たことのみが頭に残っている。人事課には課長机が残っているだけで椅子もなくなっていたので、作業をどこでしたのか、殊に当時は現金

支給方式なので氏名、支給項目並支給金額等を明記する伝票及び氏名記載の封筒の用意や支払調書通りの金額を經理から金種別に一括受領した上、個々に誤りないよう個人別封筒に封入し全部が済んだ後、誤りがないことを再度確めた上で記名済み封筒を厳封して作業を終了するという段取りであった。多額の現金を取扱う関係上、不測の危険をさける必要があるので、作業場所としては社長公館以外にはなかったと思っている。何れにしても、こうして他社並みの退職金を支給する準備が整ったのは夜更けてからであった。あとは日本側の誠意を諒として理解されることを祈るのみだった。準備が整った結果から九月一日午前八時に支給開始可能の見込が付き、その旨社長に報告していたので満人社員代表にもその旨連絡が届いていた。

退職金支払当日は早朝に目覚めた。私には満人らの要求通り他社並みの金額を用意したという自信はあったものの、それは奉天での聞き込みに準拠しただけで新京での他の会社の例はこの混乱の中、照会する時間的余裕は全くなく、私一人の判断に拠るもので、それが満人側の要求にどの程度応えられるものであるかは全く不明のままで、全く不安がないとは云えなかった。

朝七時前から満人社員達は続々と本社前に集まり始めていた。公館の窓から外を見ていると棍棒を持っている数人が見かけられた。私は万一の場合の「暴動」の

二字がふと頭をかすめ、少なからず不安であったのも事実である。用意した給与袋を納めた箱は若い社員が数名で護っていた。私は他の社員と共に本社玄関に立ち、時間の来るのを待っていた。予定時刻が迫ると、本社前広場は満人社員でいっぱいになっていた。七時半過ぎ、高田社長が中国第二公安分局長及武器を持った護衛の巡警二名と共に現れた。それは社長が万一を慮り、事情を述べて公安分局長に応援を依頼に行った結果であると判り、その計らいに感銘していた。玄関前は集って来た満人社員で立錐の余地もない程になった。

定刻より少し前に先づ第二公安分局長が大勢を前に訓示を始めた。「今日は間もなく満州ガス会社社長から諸君に退職金の支払いを行うと聞いたのでその状況を見守る為に来場した。日本が戦いに敗れ無条件降伏した今日、中国は世界の一等国に伍することとなり諸君は一等国の国民となったのである。この満州ガス会社は中国の財産として接收される予定である。会社側は今日君達の要求により用意した退職金を支払うと云っている。高田社長は誠意を以て出来る限りの金額を用意したと話したが、君たちもその点を諒解するよう希望する。尚今後も接收の日がくるまで会社の全設備等の維持のために協力するように希望する。君たちは一等国の国民として恥かしくないよう行動せねばならない。」と訓示を行って終了した。

これについて高田社長が分局長の側に起って挨拶し「先日、あなた方社員の代表から退職金支払方の要請がありましたので、それに従い満州ガス会社として精一杯のお金を用意して、茲に皆さんにお支払いをする準備が出来ました。どうか私たち会社側の誠意を汲み取って頂きたい。尚、今後共会社の設備保全のためご協力下さることを、切に望んで已みません」と挨拶し大勢の満人社員に丁重に頭を下げた。それ迄は会社側の出方次第によっては暴動も辞さないという一種異様な雰囲気が漂っていて不気味だったが、その気配は稍沈静化したように見えた。私はこの時まで玄関のポーチに持ち出された小さな机の上に給与袋を詰めた箱を置いて直ぐに支払い開始可能となるように準備を完了していた。社長の挨拶に次いで、私は満人社員達に向って大きな声で話した。傍らの誰かが通訳してくれた。「皆さんの代表にお約束した通り、これからすぐ準備にかかり、今こうして皆さんに退職金をお払することが出来るようになりました。どうか私達の誠意を汲んで受取って頂きたい。これから順番にお名前を読み上げますから、一人宛受取りに来て下さい。それでは今からお支払いを開始します」と云ったあと、一人宛袋の順番通りの名を読み上げて貰った。名を呼ばれて出て来た人へ記名の袋を確めて貰いながら手渡し始めた。満人達は今こそ要求通り退職金が手に出来るものと真剣な目付で私を見つめているのが感じ

られ、ぴんとした緊張の時間が過ぎていた。一人一人に袋を手渡し乍ら、私は密かに既に袋を手渡した者の反応を観察していた。袋を手にした満人はすぐ脇のほうへ退き中味を調べている。その中味の金額に満足を感じているか、不満を示すかと時々さりげなくそちらに視線を移してその様子をさぐっていた。私は少なからず不安だった。彼らがどの程度を要求の基準としているか判らなかったからである。彼等の顔つきはどう変化するだろうかと観察していた。ところが受取った袋の中味を調べたものが、みな一様に満足そうに明るい顔つきとなり、穏やかな雰囲気が漂い始めたのを知って、私はホッとして緊張した気持もほぐれ、全員に袋を渡し続けた。すべてが平穩裡に終了してから、私は肩の重荷を下ろした気分となって独り喜んでいた。玄関前一杯に詰めかけていた人波も今はすっかり消え去り、第二公安分局長らの姿もいつの間にか見えず、元の静けさに戻っていた。それは嘘のような風景だった。今にも暴動になるかと内心恐れていたのが夢のようだった。

私には満人と中国人との人種区別が全然判らなかったが、彼等の間に互いに民族間の微妙なしこりがあったのかも知れないと考えるようになっていた。それはこの団交問題と前後して「王公臣」が殺されたと聞き驚いたからである。王公臣は年令二十二、三才の満人で、白面中肉中背、気のやさしい性格の持主だったし、

日本語がよく出来る好青年だった。人事課所属ではなかったが、色々な要件を云いつけてもよくこなしてこまめに働いていたので至極頼りになる存在だったのに「漢奸」として殺されたという。日本人に近い関係にあり、早くから傭員として採用されて信頼されていた関係を村人に妬まれていたのか、何らかの他の原因によるものか判らないが、それにしてもあの心優しい青年が非業の最期を遂げたことは気の毒であった。人の世の儚さを感じるばかりである。

表面的には平静だと考えていた新京市内外でも、各方面からソ連兵の蛮行が伝えられるようになり、その犠牲となった人達の痛ましさを嘆く日が続いた。新京の繁華街に近い日本人医師宅にソ連兵が押入り、その愛娘さんに暴行を加えたため、その娘さんが自殺して果てたとの噂が伝えられた。恐らく幸せ一杯だったろう家庭に、突然起ったこの悲劇を何と云ったらいいのか。この種の事件が市中あちこちで日常茶飯事の如く起っても何の手だてもすることが出来ない。萬一の場合にどう防ぐか、なす術がないだけに口惜しさだけがつのる日々である。

吉野町付近でソ連の女兵を見かけた。ソ連には女兵がいるのかとびっくりした。ところが、此の種の女兵までが占領地ではすべてが意のままになる世界に君臨するかのようになり、女性は女性なりに秘やかな暴虐ぶりを發揮してロシヤ人の低劣さを露呈する噂話が伝って来た。それは恐

らく女兵が任務を終えて宿舎へ帰る途中でか、日本人の若い男性を拉致して自室に閉じ込めふんだんに卵料理などを与えた上で夜はその男に夜伽を強要して慰んだ上、朝部屋に施錠してその男を閉ち込めて出務する。こんなことが一週間も続き精魂尽き果てたとき、その男は棄てるように漸く解放されたというあきれた噂である。

日本降伏後、各地の部隊は所属部隊長の意見により対応が異なる処置が取られ、即刻部隊解散したところと、部隊毎そっくり降伏したところに分れたとの話を聞いていた。奉天周辺で殺されて身ぐるみ剥がれたのは、解散により三々五々奉天市を目指していた日本兵の哀れな姿だったのかも知れない。

九月に入って部隊解散で若い社員が続々出社して来るようになり、社内は少し賑やかになった。けれど瓦斯製造作業以外にはさしたる仕事もない。各自が思い付くままに設備の維持整頓手入れ等の仕事をしてその日を過していた。それにしても多くの社員が生活費を持たないままに出勤しており、寒くなり始める十月を目前にしてその窮状を放置しておくわけには行かない。それをどうするかを協議した結果、日本人社員にも、この際退職金支給を行うべく社長命が出された。然し、正規のものは勿論支給出来る由もない。人事退職規定に関する極秘内規等は、安東へ疎開させたまま新京帰還の節も途中の危険を慮って支店へ預けたままとな

り、取り寄せる術もない。仮りに内規に従う計算が可能であっても、その金額を支払うだけの資金がない。況して敗戦の混乱の中である。協議の末、臨機の基準が決定された。その基準なるものを適確に思い出す便（ヨスガ）は既にある。唯、月額給与に多少の勤務年数を考慮した程のものであったような気がしている。満人の場合同様人事課の書類の中から完全な資料を手にすることが出来たので、之を基に計算して支給することが出来た。敗戦後のこととて之に準ずる措置であったとしても不満を云う社員は一人として無かった。然し、それ以後予想もしなかったことが、悲劇が相ついで起ったのである。それは構内社宅居住社員に対してでなく、構外即ち新京市内に散在する社宅から通勤していた社員が災難に遭ったのである。

この頃市中を歩く主として日本人がソ連兵に襲われて金品を強奪される事件が続出していた。その情報はすぐ伝えられ、お金を取られないようにと苦心する毎日が続いていたから当然銘々が夫々に警戒をしていた。ソ連兵も日本人らのお金のかくし場所の情報交換をしていたのか次第に被害が拡大していた。帽子の内側の折返しの中、服の各ポケットは勿論のこと靴底巻きゲートルの内、靴下の内、猿又の内などと初は単純だった隠し場所が、日を経るに従い隠す方も色々智慧を絞ったが、奪う方も念を入れてさがして盗むというわけで、被害が頻発していた。そ

んなわけで、お金を受け取った社員たちも相当苦心し警戒していた筈なのに被害がかなり出た模様で、無念の思いをかみしめるだけで、何とも手の打ちようがない始末であった。腕時計を盗んだソ連兵の中には何個も両手首に付けて自慢している野郎もいた程、その質の低さには呆れ返るばかりで、ソ連の貧しい国情が推測できるようだった。

八月九日、雪崩れの如く国境を破って侵入して来た戦車群初め多くのソ連軍隊は、あの強力な独逸軍を相手にして死闘を展開しようやく勝利し、その勢いに乗じて極東に転進し、旧敵日本をやっつけろとばかり侵入して来た。ところが案外に手応えのない関東軍に肩透しを喰った形で、あり余る勢いを市民にぶっつけて来た感じだ。その上ソ連は民政ゼロのお国柄。見るもの聞くものすべてが珍しいものばかりだ。暴れまくって思いのまま仕度い放題の放埒ぶり。おまけに多数の囚人兵まで駆り出していたので、その低劣な民族性丸出しのお粗末さである。なぜこんなロシヤの奴らに痛めつけられねばならぬか、腹が立つやら情けないやら、忿懣のやり場がない。地団駄踏むとは正にこのことだった。あのジャガイモ顔を見るにつけ胸糞が悪くなる。

或る時撫松路から出勤してきた瀬戸口君から又もや事件を知らされた。出勤途上で見てきた話で、朝っぱらからソ連兵が或る日本人宅に侵入し婦女に暴行した。それを知った近所の人が助けを求めて通

報に走り、すぐに駆けつけたゲーペーウー兵は、欲望を遂げて出て来たソ連兵を出合いがしらに有無を云わさずその場で射殺したという話である。ゲーペーウーは秩序を守る存在として頼り甲斐があった。けれど、問答無用とばかりに射殺してしまうお国柄も亦異様である。四平街でも同じような事件があったと聞いた。列車が同駅に停車したとき、乗り込んできたソ連兵が、大勢の乗客の目前で一人の日本女性を社内の通路に押し倒して暴行を加えた。この時も他の乗客が助けを求め駆けつけたゲーペーウーは目的を果たして降りて来たソ連兵を即時射殺したという。ソ連という国、ソ連軍という武力集団、ソ連兵とゲーペーウーの存在は一体どういうものなのか。その不可思議な関係は、我々には判断のしようがない。列車に大勢の満人が満員で動きがとれないところへ割り込んで来たソ連兵が一人の満人女性を掴まえて無理遣りに立ったままで犯したという話もあった。野生動物にも劣る品性劣悪のソ連兵たちだ。市中の満人らもソ連人を軽蔑して罵倒する。「ソ連の奴らは世界一のウソつきだ」「太鼻子（ターピーズ、ソ連人）は世界の田舎者である」「あんな奴らの云うことは信用できない」と全く馬鹿にし切っている。

これら非情で物騒な噂が新京市中に蔓延した頃、日本人は随分慎重になり各自携帯物には気をつけていた。ところが興安大街と大路の交差点近くで今度は上衣を脱がされてそのままそっくり奪られた

という話が耳に入る。時計、金ばかりでなく、果ては衣類までもかとあきれるばかりである。

ある日、突然社員が多くのロスケが構内社宅に侵入し盗みをはたらいていると告げて来た。誰かが早速ゲーペーウーに救助を求めに走った。報せを受けたゲーペーウーがすぐ本社正門から入って来てくれたので、社宅群の方向を指さすや即座にゲーペーウー兵は大きな声で叫んだ。なんとそのとき、社宅の各階のあちらこちらの窓から七、八人のソ連兵が顔を出したのを私も見た。彼らは大声で怒鳴っているのが、ゲーペーウー兵であると判った途端、泡を喰ったように吃驚仰天蜘蛛の子を散らすように一目散に逃げて行った。留守社宅は一応戸締りもしておいたのに、彼等泥棒の手にかかってはなんとも施すべき術がない。子供の頃、裏の空き地に積んであった多くの土管の穴から、私の足音に驚いた鼯の親児が十匹ほど一斉顔を出したので、私の方がゾッとした光景を思い出していた。余りにその時の鼯の様子に似ていたからであった。各社宅にどんな被害があったのかは全く判断できなかった。私はゲーペーウー兵に感謝の意を示して、引揚げて貰ったあと社員たちに戸締りを依頼して公館へ引き揚げた。

社長公館では相変らず社長他三名の合宿生活が続いていた。十月に入ると、新京はボツボツ寒くなってくる。安東へ避難中の社員家族も、そのままの疎開生活

では越冬は困難だ。なんとか新京帰還の方策を考えねばならない。その他に構内社宅も市中の社宅群にも越冬用の石炭及越冬野菜を用意しておくことが最大の問題となっていた。

九月も半ば過ぎる頃、石炭が品薄となりこのままでは瓦斯供給を続けることが不可能となった。もう一か月近く瓦斯用炭、燃料用炭の入庫が杜絶えている。ソ連軍司令官は治安維持の必要上瓦斯の供給を命じているが石炭なしでは命令遂行は困難である。意を決して高田社長はソ連軍司令部となった元関東軍司令部へ樋口君と共に交渉に出掛けた。撫順炭が困難ならせめて吉林炭を貨車輸送してほしい、それが叶えられないと瓦斯供給を中止せざるを得ない状況に立ち至っていると説明した。これに対し、ソ連の担当者は事情はよく判った。こちらの要望に沿うよう手配しようと約束をしてくれたので社長は意を強くして司令部から帰ってきた。その話を聞いた私たちはソ連司令部が本気で対応してくれるか否か、半信半疑だった。製造所現場でも本気にする者はいなかった。瓦斯用炭が入庫しないとなれば、火を止めねばならない。瓦斯供給も当然不可能とならざるを得ない。その成否はソ連軍司令部の意向次第である。命令を出し放しで対策を講じないなら、非はソ連にあり会社側としてはその結果を待つしかない。それにしても、燃料炭だけがまだ相当量野積みのままに残っている。このままに放置しておけば、

次第に気温の下る中で盗まれる危険がある。今となっては一日の猶予もない。燃料炭を全部、製造所のレトルトの上部のサイロに隠して了う必要があった。現場の社員達の意見でそれは即座に実行に移された。こうして各炉室のサイロに収納が終了し、野積み石炭は無くなった。これで万一の場合の社員の冬の燃料はある程度確保することが出来たと安心だった。私は公館に居て朝夕の食事が出来るけれど、ただ安東に残して来た家族のことが気がかりだった。もう手持のお金もあまり残っていないだろうし毎日をどうしているかと心配だがどうしてやることも出来ず気がかりだった。名ばかりの退職金、その上十年足らずの勤務なので他よりは少ないものの、少しまとまったお金を手にすることが出来たので家族が無事に新京へ帰る日のことを考え白米を一斗ばかり用意することにした。満人の間では一斤、二斤が売買の単位で、一斤半が約一升到る。社員を介して十五斤（約一斗）袋入りを買ったが、価格は約十円余であったと思う。それは純白米であった。これだけでは五人の家族で僅かな日数しか保たないとしても、兎に角用意しておくに越したことはない。皆が新京へ帰れる日を待つほかないが、それまで無事元気でいてくれるよう祈りつつ、公館へ運び入れて保管しておいた。操業はどうなるのかについてソ連は積極的に動き出す気配はない。又中国も軍事情勢不透明のままである。そして日本人はどうしたらよ

いのか、お先真暗のままに日を過さねばならない不安の中で、誰もが毎日の無事を祈る生活がつづいていた。

日本人狩り

九月も下旬に入り依然としてどうしようもない不安と焦りの日が続いていたが、或る日、樋口君が満鉄本社から奉天のとんでもない情報を聞いて来た。それはソ連軍による老獪な人狩りであった。日ソ中立条約のまだ有効期間中にも不拘、一方的に之を破棄して満州国に攻め込んだばかりか、戦争による捕虜なれば兎も角、市民日本人迄を占領下の威力によって狡猾にも拉致して数多くシベリヤへ送り自国の手不足を補う作戦に出たのである。降伏した関東軍の兵士でソ連と交戦した者は少く、ソ連軍に殆んど損害を加えることなく、唯天皇の命に従って降伏した日本兵である。そのすべてを捕虜としてシベリヤへ送り自利を図らんとするものだ。こんなことが国際法上許されるのだろうか。米国らもソ連を恐れて、其の責を問うことなく終ったのは何故か。勝利者大国の横暴と云うべきのみ。

奉天での人狩りとは、九月の或る日、市内各町の隣組を通じて市民成年男子の兵籍調査がソ連軍の依頼によるものとして行われた。その理由としては、日本軍から押収した兵器数と降伏した兵士数が符合しないので、唯の記録として調査するだけだから、兵籍を持つ市民は正直に

記載してほしい旨の用紙が配布された。如何にも他の意図はないように装って調書を配布させたのであった。これに対して正直に兵籍を記入した人達こそ不運であった。何日か後、これら兵籍を記入した者に対して中国の警察への出頭依頼書が配布された。それには唯聞きたいことがあるだけだから心配する必要はないと記されていた。それに騙されて出頭した者全部を、ピストルを持つ中国警察官が誘導し、清朝先祖の墓廟である北陵周辺に何重にも張り巡らした有刺鉄線網の中へ放り込んで、ソ連軍に渡されて了った。多くの日本人がこのだまし作戦に嵌（ハマ）ってシベリヤへ送られたのである。あの如何にも図太くて狡猾なソ連兵のやりそうな手口である。「太鼻子（ターピーズ）は世界一のウソつきだ」との満人の言を孫子の代まで忘れてはなるまい。

満鉄では、ソ連軍の命令によって普通貨物車輛の内部を改造させられていた。その改造とは二階造りとし、一階は立ったまま詰め込めるようにし、二階はかがんでやっと座れるような窮屈なものだった。こうして改造の準備が出来た一ヶ列車分の日本兵を、北陵からソ連兵が監視付きで駅迄護送した上、それこそ立錐の余地もないほどに詰め込んで、次々とシベリヤ等ソ連領内各地の極北地帯へ拉致し去ったのである。

奉天での兵籍調査はやがて新京へも移行されるかも知れない。その万一の場合に備えて社員に情報を伝えておく必要が

あった。奉天での悲劇を新京で再現させてはならない。翌日、本社玄関前へ多くの社員を集め、樋口君から満鉄本社での奉天情報が詳しく伝達された後、今後若し同様のソ連軍による調査が行われる場合は、各自これを参考として慎重に対処するよう勧告が行われた。これを聞いた社員たちに一種のどよめきと明るいよるこびの声が上がった。万一奉天と同様のことがあっても、新京の社員らはうまく切り抜けるだろうと安心していた。この頃ハルビンでもソ連による日本人の男狩りが伝えられ、多くの人が心を悩ませていたので、尚更のことであった。事実か否かは推測の範囲を出なかったが、ハルビンの或る街では、各戸から男は全部戸外の路上に出よとの命令が出され、仕方なく出た日本人男子は全部拉致されて行ったという。

しかし、奉天からの情報によれば、暗い中にも嬉しい話も伝えられて来た。日本人が詰め込まれた貨物列車の発車前夜の暗闇に乗り、危険を冒して満鉄社員が密かに鋸で貨車の床板に穴を切り開いたので、一貨車内の全員が逃亡に成功したとの朗報があった。又それとは別に、剛膽な日本人が居てビルの一階に侵入してきたソ連兵を何名か斬り殺したという嘘のような話も伝わっていた。それは奉天駅も近い松島町辺りの煉瓦造りのかなり大きなアパート一階の出来事で、夜陰に乗り入口の物陰にかくれ抜刀して待ち構えていて侵入して来たソ連兵に日本人が

襲いかかって斬り殺すなり死体をひきづり込み、更に次に忍び込んで来たソ連兵も亦同様にやっつけて二、三人を殺したという。私は恐らくその後中庭に穴を掘って埋めたのかと想像を逞しくしたが、それにしても、それが事実ならば、当時では逆も考えられない程痛快な行為だと溜飲の下がる思いをしていた。

昭和十五年初冬、奉天勤務時まだ代用社宅の用意もないので、二、三日駅前の大丸旅館に宿泊后、取敢えずその松島町のその事件のあったアパート五階の俄造りの三畳一間のところで一か月程過したことがあったので、尚更に感激も深く全く胸の透く思いをしたことが記憶に残っている。並大抵の者には、到底このように大胆なことは出来ない。命がけでやり遂げるほど肝の座った日本人がよく居たものだ感激したことだった。

日本が敗れた当時、ソ連軍の侵入と前後して中国国民政府軍が警察行政を行うに至り、より以上の治安の悪化が阻止されていた。他方、共産八路軍の勢力が次第に近づきつつある中で、本社の設備の保全と社員の生活への配慮が次第に困難さを増し、この先どうなるか予測さえ不可能となっていた。

工場は操業停止に追い込まれたにも拘わらずまだソ連司令部からは石炭供給について何の連絡もなかった。日が過ぎるままに、ガスホルダーは空の状態まで下降してしまった。満人従業員は一人も来なくなり、日本人社員のみが思い思い

に出社して、各職場を見廻るだけのひっそりと閑古鳥が啼く状態となってしまった。こんなことを誰が予想し得ただろうか。ところが、こんな工場へソ連兵が折々現れては、何阻ることなく勝手に各部屋を物色しては金になりそうなものを盗み出し始めた。全くのこそ泥棒である。工作室の用具類や用度課の備品類を盗んでゆく。厚かましいのは、工作室の設備を用いて何かを修繕するかのような姿まで見られ出した。この状態を放置しておく、終りには小さな備品はじめ必要な用具類は根こそぎ無くなる虞が出てきた。これを受けて、社長公館ではその対策を協議の結果、早速構内社宅の社員や出社していたもの全部に、本社内の取りはづし可能な機器類及び用度課や工作室の大

小用具備品類を全部社長公館内の一室へ運び込むよう指示が出された。そこで社員らは即時思い思いの職場から備品工具類を運び出し瞬く間に公館の一室がいっぱいになる程に持ち込まれて、一先づ作業は終了した。用度課に保管されていた補充用小備品が最も多く、相当な金目のものも無事に移し終えることが出来て安心だった。

ソ連占領下での操業再開はまづ考えられず、又中国も政情が安定するまでに相当の年月が必要となるものと判断していた。何時の日か中国が操業を始めたとき、今日の我々の努力を評価することがあるかも知れないと自らを慰めつつこの日の収納作業は完了を見た。

ある女性クリスチ안의満洲回想

語り：石川光子

解題・編集：甲賀真広

インタビューの背景

本稿は、編者の伯祖母である石川光子氏（以下、石川氏）へのインタビュー記録である。本来は石川氏に回想録を執筆していただくことで依頼していた。しかし、現在、石川氏は老人ホームに入居しており、コロナ禍の影響で家族でさえも対面はおろか通話すらできない状況となったため、執筆は困難であった。かような事情により、本稿ではこれまでの編者家族（以下、甲賀家）の歴史を簡単に整理した上で、石川氏へのインタビュー記録の一部を抜粋した。甲賀家に関する資料は安東会会報『ありなれ』の記事をはじめ、私家版の手記（『満洲の記憶』第6号）や書籍（甲賀純男『日系同胞10年の旅路』キリスト新聞社、2001年）も存在するが、インタビューにはそれらからはみることのできない一面が反映されている。

本インタビューは2016年10月22日に石川氏の自宅で行い、以降複数回の電話でのインタビューも行なっている。なお、石川氏は老人ホームに入居しているため本稿の執筆にあたって本人による確認が取れていないこと、また、文中の表記や表現は基本的に発言時の内容に基づいていることを予め断っておく。



図1 「中国丹東を訪ねて（1996年9月12～16日）」『ありなれ』第41号、14頁。

石川氏は1924年にアメリカで生まれた。石川氏の父、甲賀綏一（以下、綏一氏）が1905年に歯科医を志して渡米し、そこで生まれた12人兄弟の3女である。綏一氏はアメリカで伝道の道を志すようになり、神学校卒業後に牧師となった。しかし、石川氏が生まれた翌年1925年に甲賀一家は、アメリカで起こった日本人に対する排斥運動を受け、日本へ帰国することとなった。帰国の際に、綏一氏は「二世以

降の民族的発展を思うと、日本人としての誇りを背景とせねば、自然消滅の恐れあるを知り、子供らを日本にて教育して帰国せしむるにしかずと考へるようになったと回想しており、子どもたちに日本で教育を受けさせようと考えていたようである。ところが、日本に帰国しおよそ4ヶ月後には、牧師として満洲の安東へと移住した。「植民地気風」がアメリカと似ているという理由であった。

綏一氏は安東教会の牧師を務めたほか、在米経験を活かし安東中学校および安東高等女学校で英語教師も務めた。敗戦間際には「敵性語」とされたために英語教

師は辞したが、敗戦から翌年9月の引揚げまでも、満洲各地から引揚げに集まった日本人キリスト教信者と共に、牧師館の二階で礼拝を行っていた。

引揚げ後、綏一氏は保田教会（千葉県保田町）に赴任し、また石川四郎牧師（石川氏の義父）の薦めで1951年～1961年まで高岡教会（富山県高岡市）で牧師を務めた。晩年は東京に住む末子の家で暮らした。

このように石川氏を含め甲賀家は牧師であった綏一氏に連れ立って、アメリカ、満洲、日本を移動したのである。なお、以上の詳細は甲賀(2020)を参照されたい。



▲ 甲賀一家（昭和16年2月）

図2 家族写真（『ありなれ』第55号、47頁）

インタビューの実施状況

実施日時：2016 年 10 月 22 日 14 時 00

分～15 時 30 分

場所：石川光子氏宅

語り手：石川光子氏

聞き手：甲賀真広

記録編集：甲賀真広

インタビュー記録

甲賀：光子おばちゃんはどこで生まれま
したか。

石川：あたしアメリカ生まれ。アメリカ
生まれで、一回日本に帰ってきて、ま
た満洲に行ったの。

甲賀：それはいつごろ。

石川：大正 13 年に生まれて、翌年日本に
戻りました。それでまたすぐ満洲に行
って。だからアメリカと日本の記憶は
ないです。

甲賀：満洲でご結婚されて、引揚げたん
ですよ。

石川：そうです。終戦の年にあたし石川
（寛）と結婚して、だからもう、今年
で 70 年、結婚して。結婚してから引
揚げて。今は白十字に入ってます。満
洲では電信電話局っていうところに
勤めてた。放送局ね。それで牧師の息
子なんです。新京の教会の牧師の息
子だったんですよ。

甲賀：ひいおじいちゃんも牧師だったん
ですよ。

石川：そうですそうです。安東の教会で
ね。新京の教会でしたからずいぶん大
きな教会でしたよ。パパと中会ってい
う集まりがあるでしょ、そこで知り合
って。何の付き合いもしないでね、大
丈夫、牧師の息子だから大丈夫って言
うもんだからね。結婚したんですよ。

甲賀：教会同士の集まりがあったんです
か。

石川：牧師同士の。年に 2 回くらい満洲
で集まってましたね。それで年にいっ
ぺんくらい、10 月に日本で牧師の会
がありましたから、1 年にいっぺんは
日本に来てましたね。それは日本にい
る牧師が全部集まって。それをね、結
局うちのパパは楽しみにしてました
よ。自分の郷里も行けるしね。だから
それ楽しみにしてましたね。

甲賀：郷里は。

石川：千葉の人なんですよ。木更津の
ね。

甲賀：安東の教会はどんな感じだったん
ですか。

石川：日本人とね、朝鮮の方がいました
ね。満人はいなかったね。朝鮮の人
はいましたね。

甲賀：満人にキリスト教の人がいなかった
ってことですか。

石川：あります、あります。日本の教会に
は来なかったね。だけど一年にいっぺ
んくらいは集まったりしてましたよ。
交流はやってましたね。

甲賀：そうですか。説教とかは日本語で

すか。

石川：そうでしたね。通訳もいるしね。日本の朝鮮語がわかる人が通訳してましたね。でも朝鮮の人もね、あの時日本が統治してましたからね、みんな日本語はもう、日本語ができなかったら働けませんでした。だからみんな日本語ができていましたね。

甲賀：それって安東が特別だったんですか。

石川：安東がやっぱり朝鮮の人が多かったですね。国境が近いからね。だって鴨緑江渡れば、橋渡ればすぐですもん。

甲賀：そうですね。おじいちゃんをよく買い出しに行かされたって言ってましたけど、光子おばちゃんも行きましたか。

石川：行きました、行きました。

甲賀：どういう感じだったんですか。

石川：もうね結局ね、満人、満人ですよ、満州の人、もう全部日本語ができます。だから私たちがねかえってね、中国語を覚えられないですよ。日本語が全部通じるんです。だから、私たちは向こうでずっと育ちましたけど、支那語。満洲語。覚えません。向こうの人が日本語で話しますからね。日本人に対しては全部日本語、それだけね結局あの日本人がその時代は日本人がレベルはちょっと上で、満人のほうがみんな下仕事は全部してたんですよ。道路掃除とかね。雪降ったら日本人が行かなくても全部やってくれるしね。

満鉄っていうのが結局、全部こう開いていったんですよ。私は安東の駅の満鉄でだいぶ勤めました。駅で小荷物係っていうところがありましたから、そこで働きました。すぐ近くに駅長さんがいたんですよ。あたしが家でゆっくりしてたらね、「あの、ちょっと働かないか」って言われてね。

甲賀：そうだったんですか。何かそのときのことで、覚えていることがありますか。

石川：駅に勤めておりましたからね。兵隊の車が北支に行ったりするのはよく見ましたよ。

甲賀：兵隊さんともよく話されてたんですか。

石川：弁当とかをそこで差し入れをやっぱりやってましたよね。

甲賀：へえ、当時の日本の兵隊さんはどんな感じだったんですか。

石川：兵隊よりも憲兵っていうのが威張ってました。それは警察や軍人ではなく、憲兵っていうのがいるんですよ。兵隊にも威張るし、いわば取り締まり役のようなことをしましたね。

甲賀：そうですね。満洲では他に戦争を感じるようなことはありましたか。

石川：アメリカとね戦争するって言った、うちのパパはアメリカにいましたからね、本当バカ、日本人はバカだって言ってね、あんな大きな国とね、さんざんやられるからなんでって、パパアメリカ知ってますからね。

甲賀：もう勝てないっていうのわかってて。

石川：わかってたんですよ。犠牲者が増えるばかりだって言ってね。そのころは結局、国民全体が行け行けてね。そしてハワイなんか爆弾落としたこと、パパものすごく怒ってましたよ。だってほら、うちは長男と次男はアメリカにいましたからね。アメリカの加州大学出てるんですよ。そっち行ってるからね。あとパパは牧師してるでしょ。だから時々ね、警察の特高ってのが礼拝に出てきてましたよ。どんなことをやってるか見に。でもさ、満洲もあんなにいい時の満洲も戦争で負けてザーッと引き揚げて来ましたがね。ずいぶん満鉄やなんかがね、本当文化を広げてきましたからね。でも、もう負けたら最後、外にも出られませんでしたよ。負けたからどんなことされるかと思って。でもね満人はそんなにね、激しいところがないの。優しい、穏やかなんですよ。ですから争いなんて全然なかったね。終わっても。かえって気の毒だって顔して見てましたね。

甲賀：そうですか。引揚げ後はどのような生活だったんですか。

石川：私のとこの寛はね、すぐにねあの琵琶湖ホテルっていうところで働いてたんですよ。パパの姉がアメリカで勉強してて琵琶湖ホテルにいたんですけど、進駐軍が来ていて。だから

すぐそこで働いたからね、収入には困らなかったんですよ。でそこにて、自分はどうしてもやっぱり放送のほうに戻りたいっていうので、その当時民間放送っていうのができたのね。だから放送局に戻ったの。長崎の放送局に行って。で、長崎から今度はあの一日本短波放送ってあるでしょ。東京にあるんですよ、短波放送ってのが。そこへ入って最後までそこにいたんです。それはあのTBSの関係会社でね。最後のときはね、自分の兄がTBSのね、ちょっとお偉方だから、引っ張ってもらってだから最後はTBSの子会社だったの。だから生活には困らなかった、67まで働いたからね。

甲賀：そうですか。満洲の話に戻りますが、一番楽しかった思い出ってなんですか。

石川：そうですね、大連に夏休みに3週間くらい、海に泳ぎに行きました。泳いだのが一番。それで大連のほうが進んでる感じで、大連と安東と比べると、大連のほうずっと都会であって、文化も違いましたね。もちろん、なんとなくは一緒なんですよ。日本のほうが上だっていうのは。でも、満人というのは心が広くてね、怒鳴ったりそういうことはしませんね。日本人のほうが気短かね。やっぱり大陸で育ってますからね、怒ってどうのこうのっていうのはないね。だから喧嘩なんてもんは、満人との喧嘩なんてのは覚えてま

せんね。あとすごく家族を大事にしますからね、向こうの人はね。何かお願いしても、おっけおっけ、はいはいってなんでも言うこと聞いてくれましたね。こうしてやってくれって言うと、一生懸命やってくれてね。だから私は支那人は好きです。

参考文献

甲賀真広 (2020) 「ある牧師の国際移動と教会ネットワーク——アメリカ・満洲・日本」 佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』東方書店。

寄贈資料目録

本目録には、2020年8月1日から2021年8月31日までに本研究会に寄贈していただいた資料を掲載しました。他にも貸与していただいた資料や写真、ハガキ、書簡、切抜も多くありますが、紙幅の関係上ここでは省略させていただきます。また、多数の資料を提供していただいた方の資料名は一部のみ（5冊まで）紹介させていただいております。

本研究会では皆様からいただいた資料

をより多くの方々にご利用していただけるように整理・保管し、ニューズレター発行の機会などを通じて順次公開していく予定であります。

本研究会に貴重な資料を寄贈・貸与していただいた方々には、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。また、今後も継続して資料の収集を行っていく所存ですので、御理解・御協力の程よろしくお願い申し上げます。

石崎清之氏

- ・笠木絵津子『私の知らない母』クレオ、2019年。

上田廣氏

- ・上田次郎『満鮮の旅』研成社、2020年。

梅澤順子氏

- ・満鉄会『満鉄会報』第251号、満鉄会情報センター、2016年。
- ・日高明義「梅澤先生父上の手記」（原稿）、2017年。

大野豊氏

- ・吉富勝『アジア経済の真実——奇蹟、危機、制度の進化』東洋経済新報社、2003年。

加藤精也氏

- ・加藤精也編『加藤正司の生涯と研究論文集——ペスト菌伝播動物を世界で初めて疫学的に特定した医師』（私家版）、2021年。

菊池暘子氏

- ・錦州会事務局編『錦州会報』第5-44号、錦州会、1993-2020年。

楠瀬慶太氏

- ・高知戦争資料保存ネットワーク編『高知の歴史資料を残す・伝える——紙資料保存の手引き』高知大学小幡尚研究室、2019年。
- ・楠瀬慶太「地域における近現代資料の記録——高知戦争資料保存ネットワークの活動（会員の論文・レポート・支

部報告)』『西南四国歴史文化論叢よど』第20号、西南四国歴史文化研究会、2019年。

- ・満洲の歴史を語り継ぐ高知の会編『第2回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集——2020年度活動報告集』満洲の歴史を語り継ぐ高知の会、2021年。
- ・高知戦争資料保存ネットワーク編『地域資料叢書 20 九州大学大学院比較社会文化研究科地域資料情報講座編——高知県近現代資料集成 I』(DVD)、高知大学小幡尚研究室、2021年。
- ・高知戦争資料保存ネットワーク編『地域資料叢書 20 高知県近現代史料集成 I——目録集』高知大学小幡尚研究室、2021年。

倉持哲雄氏

- ・満洲電々追憶記集（赤い夕陽）刊行会編『赤い夕陽』『赤い夕陽』刊行会事務局、1965年。
- ・満洲電々恩給推進本部編『満洲電々恩給運動について』満洲電々恩給推進本部、1971年。
- ・飯山達雄『遥かなる中国大陸写真集 1——満洲・蒙古の大地』国書刊行会、1979年。
- ・全電通退職者の会編『あゆみ——結成10周年記念 あの日あの時全電通退職者の会10年の歴史』全電通退職者の会、1981年。
- ・全電通青森県支部退職者の会編『戦争と平和——旧満洲引き揚げ者の記録』

第5号、全電通青森県支部退職者の会、1982年。

- ・他多数の満洲電信電話株式会社の関連資料あり。

古宮保子氏

- ・吉永重夫『大陸に新天地を求める父の生きた記録——悲劇の通化事件にも遭遇』新風書房、2021年。

立松俊哉氏

- ・山本宣親編『図書館森時代』日本地域社会研究所、2005年。
- ・石山永一郎編『彼らは戦場に行った——戦争と平和』共同通信社、2009年。

玉井佐和子氏

- ・『戸塚巍収集写真資料』（私家版）、作成年不明。
- ・『満洲鉄道一万軒開通記念切手』南満洲鉄道、1939年。
- ・他多数の植民地写真、アルバム、絵葉書などの資料あり。

丹羽千代子氏

- ・山口重次『満洲建国——満洲事変正史』行政通信社、1975年。
- ・猪伏昌三「大陸育ちの戦中派」(原稿)、2013年。
- ・日中交流センター編『好 知られざる中国』第18-19号、名古屋亜東書店、2012-2013年。

萩原隆氏

- ・『錦州の古蹟——萩原隆資料』(複写)、作成年不明。

秦源治氏

- ・清水正巳編『大連新名所 連鎖商店御案内』大連連鎖商店事務所、1929 年。
- ・神鳥左太男編『大連土産の栞』大連連鎖商店、1930 年。
- ・『大連案内略図』みやげものや(大連)、1937 年。
- ・大連学校関係絵葉書 11 枚。

細川呉港氏

- ・東洋文化研究会編『もう一度アジアを見直そう日本人——アジア雑記帳・文化と歴史』東文研編集委員会、2020 年。

堀川トミ子氏

- ・中島敬介編『切れて、続いて ゲートか、壁か——EURONARASIA18』奈良県立大学ユーラシア研究センター、2021 年。

古川千賀子氏

- ・古川ゆり(語り手)、古川千賀子(編集)『私の満州追想記——子孫に語り継ぎたい思い出』(私家版)、2021 年。

村越象氏

- ・山崎鑒一郎『大満洲国風景』大正写真工芸所出版部、1932 年。
- ・新京第一中学校第一陣会編『40 周年記念号』新京第一中学校第一陣会本部、1973 年。
- ・長春学園編纂委員会編『長春学園 続——敗戦直後の旧満州で激動の歴史の狭間に短く咲いた学園 その記録と思い出』長春学園の会、2003 年。
- ・斎藤武男『私の昭和史——この世を花にするには』(私家版)、2005 年。
- ・新京第一中学校第一陣会 12 期生文集編集委員会編『60 年を振り返ってⅡ——1945—2007』新京第一中学校第一陣会 12 期生文集編集委員会、2007 年。
- ・他多数の新京中学校校友会の関連資料あり。

(文責：尹国花)

2020 年度（2020 年 8 月～2021 年 8 月）

活動記録

本活動記録には、2020年8月1日から2021年8月31日までに「満洲の記憶」研究会で行った活動について、大会報告と調査記録とに分けて掲載しました。

本研究会では会の発足以来、年2回の大会を開催して関連情報に対する認識を深めることに加え、引揚者団体の会合への

参加、インタビュー、面会訪問、資料調査などの調査活動を進めています。本年度も手紙やメール、電話などで「満洲の記憶」に関する多くの情報を本研究会にお寄せいただきました。この場をお借りして深く御礼を申し上げます。

大会報告

2020 年度秋季大会報告

2020 年度秋季大会は、2021 年 3 月 24 日にオンライン（ウェブ会議システム Zoom）形式で開催した。第 1 部では山本潤子氏を迎え、『認罪』としての中国人遺骨送還運動——福島県『中国人殉難烈士慰霊碑』と『満洲国軍』日系軍官・大槻市郎の経験を事例として」と題する研究報告をしていただいた。続けて、第 2 部では佐藤仁史、菅野智博、湯川真樹江、大

石茜、森巧、甲賀真広による報告「満洲引揚史と日記史料」において、本研究会が収集した満洲引揚げ日記 4 種の整理情況について、当該史料のもつ可能性との関連で紹介した。今回はオンライン開催であったのにもかかわらず、約 30 名の方々に参加していただいた。参加者の間で様々な議論が展開され、所期の目的を達成できた。

2021 年前期大会報告

2021 年度前期大会も引き続きオンライン（ウェブ会議システム Zoom）形式で開催した。今回は、第 1 報告として飯塚靖氏を迎え、「戦後中国東北における左翼日本人の動向——長春・瀋陽を中心に」というタイトルで研究報告を行っていただいた。続けて、第 2 報告では西崎純代氏

を迎え、「満鉄一般社員の戦後——引揚後の職業活動」というタイトルで研究報告を行っていただいた。当大会ではコロナ禍における制約によりオンライン開催となったのにもかかわらず、約 30 名の方々に参加していただいた。2 つの研究報告に対して、参加者から多数の示唆に富むコメントをいただき、興味深い議論が展

開されるなど、所期の目的を達成できた。

調査活動記録

2020年8月22日 第5回企画運営委員会（オンライン） 参加者：今井就稔、尹国花、梅村卓、大野絢也、大石茜、菅野智博、甲賀真広、佐藤量、佐藤仁史、西井麻里奈、朴敬玉、森巧、山本一生、湯川真樹江

2020年8月22日 2020年度春季大会（オンライン） 参加者：今井、尹、梅村、大野（絢）、大石、菅野、甲賀、佐藤（量）、佐藤（仁）、西井、朴、森、山本、湯川

2020年11月29日 高尾山満洲関連団体の慰霊碑訪問 参加者：大野（絢）

2020年12月22日 錦州会関係者小坂宣雄氏への聞き取り（電話） 参加者：大野（絢）

2021年3月24日 第6回企画運営委員会 参加者、飯倉、今井、尹、梅村、大野（絢）、大石、菅野、甲賀、佐藤（量）、佐藤（仁）、西井、朴、森、山崎、山本、湯川

2021年3月24日 2020年度秋季大会 参加者、飯倉、今井、尹、梅村、大野（絢）、大石、菅野、甲賀、佐藤（量）、佐藤（仁）、西井、朴、森、山崎哲、山本、湯川

2021年4月11日 拓魂祭（満蒙開拓慰

霊祭）参加（オンライン） 参加者：菅野

2021年4月19日 第48回満蒙大陸林業人物故者慰霊祭（旧外林会）参加 参加者：大野（絢）

2021年6月6日 高幡山明王院金剛寺（高幡不動尊）斐徳会建立供養塔訪問 参加者：大野（絢）

2021年7月1日 秦源治氏への聞き取り（電話） 参加者：大野（絢）

2021年7月28日 加藤春千代氏訪問 参加者：菅野、甲賀

2021年8月10日 第7回企画運営委員会 参加者：飯倉、今井、梅村、大野（絢）、菅野、甲賀、佐藤（量）、佐藤（仁）、朴、森、湯川

2021年8月10日 2020年度秋季大会 参加者：飯倉、今井、梅村、大野（絢）、菅野、甲賀、佐藤（量）、佐藤（仁）、朴、森、山本、湯川

2021年8月28日 小川和彦氏宅（犬塚信太郎氏曾孫）訪問 参加者：大野（絢）、菅野、佐藤（仁）

（文責：今井就稔）

おしらせ

資料提供のお願い

「満洲の記憶」研究会では、満洲に関する資料を収集しております。「寄贈資料目録」に示したように、これまでに書籍や会誌、写真、ハガキ、書簡など多数の資料を寄贈・貸与していただきました。これらの資料は満洲の記憶を継承する上で極めて貴重な資料であると考えております。

ご提供いただきました資料は本研究会が整理・管理し、学術研究において活用いたします。資料の公開方法は、資料目録を作成して本ニューズレターに掲載させるという形式を採ります。提供資料に

含まれる個人情報等には深甚な配慮をいたします。

また、お手持ちの資料には、貴重なもの、思い入れの強い品でお手元に置いておかれたいものなどもありのとおもいます。資料のご提供ではなくとも、本研究会の編集委員メンバーによって複写・撮影等をさせていただくという方法もございます。そのような希望がありましたら、ご相談いただければと存じます。ぜひ情報を本研究会までお寄せくださいますよう、ご協力お願いいたします。

カンパのお願い

「満洲の記憶」研究会では、皆様からのカンパを募っております。本研究会は若手研究者が中心となって運営しているため、これまで企画委員の寄付によって活動を続けてまいりました。

しかし、活動範囲が海外および日本全国に拡がり、予想以上に多くの資料が集まったことにより、資料調査や整理・電子化などに使用する資金が慢性的に不足する状況となっております。そのため研究活動の資金使用のみに限定した口座を開設し、研究会の活動に御賛同いただける方から、御支援を賜りたく存じます。

カンパは1口1,000円で、文末に記載してある銀行口座へお振込いただけたら幸いです。

なお、御支援をいただいた方には、ニューズレター内にてお名前を掲載して御支援いただいたことを皆様に紹介させていただく予定です（掲載を希望されない方は事前に御連絡ください）。また、カンパして下さった方は、必ず本研究会宛にメールまたはお手紙で御連絡ください。

研究会としても誠実かつ積極的に活動をしてまいりますので、御支援のほど何

卒よろしく願い申し上げます。

カンパ者芳名録

- ・匿名 50 口
- ・匿名 30 口
- ・秦源治様 30 口
- ・匿名 5 口

「満洲の記憶」研究会銀行口座

銀行：三井住友銀行

支店：国立支店（店番号：666）

種類：普通預金

口座番号：8088124

口座名：菅野智博（カンノ トモヒロ）

会員募集及び情報配信のおしらせ

本研究会は随時会員を募集しています。年会費は無料となっております。会員には、ニューズレター及びイベント情報の配信を行います。入会希望者は次の連絡先まで御連絡ください。

ブログ：<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>

Facebook：「満洲の記憶」研究会

<https://www.facebook.com/groups/359559330877470/>

新聞での本研究会活動紹介

本年度も、「満洲の記憶」研究会の活動について新聞上で紹介していただきま

した。以下、掲載された記事を時系列順で一覧にして紹介します。

2020 年 8 月 12 日版『読売新聞(夕刊)』
「『満州国』政府、幻の移転計画——終戦直前の工事日記発見」

“Manchukuo govt” , *The Japan News*, 12th August, 2020.

“Journal sheds light on secret relocation plan for

2020 年 9 月 2 日版『読売新聞(朝刊)』

「日記分析 満州の記憶に光——生活変遷、敗戦後の混乱 複眼的に」

《满洲记忆》（“满洲记忆”研究会通讯）第8期

中文目录

被巩固的殖民地记忆：秦源治“大连、旅顺明信片收藏”之解说

..... 大野绚也、佐藤仁史、梅村卓

秦源治“大连、旅顺明信片收藏”目录

..... 收藏：秦源治

编辑：大野绚也、佐藤仁史、梅村卓

洪熙の残照（2）

..... 作者：奥村松平

解说：菅野智博、甲贺真广、今井就稔

编辑：奥村武彦、上田裕子、甲贺真广

一位女基督教徒的满洲回忆

..... 讲述：石川光子

编辑：甲贺真广

寄赠资料目录

2020 年度“满洲记忆”研究会的活动记录

会务公告

Memories of Manchuria (Newsletter of the Society for “Memories of Manchuria”)

No. 8

Contents

Reinforced Colonial Memories: Commentary on the Hata Genji’s

Postcard Collection of Dairen and Ryojun

..... OHNO Junya, SATO Yoshifumi, UMEMURA Suguru

List of the Hata Genji’s Postcard Collection of Dairen and Ryojun

..... HATA Genji, OHNO Junya,
SATO Yoshifumi, UMEMURA Suguru

Afterglow in Hong Xi Street, part 2

..... OKUMURA Matsuhei, OKUMURA Takehiko,
UEDA Yuko, KANNO Tomohiro, KOGA Masahiro, IMAI Narumi

Recollections of a Christian woman from Manchuria

..... ISHIKAWA Mitsuko, KOGA Masahiro

List of Donated Materials

Chronology of the Society for “Memories of Manchuria” Activities

Notice

編集後記

多くの方々のお力添えをいただき、『満洲の記憶』第8号を無事刊行することができました。本号は史料解説1編、史料目録1編、回想録1編、インタビュー記録1編という構成になっています。

各コンテンツについて簡単に紹介します。解説および目録で紹介する秦源治氏「大連・旅順絵葉書コレクション」については、「故郷」の風景を追い求めて個人収集された絵葉書が、引揚者団体の活動の中で紹介されることにより、集合的な植民地記憶を補強させるという興味深い特徴を持っていたことが指摘されています。前号から連載している回想録「洪熙の残照」は、1945年の8月上旬から10月上旬までの部分を掲載しています。特に中心的な内容の1つである日本人経営者と中国人労働者の交渉について、そこにいたる経緯や奥村松平氏の心理描写が克明に記されています。また「ある女性クリスチャンの満洲回想」は、筆者の伯祖母である石川光子氏のインタビューをまとめています。牧師の娘という視点からの語りは、キリスト教史的意義のみならず、言語環境や言語使用を分析する社会言語学における意義もあると思われます。

本号は既刊各号の持つボリュームを大きく更新しており、手前味噌ですが質・量ともにより充実した内容となっております。このように継続して充実した内容をお届けできることをとても嬉しく思います。コロナ禍という特殊な状況ではありますが、今後も皆様のご支援に感謝しながら研究活動に励んでまいります。今後ともよろしくご愛読ください。（甲賀真広）

『満洲の記憶』第8号

発行日：2021年10月1日

編集：「満洲の記憶」研究会編集委員会

第8号編集委員：

今井就稔 尹国花

梅村卓 大野絢也

郭嘉輝 菅野智博

甲賀真広 佐藤仁史

林志宏

発行：「満洲の記憶」研究会

〒186-8601 東京都国立市中2-1

一橋大学大学院社会学研究科

佐藤仁史研究室 気付

Tel・Fax：042-580-8885

◇本誌は年刊オンラインジャーナルで、毎年10月に刊行されます。本会学年暦は、2020年度は8月1日から翌年8月31日、2021年度以降は9月1日から翌年8月31日とします。

◇本誌は一橋大学機関リポジトリにおいて配付しています。

[http://hermes-ir.lib.hit-](http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27095)

[u.ac.jp/rs/handle/10086/27095](http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27095)

◇「満洲の記憶」研究会へのアクセス

・研究会ブログ：

<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>

・研究会 Facebook：

[https://www.facebook.com/groups/35955](https://www.facebook.com/groups/359559330877470/)

[9330877470/](https://www.facebook.com/groups/359559330877470/)

ISSN 2189-390X